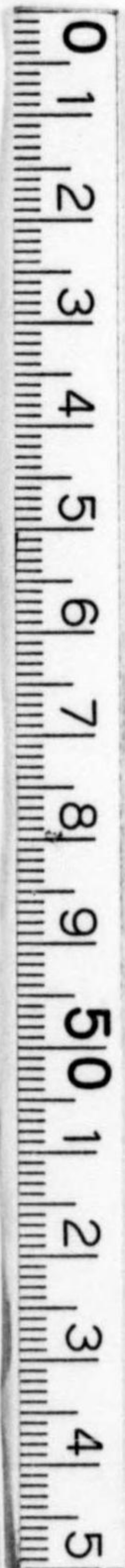


61-412

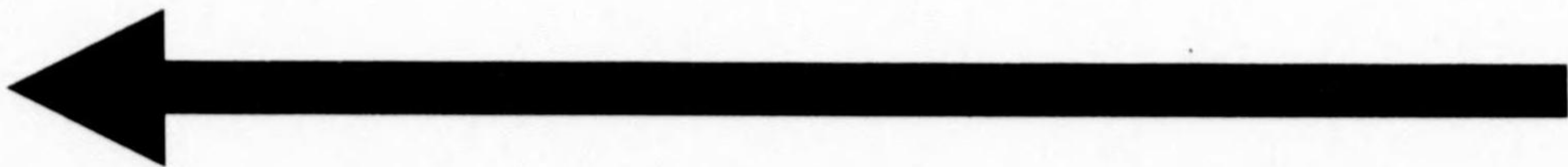


1200501274679

412



始



H-92-4



工學博士 佐藤定吉 著

優
生
學
と
宗
教

東京 雄山閣 版



序

優生學と宗教、これらはみな私の専門以外の學問である故に、之を専門的學術の見地から論文を書く資格を私は備へておらない。たゞ平素僅少ながら科學と宗教の關係を考へてゐる關係から、この兩者の關係に就ては無關心ではなかつたが、著述など致そうとは夢にも思はなかつた。處が、今回依頼を受けて執筆する事になり、夫々の専門家に適當な文獻をと參考資料を伺つたが、生憎參考すべき良書は殆んど一冊も見出だし得なかつた。止むを得ず、優生學が取扱ふ重要問題について宗教的眞理からの見方或は所見の一端を披瀝するに止まり、少しも學取的取扱方をなし得なかつたことは遺憾である。而も兩者とも科學的實驗を越へたる内容を取扱ふ故に、更に困難が増し加はり、ともすれば獨斷の弊を免れ難い。この點は御賢察を乞ふ次第である。

本文起稿にあたつて文獻蒐集等に關し多大の御勞をお取り下さつた永井潜博士に對して深甚の感謝と敬意を表す。

なほ識者諸賢よりこの問題について御垂教と御叱正とを賜らん事を乞ふものである。

昭和八年六月廿三日

佐藤定吉

優生學と宗教 目次

緒論 一

宗教とは何ぞ 三

第一章 宗教と文化 七

(一) 文化と人生 七

(二) 福音の眞理とは何か 一〇

(三) 永遠の救とは何か 一三

(四) 聖書は何を教へるか 一六

第二章 民族興亡と神の眞理 一五

(一) 民族興亡の原理 一五

(二) 永遠の生命 三〇

(三) 神の聖意 三三

(四) 人類完成と神の約束 三五

目次

(五) 神の啓示 三六

第三章 人生の意義 四二

(一) 人生の光 四二

(二) 神の光なり 四二

(三) 宗教の光にて観たる人生 四四

(四) 人生の本質 四九

(五) 天地の相互關係 五〇

第四章 優生學と宗教的救 五二

(一) 優生學と宗教の相互關係 五二

(二) 宗教と救 五五

(三) 律法と救 六一

(四) 罪と死 六三

第五章 信仰と宗教 七〇

(一) 神の實在 七〇

(二) 信仰とは何ぞ 七二

(三) 自然科学と信仰 七九

(四) 人間の不善と虚偽 八三

第六章 救とは何ぞ 八五

(一) 眞の救 八五

(二) 救の根源 八九

(三) 救の三階梯 九二

第七章 信仰と人間の變質 九六

(一) 靈が主か客か 九六

(二) 靈の能力 九八

(三) 悪人が善人への維新 一〇三

第八章 信仰と生殖質の變化 一〇八

(一) 靈と肉との關係 一〇八

(二) 信仰の著大なる影響 一一三

(三) 因縁と解脱 一二六

第九章 胎教と信仰

- (一) 種蒔の譬……………三三
- (二) 胎教と靈性……………三三
- (三) 靈と生命……………三六
- (四) 胎内教育と聖者……………三三
- (五) 結婚と信仰……………三六

第十章 遺傳と信仰

一四

第十一章 優生學と宗教

一五〇

- (一) 宗教と倫理道德法律……………一五〇
- (二) 神の審判……………一五三
- (三) 罪の審判……………一五六

第十二章 靈的進化と優生學

一六三

- (一) 靈的飛躍……………一六三
- (二) 信仰の道……………一七〇

(三) 人生は靈的産褥……………一七二

第十三章 靈的發育と環境

一七七

- (一) 靈的發育と環境……………一七七
- (二) 優境學の中心軸……………一八〇
- (三) 肉と靈……………一八五
- (四) 人生の根本革命……………一八九

第十四章 優生運動と宗教

一九二

第十五章 劣生者を如何になすべき哉

一九九

- (一) 劣生者とイエスの福音の眞理……………一九九
- (二) 否定より肯定へ……………二〇三
- (三) 神の聖旨……………二〇五

第十六章 優生者とは誰乎

二〇八

- (一) 優生學の宗教的意義……………二〇八
- (二) 見神の道……………二二三

第十七章 神の實證とその本質……………二九

(一) 超論理的合理の證明法……………二九

(二) 神の實證……………三〇

(三) 神の見方……………三〇

(四) 自然神教……………三一

(五) 汎神論の見方……………三二

(六) 唯一神教……………三三

(七) 神は愛そのもの……………三四

(八) 信仰の中心點……………三五

(九) 生命のパン……………三六

目次終り

優生學と宗教

工學博士 佐藤定吉



優生學と宗教の關係は、科學的文化と永遠の生命との關係を論ずるに歸着するが故に、決して之を輕々に見逃がしてはならぬ重大問題の一つである。

近代三百年は、科學を主潮とする人間文化の黄金時代であつた。近代文明の大部分が科學に基き、單に物體を取扱ふに反し、優生學は遺傳學を基礎として民族興亡に係はる人間生命の根元を取扱ふ。故に、その使命は極めて重大であるが、更に宗教眞理は神と人との永遠の關係を取扱ふ故に、その使命は、なほ更に重大である。宗教眞理は天地宇宙全般の眞理であるに對し、優生學は單に地上生活の眞理である故に、前

者は立體的であるに反し、後者は平面的である。而して兩者は靈と肉の如くに不即不離の關係に立つものと私は考へる。

全世界が今や己が進路に一大轉向を試みて居る現代學術も亦一つの根本的轉向臺上に乗せられて居る事を知る。現代の物質文化が若し人類窮極の大目的の標的に對して中心を外づして居たのであつたならば、夫が如何に華やかなものであつても、それは恰も金銀の鑛脈が無人島にきらめいて居るのと何の選ぶ所があらう。文化の價値は人類永遠の目的遂行に於てのみ評價される。

現代文化の目標は最大多數の最大幸福に焦點化される。併乍、此處に一つの極めて重大な根本的問題が横はる。それは「人類の最大な幸福とは何ぞや」との問題是れである。此の中心問題が先づ先行して決定されなければ、一切の文化は暗夜に空を狙ふ射手である。折角の努力も空の空に終つてしまふではないか。

宗教は實に、此の中心的問題が何であるかを明白に教へ、更に眞の幸福とは何を意味するかを端的に明示するものである。世の所謂宗教なるものが、この最高目標を明示しないならば、宗教の形體を有するとしても、それは眞生命を有しない宗教である。

それは眞の宗教ではなくて、似て非なるものである。宗教の優劣は人生の最大目的を明示し且つ之を具現せしめる度合に依つて評價され得ると思ふ。

故に優生學の主唱する優生者の増加運動も人類窮極の目的が何であるかを決定した後に初めてその方針を決定すべきが至當であると私は信ずる。

故に優生學は、先づ宗教眞理を水先案内となし、人生窮極目的を燈明臺として進まざれば、存在の價値を失ふべきを恐る。

宗教は實に一切の文化を指導すべき天の燈明臺である。この光なくして人生は北極星と羅針盤を失へる航海に異ならない。優生學と宗教。此の二つは互に離すべからざるもの、前者は後者の基礎に立つて始めて、永遠の意義を生ずるものと私は確信する。

宗教とは何ぞ

私は此處に宗教について詳細に論ずる餘裕を持たぬ。只宗教眞理が何であるかを明かにすれば足りる。

宗教とは神に對する人の道を云ふ。現代に於ては宗教に對する認識不足の爲めに、眞の宗教ならざる他者を宗教の如くに認めて居る場合が少くない。世人の所謂宗教なるものを大別して見ると、凡そ三つに分離し得ると思ふ。

第一、神なる觀念を利用して、自己の利慾達成てふ目的の手段たる宗教。

現代には此の種の宗教に屬する信者が如何に多いかは、蓋し吾人の想像以上であらう。自己の病氣平癒の爲め、自己の商賣繁昌、家内息災延命の爲め、災難除けの爲め、自己一切の利益の爲に神佛を利用せんとする徒輩が皆此の流儀の信者である。斯かる宗教を利用して自己の政策實行の具に供せんとする無理解の政治家、教育家達が現代には頗る多い。

實に神聖にして犯すべからざる尊き活ける神を、自己の下僕の如く、また發熱したる時のアスピリンの如くに考へること、之にまさる胃瀆はない。神罰その民に臨むは當然でないか。これらは宗教の假面をかぶる惡魔の所業である。

第二、人本主義の宗教。

人間を本位とする宗教がある。これは自己の安心立命と自己の解脱涅槃をのみ

主眼とする。天地の主なる神の意志よりも自己の安心立命を第一義に考へる故にたとへ解脱によつて世俗の名譽利達を超越し、宗教を悪用して自己慾望達成の罪に陥らざる者と雖も、彼等は自己の悟得の光以上には出られない。飽く迄も人本主義的に自己の安心立命に重きをおく。故に寂滅の宗教に偏し易い。その結果は、光明を求めつゝも、自己内心の光明のみにて、天地宇宙を貫く活ける神より來る眞理の光明を仰ぎ損じる場合が多い。従つて、宇宙と全人類完成の神の一大目的に對して焦點が外れ勝ちであり、抽象的思惟に陥り易く、具體的に神を見あげる光に乏しい。この場合には人類完成の内容が漠然模糊の状態におかれる故に、優生學にて論せんとする今後の各民族の到着點を決定的に指示し難い憾みがある。優生學を論ずる見地に於ては、更に積極的に人類完成の大目標を明示すべき宗教が期待せられる。

第三、神中心主義の宗教。

第一の宗教は自己の利益中心主義であり、第二は人間中心主義の宗教であるが、第三は神中心主義の宗教である。前二者は神が人、爲であるとなすに反し、後者は人が神の爲であると認める處に根本的相違がある。後者は神の眞理成就の爲めには、

自らの患難をも歡び迎へんとする犠牲的宗教である。自己には如何に損失であらうと神の眞理に絶対服従せんとする。而して神への絶対服従の中には人間としての絶対自由と絶対幸福の境地を發見するもの、是れ神中心主義の宗教である。

宗教眞理發達の順序は第一より第二に、第二より第三へと進むべきが至當であると思ふ故に、私は宗教を神中心主義に立つべきものと認めて本文の論旨を進めたい。乃ち古來の佛教、儒教、神道、武士道等は或意味に於てキリストの宗教眞理に對する舊約であり、その高峰に来るべき一階梯であると私は考察するものであるから、優生學と宗教の關係に就ても主として聖書が教へる宗教眞理を對象として、その光に照らされて優生學の説く處を批判して見たいと思ふのである。これが此の小著に於いて採るべき私の立場であるから豫め諒解しておいていただきたい。

第一章 宗教と文化

(一) 文化と人生

優生學と宗教の關係に入るに先立つて、私は先づ一般文化と宗教との關係を論じて、兩者の立場を明かとなし、今後人類文化の向ふ處を指摘しておきたい。此の一事さへ明瞭となれば優生學が今日獲得して居る基礎の上に如何なる殿堂を建立すべきか、その方針が自ら決定してくると信ずる。

一般に文化と云へば、人間生活の内容を豊富にし、人類の目的達成の爲めの一手段であると考へられて居る。而して文明は一時代に關與するものを意味し、文化は永遠に人間生活を價値づけるものを云ふ。

即ち汽車、汽船、電話、飛行機の發達の如きは文明であり、藝術、哲學、文學、宗教等は文化に屬す。けれども此處に云ふ文化は廣義に解して、文明と文化の兩者を總稱して論じて行きたい。而して文化の中の宗教が科學中の優生學と如何なる相互關係を有

するかを批判すれば、本著の使命は果せると思ふ。

文化は人類が念願する最大幸福を獲得し得べき道の進展する事を意味するが、多くの場合は汽車、汽船や電話やラヂオや飛行機が發展し法律制度や政治組織乃至は教育制度が確立して國民全般が此の恩澤に浴し得るに至つた事を、文化が大に進歩したと云ふのである。成程古代の野蠻蒙昧な時代に比すれば文化は頓に飛躍したには違ひない。三百年以前の人々が再び墓場より甦生したとするならば、その進歩は正に隔世の思ひがあるに違ひなからう。現代人はかゝる文明と文化を謳歌して居る。吾人と雖も之を賞讃するに人後に落ちるものでない。

然しながら、靜かに神の前に反省して見ると超スピード的に文化が躍進したに比例して現代人が昔の人々に比して幸福が躍進したと誰が云ひ得るであらうか。事實は正反對であり、現代程惱みの多い時代は他になかつたではないか。

富は人をして幸福ならしめると信する人々が多い。果して然るであらうか。事實を見よ。貧困者の不安にも勝つて現代の富豪は恐怖と死の不安に悩まされて居るではないか。富は貧困者と同時に富者からも幸福を奪ひ去つてしまつたではな

いか。金錢と物質だけでは斷じて人は幸福になれないとの眞理を現代に優つて徹底せしめられた時代が何處にあらうか。

教育にしても同様である。如何に碩學にならうとも智識のみでは決して眞の幸福は得られない。どうしても、その上に神より來る聖と愛の生命が加はらねば、全人類の目標とする眞實な幸福は獲得せられないとの事が、如實に明白となつて來た。現代の行詰りと懊惱はその最もよい實物教育である。

福音的宗教の眞理を抜きにしては、世界人類は眞實な幸福を受けられず又福音の光なしには全人類に係はる神の目的は解し難い。

文化が單なる人間を本位とする規準の上に立つ時は濫溺たる生命は消失する。神より來る宗教的眞理の上に建立さるゝに至つて、始めて文化は生きて來るのである。文化を殺して死物にするか、或は生かして幸福の源泉とするかの分岐點は正に福音的宗教眞理を人類が受け入れるか否かの一つにかゝつて居る。優生學なる一學問とその社會的重大使命を生かすか殺すかは、斯の如き眞理に歸るか否かによつて決せられると思ふ。

(二) 福音の眞理とは何か

福音とは永遠の救の眞理を云ふ。眞の宗教が人類に與へんとする處のものは、單に現在に於ける安樂幸福のみならず、未來永遠に亘る完全なる救である。

現代文化が包含する内容と宗教的内容との根本的相違が此の一點に懸つて居る。眞の宗教は決して現在の幸福を否定しない。けれども現在と永遠との兩者を比較して、永遠の生命を失ふならば、どんなに現世的快樂を犠牲にしても永遠の生命を勝ち得やうとするのが宗教である。

單に現世の見かけ上の幸福のみを標準として科學は進む。之に反して宗教は現在と共に未來永遠の救を目標として進む。

而して人間が眞實に幸福だと云ひ得る時は、永遠の生命を保證せらるゝ救の道を歩んで居る時に限る。此の永遠の生命が雲に蔽はれ行く處を知らざる迷路の十字街路に人々が残されるならば、如何に寶が山と積まれても、決して幸福は實感されない。眞の幸福とは、永遠生命の別名に他ならない。

人は生れ出づるや、直ちに母の乳房にすがりて生命の糧を求むる如く、人の心は永遠生命を谷川の水を慕ふ小鹿の如くにあへぎ慕ふ。人は常に何物かをあへぎ求めて人生の旅路を續けて行くが、自己の胸中に明かに求むる心だけは意識するも、果して何を求めて居るのかとの問題になると五里夢中であり、自己本來の姿を知らない者が頗る多い。寸尺をも辨じない暗室に入つて自分の手首を振つて見るがよい。手首を振つて居ると云ふ意識はあつても、何れの方向へ如何に振つて居るかは少しも見えない。自分の手があるのか無いのかさへ疑へば疑ひ得る。自分の手が何れの方向へ動いて居るかさへ知らない者は、之れ乃ち自己の周圍に光の無い證據である。自分の心が何を求めて居るのか、自己本來の眞相の見えない人は、自分の周圍から神の光を遮斷して居る暗室に住んで居る何よりの明かな證據である。光なくして人生の美と幸福と眞實性は分つて來ない。

天地の活ける神を仰いで宗教的眞理が光の如く自己の胸中を照す時、始めて永遠の生命が解つて來る。又自分が物心ついてより求めに求めて居たものが、永遠の生命そのものであつた事に氣が付いてくる。

斯く宗教的眞理の光から絶縁されて居る地上一切の文化は、如何にそれが人智の極であらうとも、暗室におかれた美しい一本の草花である。必ずや腐敗墮落し、人類を滅亡に導くは火を賭る如く明かである。宗教的生命の源を斷てる現代暗黒の實想が何よりも上述の眞理を裏書きして居るではないか。

(三) 永遠の救とは何か

「生ある者必ず死す」とは古來の信條であつた。かく信ずるから、一切が刹那主義と享樂主義になつて了ふ。現代を斯くも悲惨な迷妄の暗雲の下に投じたのは、此の「生者必滅」の思想に負ふて居る。現代人の理想と幸福の内容は榮耀榮華を極める事であり、奢侈安逸の放縱生活の許さるゝ富者たる事であり、多くの人々を傾使し得る權力にありつく事である。殆んど全部の國民が是を唯一の幸福の標準として汲々として刻苦努力して居る。

聖書は斯る愚かなる者に對して警告を與へる。「ある富める人、その畑豊かに實りたれば、心の中に議りて言ふ、『我如何にせん。我が作物を藏めおく處なし。』遂に云

ふ、『我斯くなさん、我が倉を毀ち、更に大なるものを建て、其處にわが穀物及び善き物を悉く藏めん。斯くてわが靈魂に言はん、『靈魂よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば安んせよ、飲食せよ、樂しめよ』と。宗教なき者の幸福は皆此處にある。然るに神彼に、『愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂取らるべし。然らば汝の備へたる物は誰のものとなるべきぞ』と云ひ給へり。己の爲に實を貯へ、神に對して富まぬものは斯の如し。』(ルカ傳十二章十七—二十)

人が感ずる眞の幸福はその所有物の豊かなるには依らぬ。吾等の肉體は眞實なる我を蔽へる上衣に過ぎぬ。此の事實を明かに體驗すべきである。遺傳の原則に基いて肉體精神共に優良なる子孫を増加せしめんとする優生學にありても肉體と精神と何れがより尊きか、更に何れが人間の本質なるかを熟慮しなければならぬ。兩者互に密接不離の關係を有するは勿論なれど、何れが本質であり何れが第一義的要素なるやを確かめ、第一義的要素に力點を置かねば人生に光は來らない。

優生學者は遺傳の原理に基き、人間は不死不滅であると説く。夫は實に生殖質が歴世歴代不滅相傳するからだと云ふ。之は眞に善き眞理の發見である。子孫をさ

へ與へられるならば、自己自身が少くも生きて居る。未來までもエンドレス・リングの一輪となりて自己は不滅にて存続して行くであらう。代々を重ねる度毎に自己の分量は幾十、幾百分の一に減少するにしても、生き得て居られる事は大なる希望であり、慰藉である。この重大なる眞理を發見したるワイスマンに滿腔の敬意と謝意を表せずには居られない。乃ちこれだけの光を持つた丈けでも刹那的享樂主義は幾分緩和される。永生の光明の片鱗に觸れさせてくれるからである。確かに此の立場から暗黒に閉ざれし現代人に優生學は一つの光を投げかけてくれる。然しながら之を宗教的眞理より見れば、恰も地上に一つの電燈を見出して天の永遠に輝く星を忘れて居るものと云ふべきである。

此の眞理は平面的な地上を流れる河流に譬へられやう。幾億萬年かの太古生物の水源より端を發した生命の本流は流れ溢れて現在の自己と云ふ小さい水溜りに落ちついた。肉體と云ふ水溜りに數十年停滯して居た生命は更に子孫の分流に注ぎ込まれて行く。かくて未來永遠地上人類の生存する限り自己の生命は存続し流れてつきぬであらう。斯く考へ來れば、少時でも生命の水溜りとして永遠に價值づ

けられた自己の責任感より自重自愛し、以て優秀となり、更に完全へと志すは當然の事である。

乍併、此處に二つの問題が生じて來る。その一つは地球破滅の時機である。此の時來つて全人類死滅の災厄に遭はば、幾億萬年に亘る生物の刻苦努力と進化の跡は一切が空の空に化して了ふではないか。かくなれば刹那的享樂主義者が遙かに賢明であつた事になる。どうせ最後が破壊滅亡であるとすれば、何ぞ強ひて現在に於て刻苦努力、犠牲的生活をする必要あらんやとの結論に逢着する。優生學は此の嚴肅なる人生問題をどう解釋しようとするのであるか。如何に劣性兒が減少しようが民族衛生が向上發達しようとも、結局滅亡の時期より見返せば、單に一つの遊戯を愉快にしたと云ふに過ぎないではないか。人間が眞心から要請する永遠に對する價值生活が、此處に至つて矛盾撞着の行詰りに陥つて了ふ事になる。

人間は結局無駄だと知りつゝ、止むを得ず、一種の方便として強ひられる生活法に對しては、眞劍になり得ない。人間に善い處は毎日の生活の中に自己の絶對價値を認め、自發創造的に永遠不滅の目標めざして勇往邁進して行く處に眞實の幸福感が

湧いて来る。

キリストの出現によつて明示された神の眞理は此の不滅の永遠的生命の實在性を證明した。天地、日月、星辰はよし、破壊するとも、尙それを超越して永遠不滅の神の國の實在を明示したのが、是れ即ち基督教の根本眞理である。宗教的眞理の中心が此處に存する。

(四) 聖書は何を教へるか

聖書は永遠生命界の眞理を教へる書である。聖書に限らず、何れの宗教もみな均しく靈の實在性を教へる。靈の存続性は凡ゆる宗教に通ずる最大公約數である。けれども聖書は凡ゆる宗教中にて、最も明確に靈魂の不滅とその個性的永續を證詞する。

聖書舊新約全書を貫いて創世紀第一章より黙示録最後の章に至るまで、その表現は異なるも、恰も電線の大小、又は銅鐵等の差が如何にあるともその中に貫流する電流は一つである如く、聖書各篇を最初より最後まで一貫するものは永遠生命の眞理性

である。若し聖書を読んで、此の一事を見逃す人あらば、その人は聖書を讀まぬ人である。

聖書は眞實性を自己の心中に實驗なし、身を以てその眞理の確實性を證する。聖書は單に人の智慧にて書かれたるにはあらで、神より來る聖靈の感動にて書かれたるものである。その言は即ち神の言であり、その中に一貫する眞理の光は實に永遠を貫く神の世界の眞理である事を靈的に實證し得る。科學者はかゝる事柄を何時でも自己の主觀的觀念であり、自己陶醉に依るものとなし、寸毫の科學的價值なきものとして葬り去らんとする癖がある。けれども、是は非常に慎しむべき事であり、神の前には自己の短見と愚鈍さを表白するものである。

永遠生命の實在性については、過去幾千年間、數多の聖者達が身命を賭して保證し來つたものである。科學の眞理性が保證されて以來、僅かに三百年、而も年々歳々變化しつつある。而してその實驗は機械器具を藉り、その測定機の限度を越えたる實在は捕捉する由もない。然るに宗教體驗による永遠生命に關しては人間の經驗中、一切の測定を可能ならしめる最も嚴肅なる靈性そのものの眞實なる實驗である。

宗教體驗に生くる者にとつては、靈そのものの眞實なる實驗は、科學的測定機を用ひて遂行せる實驗よりも、更に權威あるものたる事が、よく肯定し得る。この點に就ては、單に科學萬能を信する立場に立ち籠もれる學者達には迷妄の如く見ゆる事あらんも、それは甚しき認識不足である事を知らねばならぬ。

碩學、カントが科學者等の發見したる科學的眞理を批判せんとして、彼は純粹理性批判を著した。此の純粹理性批判を更に實踐理性批判の立場より批判し、人間理性の眞實性は客觀的眞理性に存するよりも、寧ろ人間の内在的主觀的實踐理性の中に大なる權威の存する事を證明した事實は、この邊の消息の一端を表すものである。

ある一科學者が發見したる新藥の効能を保證する爲めに、その發見者が身命を賭して自己發見の藥物を服用し、顯著なる効果を收め得たる場合に、吾等はなほその藥劑の効果を只一人の實踐なる故にとの理由のもとに信じ得ざる場合もあらう。乍併同じ藥劑を百人、千人、萬人と歴代歴世幾千年に亘つて實踐され、保證されたるものであるならば如何に頑迷固陋の不信の輩と雖も自己の滅ぶべき生命を救ふ爲にはその藥物を歡喜と希望に輝いて服用するに躊躇しないであらう。聖書の與ふる

永遠生命の靈藥は正に斯る幾多の聖徒の血を幾千年の體驗に基いて保證されたるもの、又現代にありて同じくその體驗に生くるものが、身を以て保證する處の眞實なる實驗である。

福音とはこの永遠生命を封じたる一服の靈藥の謂である。聖書は此の眞理を保證する。キリスト・イエスは此の眞理と靈藥とをたづさへて地上に出現し給ふた。キリストを信するとは、この福音の眞理を信じて服用する事であり、自らが永遠生命の大道を一步步々歩む事である。この人生行路が即ち信仰生活である。上述の如く福音的信仰に生くる者にとつては、地上五十年の人生は永遠界へ連る一個の橋に過ぎないと爲すのである。橋の上の歩行はやがて達すべき神の御前に於ける靈的生活の前準備に過ぎない。橋の上に誰人も永住の家を建つる者はない。又彼岸に達して不用なる品物を山積して、重荷に苦しんで歩む者もない。橋上にて携へ行くものは彼岸に達する爲に是非なくてはならぬもののみである。而してこの橋上の生活者にとつては、神の世界の彼岸が目的地であつて、此の地上生活は神の世界に入る爲の一つの準備時代である。

故に神の聖意を橋上にて達成しつゝ、橋の彼方の永遠生命界指して、より容易に、より安全に、より有意義に橋上の歩みを完ふなさしめる新工夫と新発見とが眞の文化生活である。

如何に橋上に大架高樓を築き、人智の極をつくすとも、歩行者をして何時迄も橋上に停留せしめ、やがて巻き起る怒濤の爲め滅亡の淵に投せしめるものならば、かかる文化は斷じて眞の文化に非ずして、惡魔の手に醜弄さるる怖るべき毒物である。現代の無信仰者はこの恐るべき惡魔の毒物を毎夜飲用させられ、靈性はただれて自己靈性の永遠性さへも忘るる程に瘵れて居るものである。

眞の宗教はどこ迄も未來永遠を貫く靈の實在性に立つ宗教である。現世生活の後に歡ばしき天國と共に、怖るべき神の審判の座が待つて居る事實を明白に教へる宗教である。罪の價は死である。如何に富める者と雖も神の前に罪ある者は永遠のゲヘナの火に投せられるのである。罪ある者はその罪より赦されずして天國に入る事は不可能である。

故に若し不治の癩病、肺病患者乃至遺傳的の不具者を根治せしむる方法が發見さ

れたとすれば夫は驚くべき文化の發達と云ふであらう。

乍併、肉體の健不健は比較的短かい地上の期間である。されど靈魂は永遠に至る。靈魂を癒やすべき道とその上衣にすぎない肉體の癒しの道と何れが尊いであらうか。衣は肉體にまさらず、肉體は靈魂にまさらざるなり。

上衣を大切にすることは、肉體を健かに保つ爲め、肉體を改善するは、靈魂を完成せんが爲めである。故に文化の極致はどうしても靈魂を取扱ふ宗教を除外しては成立しない事となる。實に宗教はあらゆる文化の基礎的コンクリートである。この上に一切の學術、一切の文化の殿堂が打ち建てらるべきだ。

故に文化の價值判斷は福音的眞理により測定せられると云はねばならぬ。換言せば現代文化が如何に永遠の生命を全人類に附與し得るか、その度合によつて各文化の價值が評價される。

故に如何に現世的に便誼であり、生活内容を豊富にするものであつても、永遠に至る全人類の救の大業に没交渉であるならば、その文化の存在は何の價值なきものである。乍併、この世にありて、塵あくたの如くに扱はれるものであるとも、やがて夫れ

が、全人類を永遠に救済する源泉であるならば、斯かる業を全人類に普及せしむる事は、非常に價值大なる文化的生活だと云はねばならぬ。

斯く反省し來る時に、世人が盛に謳歌する文化と雖も、神の永遠眞理の光に照らさるるならば、全くその暗明を異にし、價值顛倒の行はるものが決して少くない。

故に、單に富を爲すとか、或は高位高官につくとか、智識を得ると云ふ事は、意味をなさない。恰も深山に石炭の鑛脈を發見したと云ふに均しい。それが眞實なる目的に活用される迄は、單なる一個の存在であつて、價值生活にはならない。

優生學に對しても同様の理論が成立する。如何に肉體と精神上に優秀なる素質の子孫を増殖せしめようとも、單なる肉體の優秀者であり、また如何に彼等が智識階級に屬すとも、神の目的に向つて没交渉であるならば、その優生學は死骸に均しい。而して多くの場合は、神の大生命が注がれぬ時は、死骸から腐敗の起る如く、神なき文化からは、いつでも腐敗墮落が起る。

優生學者は屢々ローマ及びギリシヤ文化の滅亡せる原因を性の墮落の結果、劣生者の數が増し加はつた爲めなりと説明する。それは事實であらう。然しながら、か

く、淫蕩墮落の結果優秀階級の減少した主なる原因は正しく、彼等が神より離れ、現世的享樂の無信仰生活に陥つたことが根本原因である事を忘れてはならぬ。

私は遺傳の原則に基く優生運動に對しては、心から賛同し、如何にもして民族を向上發展せしむる道を講すべきだと考へるが、その根本問題として信仰生活の緊要を極力高唱するものである。

基督教の福音が教ゆる未來の存續に就ては、何處迄も個性の存續を説く、靈界に入つても現世とは全然かけ離れたものでないと教へる。佛教では大我に没入して人格的個性を没却する如く説くが、聖書はこの點については極めて明白である。而してこの宗教的眞理より言ふならば、肉體よりも精神よりも靈性の優秀なるものが永遠の勝利を與へられる。故に、優生學に於ても、靈性の優秀なる素因を一般的に向上せしむる處に力點をおくべきであらうと信ずる。たとへ山を移すほどの怪腕あるともまた凡ての奧義に通ずる智識あるとも、神の光を仰ぐ靈性缺乏するならば、それらの一切は鳴る鐘や響く鏡鍔の如しである。豫言は廢れ、異言は止み、智識は廢る、されども信仰と希望と愛とは限りなく永遠に残らん。而してこの中、最も大なるは

神心の愛である。

神の前に永遠に輝く人類生活を實現すべき愛と靈智をもて神の聖旨成就を目的とすべき人物が多々輩出する優生運動こそ、最大の價值あるものと言はねばならぬ。

第二章 民族興亡と神の眞理

(一) 民族興亡の原理

優生學は民族の向上發展を眼目とし、種族永遠の繁榮を期待するものであるが、我等は未來の發展を期待すると同時に、過去幾千年の民族興亡の歴史を顧みる必要がある。

人類が地上に出現して既に、幾十萬年有史以來、既に茫々六千年の歲月を経過してゐる。この間、多くの民族は興り多くの民族は亡んだ。我らが生存するこの二十世紀に於てすら地球に民族興亡の變遷は實に夥しい。恰も人間個人々々の生と死の如くに民族は興り繁榮し、また亡びつゝある。この現象を單に自然淘汰の現象とのみ見てよいであらうか。優生者と劣生者の數學的關係に於てのみ、この嚴肅なる民族興亡の問題を解釋してよいであらうか。

なるほど優生學者の主張する如く、民族中に劣生者の數が増加すれば民族は危機

におかれることは自明の理であるが、優生者の数が多くなれば、その民族は永遠に繁榮し得ると誰が保證しうるのであるか。これは恰も健康無病なる屈強なる勇者が必ずしも百歳まで天壽を全ふし得ると断定し難いと同様である。劣生者に比して相對的に優生者が長命であり、天壽を完ふしうるこの事は誰も否むものはあるまい。けれども夫れが恒常の道理であるとは誰人も言ひ得ない處である。

人間の地上生活の奥には更に、甚深微妙なる天地の奥義が潜んでゐると思はれる。優生學の説く處は、確かにその一断面圖であらう。けれども全部でない事は容易に首肯し得る處である。

何故に本來多くの民族は興亡したか、その盛衰の奥に一貫する天地の眞理は何であるか。この根本問題を考究し、その光にて現代科學が到達し得てゐる眞理を反省する必要があると思ふ。これは科學の立場を越へて、歴史哲學の立場に於てこの事實を考察するのである。私は今之を歴史哲學と同時に宗教的眞理の上から、この重大な問題を考察しておこうと思ふ。

凡そ人智の極みを盡しても、神の智と人の智とは天と地のその如くに遠くある

現在において獲得したる智識の粹を集めて人間側の最上善を盡すべきであるが同時に神の言に聞き得べくんば、謹んで傾聽すべきであると思ふ。

何故に世界歴史はかくも民族の興亡盛衰の道を辿るか。聖書はこの重大問題に對して明解を與へてゐる。聖書使徒行傳第十七章に曰く、

『世界とその中にあらゆる物とを造り給ひし神は天地の主に在せば、手にて造れる宮に住み給はず、みづから凡ての人に生命と息と萬物とを與へ給へば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事ふるを要し給はず。一人よりして諸種の國人を造りだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限と住居の界とを定め給へり。これ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事からしめん爲なり』と。

即ち神は自らの意志に従つて世界とその中に住む萬物を造つたと云ふ。この聖書的信仰から云へば、神は天地萬有を自らの意志のまゝに作り、天地萬象の一切は神の意志表現であり、被造物の悉くは神の聖意成就の爲めに變遷進化してゐると觀るのである。而して聖書は更に教へる。一人より諸々の國人が生じ、神は之を地球上の全面に住ましめ、各民族を全地に分布せしめた。是等の民族に對し神はその繁榮

の時期を局限し、住居の界即ち國境を一定せしめ給ふた。是れ過去數千年の世界歴史の事實がこの言の誤またざるを立證してゐる。

斯く各民族に一定の國境を與へ、また一定の時代を限つて繁榮の時期を許したる理由は、是れ即ち神を尋ね或は探りて見出させん爲めであると教へる。

地上の人類をして活ける神を見出さしめ、神の聖意を識りて之に従はせ、之を成就せしめん爲めに、神は各民族に一定の國境と一定の繁榮時期を與へ給ふたと云ふのが、聖書が教へる世界歴史哲理の原則である。各種民族の興亡盛衰の原理は正に此處にある。各民族が榮ゆるも亡びるも、その一上一下を通して、神の聖意を學ばしめ、全人類をして神を發見せしめ、神の聖意を探り出して、聖意を實現せしめん爲めである。斷じて人間の勝手なる企畫を成就させん爲めではない。神が豫め定め給ふた宇宙經綸を完成せしめんが爲めである。人間自身の野望より出づる目的でない、神の永遠の目的を遂行せしめん爲めである。人間のイデオロギーや理想でない、神の聖意成就である。

神は各民族に夫々の使命を負はせ給ふ。故にその使命遂行中はその民族を保ち

給ひ、またその使命成就の爲めに必要ならば繁榮をも與へ給ふ。けれどもその民族が命せられたる使命遂行を拒否するか、或は之に反逆するならば、忽ちその民族を斷ちて衰亡を來らしめるであらう。神よりの使命成就の一事が民族の興亡盛衰のパロメーターであり、その原理であると云ふのが聖書の教ふる世界歴史民族興亡の鐵則である。而して過去六千年の歴史を通覽するに、この原理の誤過ならざるを悟り得る。

この原理は聖パウロが歐羅巴傳道に際し、ギリシヤのアレオ山に於いて當時のエピクロス派並にストア派の哲學者數人との論争の時、聖靈に滿されつゝ、哲學者に教へし神の言であつた。同様の原理が底流となつて聖書の全部に漲つてゐる。

宗教眞理の光にて觀照せば、一つ／＼の事象の奥に甚深なる眞理を發見しうる。神は天地の基未だ定まらず、未だ日月なく、未だ光あらざりし先きより、宇宙經綸の大綱を定め給ひ、地上の人類と相呼應しつゝ、人類を審きながら、その行くべき道へと全人類を指導してゐ給ふ。「神の聖意に従ふものは榮え、之に背くものは亡ぶる」とは宗教眞理が教へる嚴肅なる原理である。

(二) 永遠の生命

以上、私は民族興亡の世界歴史哲學の根本原理について述べ、その原理は神の聖旨を探り求め、神よりの使命達成、この一事にあると云ふた。然らば神の聖意とは何であるか。この内容を明にしておかねばならぬ。

聖書は之に就て教へる。

第一、神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信するもの、亡びずして永遠の生命を得ん爲めなり」と。(ヨハネ傳第三章十六節)

神は人類を幼子の如く愛し給ふ。その愛し給ふや現世のみの安逸の爲めでない。永遠の生命に入らしめ給ふ事にある。人類以下の生物は肉體生活が主要であるが人間には靈的永生が與へられる。神は肉體よりも更に靈魂を尊ばれ、之をより深く愛し給ふ。

神の聖旨は肉體の永遠存続にあらずして、人間の本質たる靈體の永遠に生きんことである。此處に神の聖意の第一義がある。

故に、神の眼の焦點はいつまでも人類の靈性にピントが合はされてゐる。肉體は靈魂を包む衣であり、また靈魂を育む土壤である。衣は肉體の爲めであつて、肉體は衣の爲めでない。土壤は草花の爲めであつて、草花は決して土壤の爲めでない。之れが神の眼から見た靈と肉の關係である。衣が如何に美しく格好よくとも、それが不衛生であり、肉體に害を與へるならば、即刻にその衣は脱ぎ捨つべきである。神の聖意は常に全世界の富にも勝る人の靈魂の救を第一義にみそなはせ給ふ。

人の靈魂は肉體が死するとも決して滅亡すべきでない。靈體として神の國に移される。聖書は神の國が嚴然として實在する事を教へる。こは人間の主觀による觀念でない、地上の野山が現實に存在することが實證しうる如く、靈なる神の國が目にあたり實存する事を聖書は現實に教へる。而して眞實の信仰者は、地上生活をしながら、この靈的實在の神の國に籍を移し、神の子とせられながら肉の衣を纏ふて地上に神の使命成就の爲めに生きてゐる者である。斷じて觀念論でない、イデオロギイでない、方便でない。現實であり實在であり、つらく、目に見、手に觸るゝ如く、靈眼靈覺をもて神の國の實在を自證し得るものである。イエスは宣ふた。「女の産みし

内にてパプテスマのヨハネより偉大なるはなかりき、されど神の國に於ける最も小なるものも彼よりは「大なり」と。實にそうである。神の國に籍を有せざる不信仰の王侯貴人乃至は碩學よりも、神の國に住む最も小なるものが更に偉大である。丁度この關係は如何に偉大なる象や獅子よりも人心を持つ幼児が如何に偉大であるか分らぬ。兩者の間には炭と金剛石の如く、天と地との如き相違があるではないか。イエスはまた仰せられた。「一人の靈魂の救はるゝは全世界の富にまされり。人若し全世界を贏くとも、その生命を失はば何に代へんや」と。神は實に一人の幼子の靈をも全世界の富以上に認められるのである。それは全宇宙の物質的天地はやがて壊滅の時が来る。されど救はれし人の子の靈魂は朽ちる事なくして永遠に至るからである。この觀點の相違が優生學と宗教の兩者に於て天地の差ある事を知らねばならぬ。世の優生運動がこの宗教眞理に立つ處まで進展し來らん事を希ふものである。

(三) 神の聖意

神の聖意の第二は神は絶対の義に立ち給ふとの事である。「凡ての人罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、功なくして神の恩恵によりキリスト・イエスにある贖罪によりて義とせられるなり。即ち神は忍耐をもて過來しかたの罪を見遁し給ひしが、その義を顯はさんとして、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり」(ロマ書三章二十三節) 神は「愛」で在し給ふと同時に絶対の「義」で在り給ふ。神は不義なるものを審判して容赦なく滅亡の火中に投じ給ふ御方である。

神は愛の御方で在すと云ふよりも義の方で在すと云ふ方が我等日本民族には正しく心に響いてくる。神の聖意は、凡ての人類と凡ての造られし物とを神の前に義たらしめんと爲し給ふ。我等は如何にせば神の前に義たらんか。神の義こそ全宇宙を統一する眞理中の眞理である。自然界に行はるゝ自然法則、科學界に於ける原理法則は乃ち神の義の切斷面上の一表現であると私は觀じてゐる。神の聖心は神の宇宙法たる神の義を遵守せしめつゝ、神の愛心に生かしめ、神の創造にあづからしめんとする處にある。神の義に反する事が罪であり、神の心に逆ふて愛の創造の大業に参加しない事が罪である。

神は神の義を尺度として被造物の一切を審判し給ふ。民族興亡の根本原理も此處にある。罪の價は死であり、滅亡である。優生者とは罪を犯さずして神の聖意に従ふ者であり、劣生者とは罪を犯して正道を歩み得ざるものを云ふ。故に宗教的に云へば如何に醫學上健康者であり、遺傳學上優生者であつても、神の義と神の愛の前に罪ある者は眞實の人間としては決して優生者とは認められない。

神は罪を責め給へども、全世界の富にもまさる人の子の靈魂を更に愛し給ふ。故に神は人を愛するのあまりに、自らの神の義を完ふせん爲めに神の獨子を犠牲にして十字架の死を遂げしめ給ふた。之れほど迄に神はその義を重んじ給ふ。またこの一事によりて、かほど迄に神は人の價値を認め給ふのである。人の本質たる靈性の上に神は宇宙大の期待をかけてゐ給ふ事を知る。

かくして此處に神の義と神の愛を知り、神の心を心として神への絶対服従、神と偕なる生活を本心より願望するに至る時に、神は一切の過去の罪を許し、此處に靈的新生の第一歩が踏み出されて来る。「人若し新らたに生れずんば、神の國を見る能はず」とか、「人は水と靈とに由らずんば、神の國に入る能はず」或は「人若しキリスト・イエスと

偕なれば古きは去り、見よ、新らしく造られたるなり」などの宗教上の深甚微妙なる新生の體驗をかくして與へられる事となる。

人間は此の微妙なる靈的新生を完成して後に、人格上の變化を始めて經驗する。人間がこの靈的新生による變化を経ざる以前は、恰も仕上げをせざる藝術品である。未完成品に就て優劣を論ずる事が出来ない。人類の目標が神を目掛けて靈的進化の途上にありとするならば、靈的最高位の人物を多數に出産するやうに努むる事を優生運動の中樞軸であらねばならぬ理である。信仰こそその道ではないか。

(四) 人類完成と神の約束

神の聖意は、上述の如く、個人々々の靈性に無上の價値を認め、滅亡より救ひ出して永生を附與せんとする處にあるも、更に神は、個人々々に個性を與へて異なれる使命に生かし給ふ。各民族は夫々異なる使命を永遠の前に附與されてゐるも同じ道理である。この完成の爲めに豫言者や卓越せる指導者を起こして民族を引率なさしめ、全人類に關する最後の完成の道を豫め備へ給ふ。信仰に生くる人士は自己内在



の光を通して、全人類完成の道はかくあるべきだと信じ、その眞理の道に従つて完成を協同する事が神に對する人の義務だと信するに至る。神は過去に於いて一切の被造物の経過に一定の原理と秩序と法則を與へて指導し來りし如く、今後も同様に一定の秩序を以て人類生活を信せしめられる。此處に人類と宇宙完成に對する神の聖意を識り得る。

地上に於ける人類生活が如何に文化的に進歩するとも、決して現代の科學者が期待する如く此の地上生活より艱難と苦痛が除去されるとは考へられない。最後まで地上には艱難は絶えずあると聖書は明示してゐる。地上生活には艱難のあるのが聖意である。若し艱難がなくなれば人類からは進歩向上は停止し、遂に自滅するに至るであらう。此の世より苦難を除去しようとする人の子の智慧は、神の智に對する認識不足である。神は人を愛し人に絶大の期待を持ち給ふが故に、世に苦難をおいてゐ給ふのである。神の聖意は苦難を除く處にあらずして、如何に大なる苦難あらんとも、一切に打ち克ち得て餘りある能力を備へ給ふ處にある。「聖靈を受けよ。聖靈汝に宿らば、汝ら能力(爆發的力)を受くべし」(使徒行傳第一章八節)と約しておられる。

イエスは最後に仰せられた。「汝ら世にありては艱難多し、されど雄々しかれ、我れ世に勝てり」と。艱難から逃れるのでない。患難に勝つ處に聖意がある。

而して神は怖るべき苦難の時代を人の爲めに備へると共に、神自らの能力にて救の完成時代を備へてゐ給ふ。而して最後には人類完成と共に、被造物の一切と全宇宙の完成をもその方法を明示しておられる。かゝる驚くべき神の經綸の眞理を書き誌るせし書が即ち一卷の聖書である。是れ神が人に與へ給ふた新約である。キリストを信する聖書的信仰の人士はみなこの絶大なる永遠に至る神の豫め人類に約したる約束を信じぬいて、人間の側から最上善の努力をもてその約束を實行して行くのである。この生活を信仰生活と云ふ。信仰生活の内容は實に此處にある事を知らねばならぬ。かく人間が神の約束を信じぬき、信賴し切つて、神の義と神の愛を實行し行く時に、神は自ら神の約束をその人物に對して履行なし給ふのである。救世軍のウイリアム・ブリス大將が死際の最後の一言に、

「汝等唯信せよ、神の約束は確實なり」

と叫んで靜かに昇天したのも、この消息を物語るものである。世には多くの宗教信

者があるが、眞實の信仰内容が何であるかを辨へ知らぬ人々が多いから、宗教と科學或は哲學その他人生問題に關する諸問題に關する誤解と偏見が生るゝのである。

(五) 神の啓示

神の眞理は手近にある。聖書は物語る。

「われ天國の鍵を汝に與へん。凡そ汝が地に縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり」(マタイ傳十七章十九節) 何と驚くべき聖言でないか。天國の鍵を汝らに與へんとこの一言。天國とはこの地上に於ける靈的意識の謂でもなければ、また極樂淨土の如き觀念的のものでもない。この肉眼にて野山の天地を見る如く、靈覺をもて視且つ觸れうる現實の神の國のことである。我らは此の地上にありて、昔コロンブスの大陸發見以前には僅かに數千哩隔てし海のかなたの北米大陸さへも、その實在を疑つた民である。けれども今日誰人も米大陸の存在を疑ふものはあるまい。横濱埠頭に立つて「あの船はやがて北米大陸の港に着くのだ」と言はれた時「船の形が見えなくなつても、船は必ず米大陸に着く」との一事を疑ふものな

くなつた時代である。けれども今の時代に、「死は天國さしての船出だ」と言はれても信じ得ない人々が甚だ多い事を私は知る。然し、今に天國が米大陸のやうに極めて手近にあり、架空の想像でなく、眞實に實在するのだとの事が明瞭になり、誰一人之を疑ふものなき時代の來る事を私は信する。否現代は既にその初期にある事を思はしめられる。

かゝる時に、聖書は教へる。天國の扉の錠を開く鍵は遠方にあるに非らず、手元にある。「凡て汝等が地にて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く處は天にても解くなり」と。この一言の奥義を徹底悟入する處に天國の門は吾等の前に豁然開けるであらう。

神の造り給ふたあらゆる世界は、そんなに異なつた六か敷しいものでない。林檎一つに働く引力の作用を徹底的に理解すると、それがそのまゝ、全天地の物質界に働く原理である。小さい林檎一つを把握する事が即ち全宇宙を掌中に把握する事である。生命界と靈界の間に架せられたる原則も之れと同様であると私は思ふ。地に於いて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地に於て解く處は天にても解く。實に然り、然り

である。

地にある一粒の麥を見るがよい。初めには小さな種子、次には苗、次には全長の草となり、後に始めて花開き、最後に實は結ばれる。枝が落ちても、花が落ちても、ただ腐るのみであるが、最後の實れる穀が地に落つると、新生命躍然として發し、三十倍六十倍するに至る。

一民族發展の跡もまた全人類進展の道も之れに等しい。初めに生命ありて發現し、之れがある時代の期間は花も實も結ばずして、ただ葉を生じ枝を延ばす時代がある。葉と枝とが充分に伸び、而も秋にあらず、冬にあらず、春光來る時、始めて鬱勃として美花を開く。艶麗なる花瓣落ちて後にその奥に生命の實堅く結實す。之れ地が縛ぎ且つ解いてくれる天地の眞理である。そこに一定の順序があり、準備があり、時期がある。一民族は一つの特種の色香と形を興へられた生命の大きな樹である。我が祖國は實に二千有六百年の準備をもて將に咲きそめんとする大生命の一本の樹である。結實は之れからだ、一民族が一本の草花であるならば、全人類は一つの草叢であり、果樹園である。賢き園主は何の爲めにその果樹を栽培し、如何なる時期

に接木し、如何にして開花結實せしめ、如何にして、その獲得したる美果を使用せんか、悉くの順序と時期とを知り完成の方法を豫め定めてそれに必要な準備を定め給ふ。神は賢き園主であり、全人類は果樹園、一民族は一本の樹、一市一町は一本の枝、一家族は小枝であり、一個人は一の葉である。聖書は奇しくも全人類と同宇宙に關するこの神の一大經綸を如實に啓示して餘す處ない、我らが神を信ずるとは、この聖言を信ずるのである。基督の宗教は眞にかくも永遠に至る神自らの宇宙經綸の内容を示したる上よりの啓示宗教であると云ふべきである。

第三章 人生の意義

(一) 人生の光

私は上述の如く、宗教眞理より見たる全人類究極の目標と人生價值判斷の標準とを示した。是によつて人類の目的が何處に存するかを示し、この目的により多く副ふものが優生者であり、然らざるものが劣生者であるべきを明かとした。更に文化と宗教眞理との關係を論じて、現代文化に對する批判を試みたのである。

往々世人は曰ふ。人生は不可解なりと。若しも人生が不可解であるならば、誰が成功者で誰が失敗者だか判斷し難い。場合によれば成功者と考へて居る人々が實は非常な失敗者であり、世人の云ふ失敗者が却つて優勝者である場合すら想像する。故に優勝劣敗の判斷となる尺度の決定が人生を論ずるに當り、極めて重大なる問題となる。その爲めには人生の目的を明瞭にしなければならぬ。

從來人生は、健康を保ちて天壽を完ふし、心に煩悶苦惱なく意のままに生活しうれ

は、それが幸福であり、目的を達したのだと思考する人々が頗る多い。此の見地に立つ人々から見れば、なるほど早逝する人、病人、不具者等は劣敗者に見えるであらう。而して健全にして八十才までも長生した人々は皆優勝者に見えるに相違ない。乍併、之を宗教的眞理より見るならば、非常な相違を來し價值が全く顛倒して行く。

元來、眞の宗教的眞理の光が人心にさし込む時に、その人の人生觀が根本的に革命されてくるのが常である。恰も光なき暗黒の闇路では、大なる提灯を持つものほど便利なる故に、人々は提灯の火の大なるものを欲し、之をより多く得たものが、夜の旅行者には優勝者に見えるであらう。故に夜の世界に於いては、行燈が蠟燭になり、蠟燭がランプになり、ランプが電燈になり、カーボン・ランプがタンダグステン・ランプになり、更に現代の電燈がいよゝゝ白光ランプに改良進歩しつゝある。かく光度の強いものを持つものほど文明が進み、より大なる幸福であり、より優勝的地位を克ち得たと考へるであらう。智識は暗黒を照らす一つの光である。富は不自由なる闇路を自由突破せしめる自働車のやうなものである。闇黒の地下道の中に一生涯住む者にとつては燈火と通風とが生命の恩人であり、何よりも之を求めらるであらう。乍併、

人が若し暗黒の夜より東天に輝き出づる耀々たる旭日を仰いだならば、燈火の所有量によつて定めたその人の優劣は無意味になつて終ふ。却つて大きな重い提灯を持參する者ほど白天の下には不便であり、荷厄介になつて來る。光なき暗黒の世界に於いて最も重寶せし所有物は新らたなる光の下には、却つて不便となり、重荷となる。かく新らたなる光來る時に人生觀は一朝にして革命されて終ふでないか。宗教の光は人々の生涯を革命せしめ、滅亡の闇路より光明の世界へと救ひ出してくれる。

(三) 神の光なり

闇黒は變則であり、且つ一時的であるが、光明の天地は常住であり、永遠である。宗教眞理を除外したる學術は闇黒の世界に於いて輝く一燈火でありうるであらうが、神の光の前には白日のもとに於ける提灯になるものが多い。永遠に價值づけられた學術は、暗夜にいよいよ輝くと同時に、亦白日のもとにも益々重寶がられるものであるべき筈だ。然らざれば永遠性を有つものとは言はれない。また、たとへ永

遠の光たらずとも、眞實の光の來る迄の前驅者としての價值を有する光もある。自分前驅者であることを忘れて、永遠の光であるかのやうに考へ違ひする事が罪であり、惡である。神に對する冒瀆之より大なるはない。現代科學と唯物主義者の偏見は此處にある。

人生は不可解だと云ふが、人生そのものが不可解ではなくて、我等が人生を解くべき光を所有してゐないから不可解に見ゆるのだ。闇夜にあつては肉眼にて判斷すべき色彩の問題は凡て不可解に終ると同様である。けれども花は紅、柳は綠なる事實は闇夜に於てこそ不可解であるが、白日のもとにはこれほど明瞭なる問題はあり得ない。三歳の兒童と雖もすぐさま諒解しうる問題でないか。人生問題も亦これと同様だと私は觀する。

然らば、人生の闇黒を照らす眞實の光は何處にあるやとの眞劍な求道心が起つてくる。之れが宗教的求道心の第一歩である。

「もろもろの人を照らす眞の光ありて、世に來れり。この光は世にあり、世はこの光によりて成りたるに、世は之を知らざりき。」と聖書にあるのはこの事である。人生を

照らす眞實の光は既にこの世に來つてゐるのである。靈眼を開きさへすれば、常住座臥、吾等はその光の前に永遠に立ちうる。日月は隠るる事がある。けれどもこの生命の光明は常住不斷の光でありて、寸刻の闇もない。この永遠の光を人類に與へるものこそ活ける眞實の宗教である。

故に、民族をして永遠に生命づけ、祖國を救はんと努力するものは此の原理の上に堅く立ち、行く手の指針はこの天の光明に照らされて、定むべきであると私は確く信するのである。

然らば、宗教は人生を何と觀るか。この問題の要點だけを述べておきたい。

(三) 宗教の光にて觀たる人生

儒教に於ては天道即人道と教へるが、天道が何であるかは具體的に明示してくれない。佛教は、生者必滅會者常離、一切は空の空と説く。人生に老生病死の苦あり、諦めよと教へるが、我等は諦めんとして諦め得ざる問題を數々所有してゐる。これら一切の問題を明らかならしめて後に、始めて諦らめうるのである。明らかに爲し度

いと念する心が、即ち暗黒に對する存在の豫告である。暗黒に勝つには、その暗黒を照らし得る性質を具有する光を要する。我等は眼界の暗黒でない。心靈の暗黒の爲めに悩む。靈の暗黒は世の物質上の何物の光も之を照らし得ない。どうしても心靈界の眞の光に待たねばならぬ。

この眞實の靈界の光が、「既に世に來れり！」と聖書は告ぐるのである。福音の光とは即ち之を云ふ。然らば、聖書の啓示する福音は人生を何と教へるか。「人生の目的は神の聖意成就の爲め也」と。この一言にて盡きる。我等の祈りは「御國を臨らせ給へ」この一句に要約される。なほ聖書の言を引例するならば、更に明かであらう。「人はみな草の如く、その光榮はみな草の花の如し。草は枯れ、花は落つ。されど神の言は永遠に保つなり。」汝ら朽ち果つる糧の爲に働かず、永遠に至る糧の爲めに働け。「財實のある處には汝の心もあるべし、身の燈火は目なり。この故に汝の目正しくば全身明るからん。然れど汝の目悪しくば全身暗からん。もし汝の内光闇ならば、その闇いかりぞや。」人は二人の主に兼ね代ふる能はず。汝ら神と富とに兼ね事ふ事能はず。何を食ひ何を飲み、何を著んと思ひ煩ふな、生命は糧

にまさり、體は衣に勝るならずや。汝ら、空の鳥を見よ、野の百合を見よ、榮華を極めたるソロモンだにその服裝この花の一つに及ばざりき。今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや、先づ神の國とその義とを求めよ。然らば凡てこれらの世の物の一切は汝に加へらるべし。」

「凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に歸す。榮光永遠に神にあれ。」
以上にも明白なる如く、基督教の教ふる處は人が主にあらずして神が主だ。「凡てのものは神より出で、神によりて成り、神に歸す。」人は神の目的成就の爲めに造られてゐる。故に人生を吾儘な自己中心に生くるのは眞正の人生でない。一切萬事神の聖意成就の爲めだと確信して生きて行く。これが眞正の人の人生觀である。私たちは自己を中心として人生を平面的に見てはならぬ。神を中心とし、神の立場から人生を見おろす時に、始めて人生の意義を發見する。而する時に前者は虫の眼の觀方であつたことに氣付き、後者の鳥の眼の觀方に一轉する。虫の眼ではどうしても發見し得なかつた遠大な現界を鳥の眼は發見しうる。

(四) 人生の本質

眞の宗教が説く人生の本質は、人生は靈的誕生の場所であつて、肉はその上衣であり、物質はその糧である。

人生五十年は實に一個の靈的胎内生活だと觀る。鳥の目にて見おろす時、人生は永遠生命に至る一個の靈的胎内生活として視界に現はれてくる。

永遠の生命につながれてゐる人間にとつては、肉體發育の準備としては、十ヶ月の母體の胎内生活が必要であるが、更に靈の發育の爲めには五十年の地上に於ける靈的胎内生活が必要となるのである。

永生を許され人間の靈魂にとつては、五尺の肉體は神の子の靈の宿る宮であり、大空と大地とは母の胎内である。天地を充たすこの無限の空間は人の子の靈にとつては、一個の母の胎である。何と吾等の住むべき靈の國の偉大なることよ。而も神の國にとつてはこの日月星辰の世界は、靈界の實在に對する一個の投影像にすぎない。神の靈の國は丁度我等の心が手にて觸れ得ず、眼にて見えねども實在する如く、

不可見不可觸にして而も嚴然として實在する根本實在の世界である。この神の靈界に於て、靈體の發育は許されるが、人間の個體としての繁殖は地上に於てのみ全ふせられる。丁度蜻蛉は空中に飛び交ふが、蜻蛉は水中に於いてのみ幼蟲の誕生が許されるに似てゐる。即ち人生五十年の意義は蜻蛉の幼蟲の水中生活を意味する。水中のみの生活が蜻蛉の生活の全體でない。否むしろ空中生活の前提としての水中幼蟲の生活に意義を有するのである。故に結論としては、如何に水中に於いて幼蟲が美事に力強く優生者として活動するとも、空中へ新生した後に不具者であつては、何の價值もない。蜻蛉の空中生活をして優生者たらしむべく必要な一切を完全に準備してこそ始めて、水中に於ける幼蟲の生活が優生者となり得るではないか。

(五) 天地の相互關係

人間の胎内生活と地上生活の相互關係が、そのまま地上生活と靈界生活の關係になつてゐるものと私は思ふ。「我れ天國の鍵を汝に與へん、地に於て縛ぐ所は天に於

ても縛ぎ、地にて解く處のものは、天に於ても解くなり」とイエスが宜ふたのも之である。胎内生活に於いて如何に必要なりと雖も臍の緒と胎盤のみを完全に用意し、又一見胎内にては不必要に見ゆる眼、鼻、口、脚、腕の用意を怠る胎兒あらば、彼は胎内生活に於てのみは立派なる優生者たりうるであらうが、一朝呱呱の聲を擧ぐべき日來るや、彼の唯一の頼みとせし臍の緒は切り捨てられ、胎盤はもぎとられ、鼻と肺臟の用意なき彼は最大の劣敗者として暗より闇に葬り去られて了ふであらう。かかる人間を決して幸福者とは呼び得ない如く、不用意の地上生活者を神は決して眞實の優生者とは許し給はぬであらう。然れども、現代にありてはただ、富なる臍の緒と土地の家屋と呼ぶ偉大なる胎盤の所有者を優生者の如くに認識せる人々が餘りに多いのであるまいか。見掛上の優生者と眞實の優生者とを是非明らかに區別して、永遠に價値ある眞實の人間生活運動を吾が祖國に勃然として普及せしめたきものである。之を要するに、全宇宙は神の意志表現であり、大自然界は神の一卷の書であり、人生は永遠に至る靈的誕生の胎生であると観るのが、眞の宗教が啓示する宇宙觀であり、世界觀であり、人生觀であると私は堅く信じてゐる。

第四章 優生學と宗教的救

(一) 優生學と宗教の相互關係

優生學と宗教は共に生命問題を取扱ひ、前者は民族の發展を後者は生命の永遠性を對稱とする處は二者向ふ處を一つにする如く見ゆるも、兩者は根本的にその立場を異にするものがある。即ち優生學は人類を單に生物學的見地に於て考察する。即ち人類の地上に於ける永遠存在と種族の傳統を保たんとする處に人類の目的が存すとなすも、宗教に於ては然らず。宗教は人間獨自のものにして他の生物には存在し得ない。宗教は一生物たる人間の真相が何であるかを教ゆるのみならず、肉體を離れたる後の靈的實在を肯定し、その前提としての人間生活に力點を置く。此處に嚴然たる相違がある。之を譬へば優生學は山野に優良なる木材を殖林する方法を教へるが、林學者は決して優良なる建築設計者ではない。我等の欲するものは單に山林に繁茂する良材自身にあらずして、之を使用して建立せんとする良家である。

優生學は地球上に優良なる人の材料を提供し、うるが、宗教はその良材を用ひて、神の住む給ふ宮となす。

如何に山林より良材を提供すると、家そのもの、設計を誤らば、一切は失敗に終る。家の善悪は良材を作りし造林士によらずして、設計家の責任にある。されども又如何に優秀なる建築家と雖も良材なしには不可能である。腐木彫るべからずである。此處に優生學と宗教の相互關係がある。

優生學が何處までも科學の一分科として立つ以上は、人類の目的自體には觸れ得ない。僅かにその目的の一部を充たす方法論に終始することは、その性質上止むなき事である。由來科學は方法を教ゆるが目的は教へない。目的なくして道のみを示す處に科學の缺陷がある。宗教は人類究極の目的を教ゆると同時に全宇宙に於ける神の目的を指示する處に特色がある。即ち宗教は港外に立つ燈明臺である。大海原に泛ぶ一切の船舶はこの光を目標に目的地の港内に入り得る。科學は船舶の蒸汽機關とプロペラーと羅針盤との諸機關を提供する。これらの諸機關あるが故に怒濤を切つて安全に目的港へ到着せしめ、燈臺の存在をいよ／＼價值あらしめ

る。兩者は互に密接不離であるが、何れが第一義なるかと云へば目的地の決定である。何となれば目的地を過まれば、如何なる優良船と雖も存在の價値が失はれる。之に反し目的地さへ明確に定まれば、よし諸機關は損傷するとも、他の方法にて目的地に達しうるからである。

然るに往々宗教を誤解し、單に自己の主觀的安心の手段なりとして、科學を攻究するもの、宗教を信する事を恥辱の如くにすら思惟する者もあつたが、是は大なる認識不足である。科學は方法を教へ、哲學は理由を説明し、宗教は目的を啓示する。故に眞實の宗教が教へる永遠の神の光なしに科學と哲學とを攻究せんとするものは目的地なくして、暗礁多き大海原に漕ぎ出づる舟人である。科學は哲學の上に立ち、哲學は宗教的體驗の上に立たざれば、生命の活水は遮斷されて終ふ。また眞實なる永遠の光を求むる求道者にとつては、遂に科學の極致は哲學に、哲學の極致は宗教に、宗教の極致は活ける神と靈交する信仰に來らざるを得ない。

抑々優生學が生物學の一延長なる故に、人間を一般生物學の立場より取扱ひ、その結果は往々にして人間獨自の事象なる宗教の内容をも生物學の見地より照觀せんとするは大なる誤謬である。宗教的眞理の光明に照らされてのみ分明する人の眞實の姿は到底生物學的知識にては測知し難い。故に私は宗教を優生學の立場から批判するのでなく、反つて優生學を宗教眞理の立場より批判する必要を認める者である。

優生學にとつては、人類の目的は永遠不滅の生命的傳統にありとなす。むしろ世の文化及び文明は第二義的なりとなすは至當なれども、その永遠不滅の内容が何であるかに至つては、生物學者にとつては模糊として捕捉する處がない。之はどうしても宗教の奥義が示す神の啓示に待つ外にないと思ふ。

斯く論じ來ると、優生學は基礎石と良材を提供せんとして雜草雜木に蔽はれし山林を開拓せんとする造林士である事がよく分るであらう。それらの基礎と材料を用ひて天に通ずる大殿堂を建築するものは正に之れ眞實の宗教である事を悟るでないか。

(二) 宗教と救

優生學は生物學上遺傳の法則に従ひ、人類生殖質の不死を保證する。人間は永劫の過去より流れ來れる生命を肉體と云ふ容器に一時的に受け継ぎ、更に後世永劫迄承傳せしむる臨時生命の保持器であると觀る。永遠の生命は不死である。人生五十年は永遠をつなぐ臨時の一機關と見る處は極めて宗教的眞理に近い。天に於て宗教が繋ぎ且つ解く處のものは、優生學に立つ遺傳學は地に於て繋ぎ且つ解いてゐるものと云ふべきだ。乍併、優生學の説く處は、主として過去の因縁に主要點を置き現世と未來とが、一つに過去の遺傳にて支配さるゝと説く處は、佛教の因縁論に非常に近い觀方である。かくなると哲學的には一個の宿命論に陥る弊がある。宿命論は解脱、或は聖書に於て説く絶對自由解放に立つ救の眞理に矛盾を生じ、永遠の光明に對して一抹の暗影を投げかける。

宗教に於いて靈界の眞理として高唱する處は、如何に過去に於いて惡因惡業に束縛さるゝと雖も、神の絶對生命に結ばるならば、過去の因縁は悉く斷絶され、因縁より全く解放せらるゝと云ふ眞理を提供するものである。聖書の福音は之れである。如何に惡因業の者なりとも、神と偕なるものは、忽ち古き自己が全く葬り去られ、肉體

はよし依然として舊體を持するとも、内部的なる眞實の自己は全く新たなるものに造り代へられる。この驚くべき事業を各人が事實として體驗せしめられる。聖書に「キリスト・イエスと偕なる者は、見よ、古きは既に去り、汝、新らたに造られたるなり」(コリント後書五章十七節)とあるのは事實に於いて昔も今も誰人もが體驗する處である。更にキリストが「人若し新らたに生れずんば、神の國を見る能はず」と教へられたのも同様の眞理を示す。キリストの弟子パウロは叫んだ。「嗚呼吾れ惱める人なるかな、この死の身體より我を救はんものは誰ぞ、我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す。然れば、我は自ら心にては神の律法につかへ、肉にては罪の法に事ふるなり。この故に、今や、キリスト・イエスにある者は罪に定めらるゝことなし。キリスト・イエスに在る「生命の御靈の法」は汝を罪と死との法より解放したればなり。」(ロマ書七章二四―八章二節)と。

實に一切の罪の惡因縁より切り放ち、死の法則より人類を自由解放する生命界の法則を聖書の眞理は我らに傳へる。

遺傳學は過去の法則を以て我らを束縛するが、聖書の宗教は一切の因果より自由

解放せしめる法則を教へる。

生物學的法則は永劫の過去に我らを釘つけ、楔を打ち込んで身動きならぬ者に閉ぢ籠めて了ふ。「あゝ我れ惱める者なる哉、この死の身體より我を救はんものは誰ぞとのパウロの悲痛なる叫びを繰り返さしめる。この悲痛なる叫びが人心より取り去られ、この絶望より救ひ上げられねば人類には眞實の幸福は實現しない。然るに民族を救はんとする優生學は却つて自然法なる律法の下に奴隸として人類を手渡すのである。聖書の眞理はこの永劫消し得ざる惡因惡業の自然法より完然に救ひ出ださんとする。この律法を足下に蹂躪して、之に自由解放を命せんとするものが即ち宗教的眞理である。

優生學は生物學上の永遠の法則の上に立つが、宗教は靈界永遠の法則の上に立つ。兩者は二直線の如くにある一點にては交叉しうるも、優生學の直線は肉體的生物として地面を這ふて進むに對し、宗教の直線は地上より天に向つて直上する。兩線は十字を描いて互に交叉してゐる。而も前者が永劫末代迄も因果律の上より束縛を嚴命する時に、後者はこの因果法に對して、自由解放を嚴命する。前者は一平面に相

當し、後者はその平面を包含する一立體であると云へよう。

宗教に於ても、救を受けざる世界に於ては完全に因果律が成立するのである。神の審判が是れである。即ち惡を行ひし者は、必らずその惡業に従つて審判され刑罰を受けねばならぬ。如何に神が愛なりと雖も、犯したる罪を其の儘放置しない。その罪の目錄に従つて審かれ、惡しき樹は惡しき果を結ばさせられる。

基督教を皮相に解する者は、神は愛なるが故に、如何なる罪業と雖も視過しにし給ふと誤解する者もあるが、之は西と東とを取りまちがあるよりも大なる錯誤である。神は愛なるが故に罰し給ふ。また神は絶對義の方なるが故に寸分の罪をも其の儘で赦し給はない。

この點については、一度惡病の遺傳質を受けたる人はその子々孫々へ嚴然として、惡因が傳はると同様である。少しの假借もなく神は嚴然として審判なし給ふ。これは天地宇宙の理法である。この事實に些の間違も狂ひもない。この地に於て縛ぐ理法は天に於ても同様に縛ぐ。神のこの嚴かなる正邪の審判は地上可見世界に於けるよりも靈界に於ける方が更に嚴肅であり、怖るべきものである。

神は愛なる方でゐ給ふと同時に義の方でゐ給ふ。義なるが故に愛であり、愛であるが故に義であり給ふのである。

義の方面のみを見れば、生物學的遺傳に於ける如く、靈界に於ても義の律法の束縛より脱する事は出来ない。乍併義の緯糸の貫く處に神の絶對愛の經糸が貫いてゐる。神の愛を地上に縛ぐ處のものは親の愛である。父は愛兒を義人たらせんが爲めに鞭打つのである。この鞭は父の愛の表徴である。母は愛兒の立身出世の爲めには、自らを犠牲にし、身を殺して、愛兒の成長を祈願する。母の愛故に、滅亡の深淵に臨みし放蕩息子が悔改めて本心に立ち返る。愛は鞭打ち、愛は身を殺して愛する者を救ひ上げる。愛は自らが代償となつて負債を辨償してくれる。自由解放されし愛兒の輝ける顔を見入つて、自分の苦勞をさへ忘れしめるのが愛だ。愛は一切の律法を全ふしつゝ、一切を救ひ出だす。暗黒を光明に、死を生に、永遠の滅亡を永遠の救と榮光に代へしめる。偉大なる哉天地を貫く神の愛の法則。

宗教とは即ちこの神の愛の法則の眞理を云ふのである。

優生學が論ずる永劫末代迄も貫く遺傳法は神の義の世界の一面の表現であるが、

更に之に超越し、且つこれを支配してゐる神の愛の世界がある。生命は神の愛より泉の如くに湧き溢れてくる。深甚微妙なるは靈界を貫く神の愛の法則に立つ世界である。こゝに宗教的眞理の中心點が存する。

(三) 律法と救

古來二つの相矛盾するが如くに見ゆる力が、吾等の周圍に働いてゐる。生と死が夫れであり、暗黒と光明、罪と救、優生學に於ても先天性と後天性が繩のよれ合ふ如くに相關的に作用してゐる。宗教界に於ても律法と救の二つが互に相矛盾する如く見えて、實は極めて微妙なる調和の中に動く。

靈界眞理に於ける律法と救の關係はまた同時に今後の優生學に於ける進歩を暗示すべきを思ふが故に此處に述ぶる事にする。

神の世界に於ては、先づ第一に出現したのが神の義である。而して神の義は律法の形式に於いて人類に受け入れられた。而して人々が自發創造的に神の義を守る前に、律法なる形式にて萬人に強制され、人類は之に則つて鑄型に入れられ順致され

て來た。之れ各民族に最初より宗教の起りしと同時に何等かの形式に於いて律法の存する所以である。現代に於ける法律制度或は習慣はこの律法の變形にすぎない。

この神の世界に於ける律法の實體が、天地萬象の中に表現されたものが、即ち自然界の原理法則である。多くの科學者は自然界の原理法則は絶對的に存在する客觀的有在だと考へてゐるが、碩學カントの如く哲學上よりの認識に於ては人間の純粹理性の認識によるとなし、又宗教的立脚地より見れば、實に自然界の原理法則は靈界に於ける神の義の實體が地上へ投げかけた投影像であると觀られる。神の世界こそ眞實の實體であつて、物質世界或は生物界の諸法則は、この神の靈的存在の一投影像であると思惟される。換言すれば、物質界或は生物界に一貫する理法は之れみな神の永遠靈界の一具體的表象に過ぎない。この具體的表象それ自體よりも、之によりて表現されたる久遠の靈界の實體に價值があり、その言として諸現象を見る時に深甚なる意味を發見しうる。一切諸法は之れ神の言であり、神の心を表はす活ける不形の文字である。現象自體に表はれたる法則原理として捉へるよりも、更に宇宙

の言として奥の眞意を把握し、創造者自身の心に觸れる處に、より重大なる意味がある。是れが乃ち宗教的立場である。かく觀じ來る時に優生學に於て論ずる先天的遺傳の法則も畢竟するに神の久遠界に於ける生命のリズムが表現されたる一つの「言」であり、不行の文字であると思ふ。之等の言と文字が何を我等人類に表現してゐるか。是れが最大の關心事である。

(四) 罪と死

自然界と人類に表はされた律法は上述の如く、神の世界の律法の一表現である。釋迦は是を因果律にて現はし、自然科學者は之を原理法則を以て表現し、爲政者は制度、法律を以て表現した。是等はみな神の義の各切斷面の示顯である。

神の義の存する處に必らず審判が伴ふ。即ち正邪曲直が夫々の尺度にて測られ原則に副はざるものは、容赦なく宇宙の存在の舞臺より掻き消されて終ふ。天體の諸關係に於ける引力の法則を犯すものは、みな軌道より存在を除外せられ破滅する。また生物界に於ては自然法と呼ばれる約束のもとに自然淘汰が行はれ、所謂適者生

存てふ合言葉でこの眞實が言ひ表はされてゐる。人間社會に於ては法律を犯す者は所罰され、社會的存在より隔離される。靈界にありては、「罪の價は死なり」との聖言の如くに、神への反逆者は必らずゲヘナの火に遭はせられる。人間が死ぬのでない、罪が人を死なしむるのである。

神の律法は恰も奔馬が落馬せる人を網にて引きづり廻しつゝ、走り行く如く、一切の被造物、天體も水も草も虫も人間も凡百のものを牽引して行く處まで押しやつて終ふ。天地宇宙一切の被造物はみなこの羈絆より脱せんとして脱する能はず、浮木の如くに大洪水に押し流されて行く。この一面觀に生くるものが即ち運命論である。

されども、人は果してこの自然法と律法との下敷となりて永久に引きづり廻されて行かねばならぬ者であらうか。此處に人生に横はる最大の疑問がある。また優生學に對する根本的なる疑問がある。

生物界には自由が許されないのであらう。優生學が基礎づけられた遺傳研究の諸材料となつた生物に於いては、メンデル、ダーウキン、或はワイスマンの認識した諸原

理が普遍妥當として容認され得たであらう。然しながら、宗教意識に生き、神の聖靈の中に活くる靈的實在たる人間の中には、他の生物に於いて見出し得ざる一つの自由律の附與されてゐる事を見逃してはならぬ。宗教眞理の光は三次元の現象に對して四次元の現象を可能ならしめる、一切の因果律を征服すべき能力を驚くべくも神より著せられてゐる。

他の生物と人間との間には異常なる相異がある。葉も花も同じ植物の一部である。構造も化學的成分も酷似してゐる。然しながら、生命的表現として見る時に兩者の間には嚴然たる差別を存する。葉に妥當なる原理も花に於ては當て嵌らぬ。花はその独自の姿に於いてその眞理性を極めねばならぬ。

一般生物に於て妥當なる生物學的原理を直ちに次元の異なり、本質の異なる靈的實在に當て嵌むる處に過誤がある。靈的眞理を無視したる生物學的原理を以て直ちに最高の人類を律せんとするは、恰も低溫度にて觀察したる化學反應の法則を以て、直ちに千數百度の高溫條件に於ける化學反應を律せんとするに等しい。思はざるも甚だしい。低溫度にて不可能なりし反應も高溫度に於ては容易に行はれうる。

赤外光線が感光性なく熱作用のみなるを知りて直ちに紫外光線も感光性なしと斷ずる早計に陥つてはならぬ。人間と他の生物の間に、また同じ人類にありても、神よりの聖靈の能力に生くるものと然らざる者との間には、上述の物理化學的引例以上の莫大なる相違のある事を知らねばならぬ。

律法は一切の被造物を永久に解き難き鐵鎖に縛つて終ふ。嗚呼、われ惱める人なる哉、この死の身體より我を救はんものは誰ぞやとの呻き聲はこの鐵鎖の中より不斷に叫ばれる被造物の聲である。

かゝる拘束の中において、自由と希望と感謝は湧いて來ない。然るに全人類の人命にかけて熱求する處は自由であり、滅亡より救はるゝ希望であり、また永生に入るべき歡喜に對する待望である。

律法に縛らるゝ人類から、どうして神への感謝が湧いて來よう。何處から「神は愛なり」との讚美が歌ひ出されようか。人類が最大の願望として熱求する眞の幸福とは、絶體自由と永遠生命の獲得である。一切の滅亡を脅かす罪の負債より赦され、滅亡よりの自由解放である。過去の因果律より解き放たれる一事だ。生れながら

の盲目者は見、聾者は聞き、癩病人は潔められ、死に定められし者は永遠の救にあづかる。この事實なしに人類より光明は消へ、幸福は奪ひ去られる。ただ暗黒と失望のみが残るであらう。

この律法に對する自由解放の道が天地萬有の前に開放されておるとの眞理を宣言したものが即ちキリスト・イエスであつた。そは神の愛の中に秘められし眞理の光である。この力に觸れる時に一切の暗黒は忽然神の光の中に輝き渡るであらう。神の愛の世界に一貫する原理を、奇しくも人間は最大限度に於て受け得る特權にあづかつてゐる。律法は第一階梯に現はれし神の義である。先づ第一に伸び出し、し靈の若葉である。けれどもその後、永遠の果を結ぶ美しい花が控へて待つてゐる。之が神の愛である。過去の人類歴史はまだ若葉の時代であり、神の義を學ばさせられる時代であつた。けれども我等は神の一面と同時に、他の片面なる神の愛の法則を充分に知悉することが出来る。神の律法が拘束する如く、神の愛は解放する。遺傳の原理が久遠に人類を拘束すると同時に、また神の愛を中心眞理として靈界の法則は鐵鎖よりの自由解放を教へる。此處に救がある。

肉體はやがて數十年にして墓場に朽ち去るであらう。惡遺傳を受けし不具の肉體もまた病弱の身もどうせ墓場迄の短い旅路の不自由であつた。墓場はかゝる一切から解放する。而して肉體の上衣を脱せし人間の本體なる靈は天使として永遠に救ひ上げられる神の愛の眞理が全人類の前に提供されて居る。肉體生活は短い。靈體の生活は永遠に至る。

遺傳の法則は肉體の上衣を帯の如く縛る。許さるゝならば、この上衣も美しく、より清く、健全であらしめたい。然しながら人の本質は靈である。若し肉體の眼關ならば全身くらからん。若し内なる靈の光關ならば、その開いかばかりぞや。身體の健康は衣の美服にまさり、靈の完全は身體の健康にまさる。

靈の永遠の救、之れにまさる優生者はあり得ない。この一事はただ神の愛と神の義の眞理が成就してくれる。人の力に由るにあらず、自己の善行と努力によるにあらず、ただ神を信じ、神の愛より出づる天來の賜物を幼子が母の乳を有難く戴く如く信受するか否かによる。神は自らの親心ゆへに、信する者の心の中に靈的新生を與へ、未だ目見すまだ耳聞かざりし驚くべき靈的維新を各人の心中に成就し給ふ。宗

教に言ふ處の悔改と新生が體驗さるゝ時、人心の最深部に突然變異が行はれる。如何なる劣生者と雖も萬人均しく最大の優生者と同様に神の前に全き靈性が附與せられる。一旦眞心より罪を悔ひ改め、古き自己を神の前に水葬し、神よりの聖靈を注がれ神の本質の像なる神入の新生活命につながる時、優生者も劣生者も富める者も貧しきも、智者も愚者も均しく神の前に平等に神の子として受け入れられる。彼等は均しく共に天國に籍を移せしものとなる。此處に全人類萬人の全き救の道がある。之れ神が人類に約し給へる福音の奧義であり、宗教生活最深の恵の泉である。

第五章 信仰と宗教

(一) 神の實在

優生學と宗教の關係を論ずるに當りて、是非とも説いておく必要のあるのは信仰の内容である。信仰とは宗教の大目的を達成する方法論である。この方法論が人間完成の大業に甚大なる關係を有する。最大の優生者を出すは、けだし信仰の力によると私は確信してゐる。教育、善良なる家庭その他一般の優境は大切である。然しながら凡百の優境の中に最大なるは信仰であらう。この信仰が後に論せんとする後天性と遺傳についての問題の中樞軸となる故に、この章に於いて信仰とは何であるかを概説したいと思ふ。

宗教の定義については先きに既に述べた、「神に對する人の道である。」同じ内容を「神との靈交である」とも言ひ得る。神と人間が正しい關係に立ち、神が人を愛し給ふ如く、人は神を眞心と誠赤を盡して愛しまつり、神に仕へて行くことである。神

に愛され、神を愛し、神に仕へて行くには、それぞれ道がある。その道を信仰と云ふ。故に道を通らねば目的地につけぬ如く、信仰なしには宗教生活はなし得ない。道にも直線道と彎曲道と邪道とある如く、信仰にも神に直面して進む直線的信仰道もあれば、神の顔を正面に見ずして隠れながら間接的に神に近づき行く彎曲的信仰道もある。また信仰と稱しながら迷信邪道に陥つて、一步進めば一步だけ滅亡の斷崖に近づいてゐるものも世には多い。此處には第一の直線道に立つ信仰の内容について述べたい。而してその代表の一つは聖書の啓示する信仰がそれだと私は信ずる。信仰が正しい道に來り、神よりの靈光を直接に受けらるに至ると、恰も春光にあひし草木の如くに、そこに不思議と見ゆるほどの新らたなる生命的現象が現はれてくる。これが所謂信仰の體驗である。善き樹は善き果を結ぶ。悪しき樹は悪しき果を結ぶ。凡そその結ぶ果實によつて樹の善惡を知るべし。信仰が眞正なるものであるか否かは、その結果の事實の正邪善惡によつて推知しうる。

信仰の如何によつて善き果を結ぶ者あり、悪しき果を結ぶものもある。故に、ある場合には優生運動に對して、プラスの反應を與へ、他の場合にはマイナスの結果を齎

らす。故に豫め斷つておいたように宗教と信仰の内容は聖書の啓示とその信仰體験を主要素として此處には論ずるのである。

(二) 信仰とは何ぞ

先づ第一に宗教の内容について簡単に説明しておく。宗教に三つの因子がある。神と人と兩者の靈交である。この三つが確定してくれば、従つてその方法論たる信仰内容は、おのづから定まつてくる。

神とは何ぞ。此の問題一つで鵝澁なる書ともなるが、此處では端的に結論のみをあげる。神は靈なる實在にして、天地の創造主である。神は人間の主觀的所産でない。觀念でもなければ概念でもない。無論人々の安心の爲めに想定したる假空的幻影ではない。吾等が肉體の中に如何に否定せんとするも能はざる「我」が實在する如く、天地の中に靈的全能者が嚴然と在し給ふ。神は生きて在し給ふのである。説明され、論理づけられた後に、「我の存在を知るのではない。反對に説明を求め、論理づけるものが、我なのである。天地大自然界の理法と論理から合理的に説明されて、始め

て神の實在を信するのでない。神が生きて在し、天地を支配してゐ給ふが故に大自然界が理法の下に運行し、人間の心に理性が興へられてゐるのである。人とは醫學的に血液を分析研究し、その結論として始めて「彼は我が親なり！」と斷定するのでない。我が存在してゐる事が、親がある證據なる故に、必らず親が在ると信じて探し求める時に、愛する親が何處かにおられるのが容易に分つてくる。神を求め、神を見する要諦はこゝにある。

神は知識にても感情にても意志力にても分らない。神の本質は靈で在し給ふが故に、人間の心に盛られてゐる靈と誠心をもつて靈覺すべきである。花が紅なるは手にて判斷するにあらず耳に依らず、直接に眼にて直視する者のみ分るのと同理である。故に科學上の知識と理性にて神を求める事は、外國旅行に先き立つて案内記を研究するが如きである。有益ではある。けれども眞實の大西洋とアルプスの山々は案内記中には存在しない。自らがその場に臨み、肉眼を開いて見なければ、洋々たる大海も、峨々として聳ゆる山々の實在も分らない。けれども、一度肉眼で見た人々にとつては、如何に密雲が山々を蔽ひ隠し、詭辯家が口論しても「此處に山あり」と

の信念は動かかない。その事實について一點疑ひ得なくなる。天地に生き給ふ神も斯くして極めて明確にその在す事がつらつら手にて觸れし如く、つらつら目にて見し如く自らの胸底に明らかとなつてくる。この實驗に生きて祈り求むる時に恰も電流の相通する如くに、靈妙なる力が我が身に臨み來るを實驗するに至る。かくて靈的生命の交通が始まる。

斯く經驗し來ると、我等の人生觀は根本的に革命されて來る。從來人間がどうしても一個の生物としか見えなかつたものにも、忽ち靈的單位としての人の姿が見えてくる。人は一個の靈的ラヂオの受話器なる事が分つてくる。活ける神の光の下に立ち、始めて吾等の人間觀が一變する。この新らたなる靈的單位としての人間の姿に觀察の焦點を合はし來ると、一切の價值判斷が顛倒して終ひ、從來の優劣觀が全く逆になつて終ふ。

心眼開け、心の花が咲きそむれば、おのづと神との靈交が始まり、祈禱は呼吸の如くに自ら生じ、神との靈交こそ生命の根源なるを悟るに至る。祈りは實に呼吸である。呼吸なしに人は生きられない。神との靈交なしに、「眞實なる人は死の状態におか

れるのである。

斯く觀じ來らば、宗教的眞理に生くる者の言ふ「人と、生物學者の云ふ「人」との間に非常なる間隔のある事を見出すであらう。後者の云ふ「人」は前者の云ふ「人の住家であり、上衣である。住宅なく、上衣なしに人は健康を保ち、活動し難き如く、生物學的の「人」なる上衣と住居なしに、靈なる眞實の人もこの地上に於ける使命を果し難いのである。故に信仰上より見れば、生物學的人間は、靈の住居以上には見られないのである。優生學はこの住居の建築を改善し、玄關番や下女下男を立派に養成せんと努めてくれる。これも重大な使命の一つである。然しながら、宗教は住宅にあらず、下僕にあらず、住宅の主人そのものを惡より善に造り代へ、罪の疾病より永生の救へと導かんとする處に兩者の相互關係がある。優生學的運動は宗教的救の運動に對する前者であり、後者の新約的救に對する舊約的準備であると云ふべきであらう。

信仰とは上述の如く、宗教の目的を達成する方法論である。如何に高遠なる目的を明示する宗教ありとも、それに到る方法論なる信仰が誤つてゐるならば、到底その目的地には到達し難い。また世の所謂信仰態度が正しくとも、その目的地の所在が

明確ならずんば、信仰の意義を失ふ。故に宗教の目的と信仰の方法論もの兩者が正道に合致せざれば、我らの云ふ宗教内容を構成しない。

宗教の目的は繰り返し論じたる如く、永遠生命の獲得にあつて現世的な安心立命であり、後者は前者の實體に伴ふ第二義的結果である。

この目的を達するには方法論としては少なくとも三つの條件が具備しなければ、目的は達せられない。即ち信仰の内容は三つの因子に分解される。

第一、活ける神の臨在を信すること

第二、罪の認識に生くること

第三、救の恩寵にあづかる事

以上の三つが三位一體となつて智情意の三者の如くに一つになつて來なければ、信仰が生命化して來ない。信仰は神の生命を人が受ける事であつて、人が單なる安心や自己利得の爲めに信するのではない。

處が世の中には信心家と云ふ人々が、たゞ神社佛閣に熱心に參詣することを信仰家だと云ふ。彼は敬虔な人であると云ひうるが、信仰ある人とは云ひ得ない。また

自分の罪を認識せずして、單に後生大事をのみ神佛に祈願する心は誤つてゐる。罪を懺悔し悔改めて、神の新生生命中に新生しなければ、如何に神佛にたよつても、切符を所持せぬ旅人は汽車に乗れないと同様である。また神の存在は信じ且つ罪をも實感して懺悔しつゝも、自らの難行苦行にのみたよつて自力にて救を完成せんとしても、それは至難のことである。自力的努力は極めて大切である。けれども單に夫れ丈けでは人は決して救はれない。人の救はるゝは神よりの恩寵の中に引き上げられる事による。單なる他力本願に頼つて不道徳を敢てしてゐるのでない。日毎に悔改と死生と自己最善の努力をなしながら、大能の神が備へ給ふ無盡の光を受け、恩寵による罪の赦と、新らたなる上よりの能力を著せられつゝ、永生の道を神の憐憫のもとに前進する、神と偕なる歩みが信仰生活である。

信仰の内容を基督教的に端的に言ふならば、罪を悔改めて、イエス・キリストを信する事即ちキリストの十字架を仰ぎ瞻て罪赦され、發心して神の聖靈と偕に歩み、救の完成にあづかることである。

以上三つの要素が同時に、人の心に臨むと、他の場合に起らざりし事象が人心の奥

から生れてくる。例へば冬の天地に於ては太陽は光を地上に投げかける。けれども春の光の如くに萬物は甦生しない。それは、冬の日が一つのものを缺いてゐるからである。夫れは熱である。冬の光は地下にある種子の内部の最深部を暖めて新生命を呼び起こす力を缺いてゐる。けれど春の光は冬の光と比して分析上の結果も物理的性質も同様であるが、ただ一つの或るものが上より加はつてゐる。夫れが加はると忽然として萬物復活し、新天新地が眼前に展開してくる。この點が智的教育と宗教教育の根本的相違であり、また科學と宗教の差であり、更に世の所謂信心と眞の信仰の相違である。故に優劣を論ずるに當つても冬枯の野邊に蒔かれたまゝの種子を外見上から比較するのではなくて、美しく咲き匂ふた百花爛漫の春に於いて己がじし咲きはこる草花自身の美醜を決定せねばならぬ。

人間の優劣に於ても、知識に於て啓き得ず、富に於て達し得ず、地位に於て觸るゝ能はず、地上の何物も開き得ざる心の最深部を信仰の春光によつて開き、開花結實せしめた最後の完成の姿に於て、何が優であり、劣であるかを比較せねばならぬ。かくして具體的に優生運動の最高峯が何であるかが判明してくるであらう。

(三) 自然科學と信仰

私は信仰をば宗教目的を達する一つの方法論だと云つた。この意味を自然科學と比較して考へて見れば、良く了解しうると思ふ。

自然科學は宇宙の眞理探求を目的とするが、この目的達成の爲めに我等が常に採用する方法論は、之を藝術眼で見る事でもなければ、價值觀の立場でも見ない。いつでも數理關係に於て探求を進めるのである。即ち自然科學が採用する方法論は數學であり、數理論である。自然科學の一切は數學的理論の上に組立てられてゐる。この數理的方法論なしには科學は成立せず、また現代科學者が認識してゐる玄妙なる宇宙觀、自然觀は生れて來ない。現代自然科學大系は實に數理的方法なる網にて、すくひ上げた大きな魚族である。

故に海は魚ばかりだと考へる事は正しくない。同時にまた水中には魚の外には生物なしとは断定し難い。同様に、宇宙の大海には科學者の網から洩れてゐるものが如何に多くあるか知れない。彼の網の中には海そのものは一つも入つて來てゐ

ない事に注意すべきだ。

方法論を變じて、網の代りに手桶を投じて一掬の海水を汲み上げ、之を煮詰めて見れば、海の味の本質たる食鹽が雪の如く結晶してくる。宗教は信仰と云ふ手桶を以て宇宙の靈界の水を汲み上げ、宇宙の本質を把握せんとするものである。

然らば、信仰が採用する方法論は何であるかと云へば、良心が取扱ふ數理である。頭腦の數理でない、良心的數理である。自然科学は頭腦の數理であり、宗教は良心の數理である。

數學は數理哲學の上に基礎づけられる。算術、代數より微積分に至る迄一切の數學は一見甚だ難解に見えるけれども、實は極めて單純なる一つの疑はんとして疑ひ得ない直觀的原理の上に立つてゐる。それは一に一を加へば二となり、決して一、九九でもなければ二、一一一でもない。必らず二になるとの事實である。之れは全く論理を超越したる超論理的合理的の内觀に基礎づけられてゐる。一に一を加へて二になるとの事は、如何なる碩學者と雖も論理的に説明し難きことであると同時に、また三歳の幼兒と雖も直ちにうなづかれるものである。最も難解とする數學は、か

くも極めて單純なる信念の上に立てられてゐる。而して若しも一に一を加へて二とならず、その結果が〇、五になり或は三になる世界が、どこかの星界にあるとすれば、その星の人の構成する自然科学は我等のものとは非常に異なるものとなる。方法論の種類が變化しても、また同じ方法論にてもその内容が異なれば、我等の周圍を包む天地宇宙の實相は異なつて寫つてくる。

かくの如く、自然科学は數理的方法論により宇宙の眞相に智的に觸れんとして行く。この時に、宗教は良心的數理を方法論として、宇宙の實體に觸れんとする。

然らば良心的數理とは何を云ふのかと云へば、我らの心には、一に一を加へば三にもあらず、〇、五にもあらずと叫ぶ超論理的合理性を具有してゐる。その如くに人の心は一切の議論を越えて「これは正しい！」とか「夫は正しからず！」との不思議な叫び聲を内觀的に聞く。何が善であるか、何が惡であるかは、哲學的説明を待たずとも、直觀をもて首肯する。超論理的なる合理の不思議な光が内部に生きてゐる。數學に於いては、ある一つの式の答を一〇〇と書くべき處を僅かに過まつて九九と書いても、また一〇一と書いても不正である。直線を引く時に、直角の九十度が寸秒狂ふて

も交錯點は不正になる。同様に我らの良心は支拂ふべき一圓の金銭を九九錢支拂ひ、先方が氣づかずして、その儘すんでも、悪い事をした！と五寸釘を胸に打たれたやうに感ずる。また千言萬語を語るにも、一言にても虚偽あらば、之を「是なり」と許し得ぬ良心が内部に生きてゐる。良心は實に超論理的合理の天の聲である。碩學カントが叫んだ。「われは二つの不思議を見る。仰ぎ見る大空、俯して見る内なる道德律！」と。大空の星晨が微妙なる數理的關係にて肅々と運行せる如く、地にある人の胸中には微妙なる良心が働き、日々夜々人々はこの良心の聲に従つて運行してゐる。

人生は良心的數理を原則として運行する諸星運行の軌道である。善惡曲直を直觀的に命ずる絶對命令の聲がこゝにある。この良心的數理を一つの方法論として永遠の太古より永劫の未來まで肅々として運行し行くこの宇宙の實相とその本質を探求する時に自然科学者が客觀的眞理として發見したと全く同様に、こゝに一つの客觀的實在の世界を發見し得る。夫れが活ける神とその世界である。靈なる神の實在と永遠の生命、やがて出現せんとする新宇宙と人類完成の姿とが夫れである。宗教はこの世界を良心の超論理的合理性を方法論として宇宙の眞理を探り求め、神

と偕に人は神に用ひられつゝ、その完成に進むものである。

(四) 人間の不善と虚偽

良心を方法論として天地宇宙を考察する場合、科學者は直ちに一切を支配する原理を發見する。その如く吾等の發見するものは、自己の虚偽と不善である。罪惡深重、罪の下敷となり、惡の重圍の中に陥つてゐる自己の發見こそ宗教的光明界への轉機である。己が欲する處の善は之を行ふ能はず、欲せざる處の惡は却つて之を行ひ、善を思ふ我はあれども、惡を行はしむる罪の法が我が肉の中に宿りて我を支配せる事實を見出す。罪の價は死であるとの聲に「戰慄」する。罪の後方に影の如く暗く追ひ來るは死の虞であり、その後には迫るは審判の恐怖滅亡の悲哀である。滅亡を眼前に意識しつゝも、なほこの紅連の火より逃れんとする悩みが我にある。けれども、審判は既に我が頭上にあり紅連の焰は周圍より我を呑まんとしてゐる。それでもなほ救はれたい。之が人間本來の聲であり、人の心の眞相だ。「あゝ、我れ惱める人なる哉、この死の身より我を救はんものは誰ぞや」との聖パウロの叫びはまた我等のもので

ある。

良心數理を方法論として出立する時に、どうしてもこの罪の奥道に逢着する。この罪の解決を爲し得ざる者は、入學試験場にて問題の數式に對して「答」を書き得ない人だ。それから先に入學して學ぶ新らたなる學校の光を目撃する資格は毛頭彼には無い。人生の落伍者にならざるを得ない。

如何にすれば、この人生の試験場にありてあらゆる問題に明答を與へて新天新地に入る事を許されるか、その方法が即ち上述の信仰内容である。

第一に神の臨在とその愛を確信し、第二に罪を悔改め、キリストの内に新生し、第三に神の恩寵による罪の赦免と救とを受ける事である。かく三つの手續が自己内部の心靈的實驗として具備し來る時に、奇しくも神の春光は彼の心中に輝き初め、冬枯の自己の野邊は百花爛漫の春に復活し、天國に國籍を移すものとされやう。「キリスト・イエスと偕なるものは、古きは去り、見よ、新らしく造られたるなり」(コリント後書五章十七節)との聖書の言が實現してくる。信仰による新生！是れなしには、人は眞實の人間とはなれない。

第六章 救とは何ぞ

(一) 眞の救

宗教を論ずるに當り、その窮極點なる「救」の内容が何であるかを定めておかねば、優生學との關係を論じても、問題の焦點がぼんやりして終ふ。

何れの宗教もその窮極の目的は神人合一の境に活くる事にあるも、立場によつてその内容を異にする。佛教の極致は、解脱と涅槃にある。寂滅的豊かなる氣分があるに反して、基督教に於てはその窮極目的は「救」の完成にある。

「救」と云ふ以上には、その正反對の滅亡を前提として出立する。滅亡を豫期し得ない處に「救」はあり得ない。信仰の道が正しい焦點に合つてくると、人の心の乾板に寫り來るものは慾は罪であり、罪の價は死であり、神への反逆は永遠の滅亡であるとの明確な眞理性である。單なる肉體の死ではない。よし肉體が生存しても、肉の死にまさる死の苦惱と永劫に至る滅亡の恐怖を人の心は感受する。かかる感受性の生

れない人には宗教は恰も暗夜に聳ゆる富士の秀峰であり、その存在は全く没交渉となつて終ふ。無宗教の人或は未來審判の豫感とその恐怖なき人、罪が滅亡の根源なる眞理を悟得し得ない人は感覺の痺れたる皮膚患者であり、また靈的盲目である。彼の前には美しい富士の高嶺もなければ、野に咲く花の美も、幼兒の輝く額の氣高きさも分らない。罪惡意識の深い人は強い光の前に直面してゐる人である。惡を行ひつつも、罪を意識しない人は光の蔽はれた暗室に立つ人である。彼と此との差は晝の世界と夜の世界以上に懸隔がある。その内の生活に至りては、窓ぎわに置かれた籠の小鳥と食卓につく、憐れな幼兒の心以上の相違がある。兩者は同じく主人から愛されてゐるが、小鳥は幼兒の解し得る主人の言葉に對して全く無理解である。幼兒は父親の言に従はんとするが、小鳥はただ餌をのみ求むる。世人の論ずる優生劣生の觀方が小鳥に對する夫れではなくて、幼兒に對するものであつて欲しい。

「救」は罪惡意識と滅亡意識から出立する。故に罪惡觀念なき犬猫や草花には、救の意識はない。暗黒意識は光明への豫表である。人生五十年の有限感、は永遠生命の豫告である。我らが心に罪を感じうる事が有難いのだ。世の論者が屢々言ふ。神

が全能にして全智ならば、世に罪惡を存在せしめない筈だ。罪惡をして存在せしめてある以上は、神は罪惡を是認しておられるからであらう。若し罪惡が神の否み嫌ふ處であるならば、全能にして愛なる神は、世に罪惡が起らぬやうに人間を造るべき筈ではないかと論ずる。然し是は神を罪の賦與者と爲す見方で、自己の罪を云ひ逃れんとする頑なる心より發する議論である。即ち罪人たる事を自證する叫びである。吾々はむしろ人間の心に罪を意識する心を神が與へた事が神の愛であると觀る。また善惡何れをも撰び取り得る自由を許してくれてゐる處に神の愛の表現があると思ふべきである。自由の存する處に責任があり、責任のある處に審判のあるのは理の當然である。

良心の奥を貫く論理を辿つて行くとき、どうしても此の峠へたどりついて周圍に展開する光景を展望する事になる。生の意識の奥に死があり、死の意識の奥に更に新らたなる生がある。眞と善と正とを求むる他面には必ず正邪と眞偽の審判が待ち不正不義なるものの投せられる滅亡の淵も、足下に望見し得るわけである。

宗教の啓示する眞理の光は、この罪と滅亡の觀點に立つて見なければ展開して來

ない。神の世界は甚深微妙である。光は闇黒に於いて初めてその眞の姿を示現する。神の救の眞理も同様である。故に古來の宗教にしてただ神の光明の側のみ高調して人間の罪惡性とその審判を示さぬ宗教は論理に於ては正しい場合も、現實に於いて躍如たる生命を與へない。

宗教に於て云ふ「救」とは不治の病氣より救はるる「救」でない。無論貧亡と煩悶と不幸とより救はるる單なる「救」ではない。これらは救の支流であつて本流ではない。本流の水源地の扉が開かるる瞬間、これら一切の支流には滿々として天つ眞清水が溢れ来る。世には神信心して病氣が癒され、不幸が除かれたならば、信心の功德によつて救はれたと歡喜する人々が多い。之れらは救の奥義に對して、僅かに山門の鳥居を仰いだ位であらう。靈界の眞理は更に更に深い處にある。

また世の多くの教育家と倫理運動家は世の墮落腐敗を慨歎して、是非ともかかる惡習癩を法律と社會制裁とを以て矯正せねばならぬ。かくかくの惡事は行ふべからずと聲高らかに嚴禁し互に相戒めて惡行より離れんとする。誠に善き事である。然しながら多くの場合は徒らに聲のみ高くして事實は依然として絶えず惡習は斷

へない。反つてその根は法律と制裁の外面を乗り越えて人心の奥深き處に潜み込み、病は益々膏肓へと侵入する。現代に於いて法律が完備し教育制度が整頓するに拘はらず社會の墮落は滔々として流れに流れて今や社會國家の危機に迄及んでゐるのは、以上の事實を最も雄辯に物語るものでなくて何であらうか。

(二) 救の根源

かかる時に宗教眞理は何を指摘するか。宗教特に聖書は之を三段に分けて指摘する。第一は罪の行爲は心の「惡念の爆發なるを示し、第二に惡念は心の腐敗より來る事を示指する。心に腐敗なくんば、外面への惡行は生じない。内部に膿を持つが故に、時來つて外部へ汚れを流出するのである。心に姦淫を爲すが故に、行爲に現はれる。「心に色情をいだきて女を見るものは、心既に姦淫したるなり」とキリストは指摘する。「汝等人を殺すものは罪せらるべしと云ふ。されど我れ汝らに告ぐ。心に人を憎む者は既に殺人犯たるなり」と。心中に人を憎む心が淨化され、敵をも憐む親心が生ずる時に、いかで殺人罪を犯す惡業に陥らうぞ。人生一切は我らの心の所産

である。心の腐敗より罪は生じる。第三に、心の腐敗は神よりの離反によつて惹起される。人の心が神より離れ去る時、幹より離れし枝の如く地に落ちて腐敗を初める。神は一切生命の根源である。神より離れしものは水より離れし魚の如く忽ち死と腐敗が迫り来る。神よりの分離は草木の根を断ち切る事である。世の一切の罪惡はこの第三の下水より流れ出づる。故に惡業の行爲のみを責めて、社會を淨化し、家庭を淨めんとする者は、水源を忘れて河口の濁水を淨めんとするものである。外部に現はるる個々の罪の源は心の奥に深く横はる腐敗である。而して此の腐敗の源は神よりの離反である。

故に、人々を罪より救ふ爲めには、その源泉に遡つて神との離絶を恢復し、先づ神と和らがしむるに在る。活ける神の大生命に觸れしむる處にある。神の生命が流れ貫く處に、萬物は甦生し、おのづから心の腐敗は癒やされる。心の腐敗が癒やさるる時、おのづから惡念は去り、惡業は消散して了ふ。宗教的眞理に基く救濟法は實に此處に存する。末に走つては、努力奮闘も如何なる明智も教訓も効果がなない。源泉に觸れて始めて事績は擧る。人に神を示し、人をして神との離絶を恢復せしめ人をし

て神と和らがしめ、神の義と愛に生かしめるのが信仰による救濟である。而して、この神との和らぎ恢復を完ふせしめたのが實にキリストの十字架であつた。之れなしに罪の痛手に悩む人の子の靈魂は平安と和らぎとを他に見出し得ない。聖パウロがロマ書第五章に於いて述べた「斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエスキリストに頼り、神に對して平和を得たり。また彼により信仰によりて今立つ處の恩恵に入ることを得、神の榮光を望みて喜ぶなり、然のみならず患難をも喜ぶ。そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を來らせず、我らに賜ひたる聖靈によりて神の愛我らの心に注げばなり」と。實に深い體驗の聲である。

(三) 救の三階梯

然らば古來多くの聖徒と信徒が血を以て證詞したるキリストによる「救」とは如何なるものであるか。この内容は三項目で示される。

第一 罪より分離されること。

第二 死より解放されること。

第三 神の子とせられ永遠に神の世嗣とせらるること。

第一、罪より分離されること。神の本質の像なるイエス・キリストと我とが幹と枝の如く相連なるに至らば、枯葉は落ち新芽はいよいよ繁りて、おのづから罪の枯葉と神心の新芽とが置換へられる。かくして「汝の罪赦されたりし」との聲を神より聞くに至る。多くの諸聖徒が「十字架の血潮は凡ての罪より我らを潔む」(ヨハネ第一書第一章七節)と叫んだのは眞實なる體驗の聲である。天よりこの聲を聞きこの事實を身に引てあて體驗しうる者は幸福である。

第二、罪の法則より自由解放された後には神の永遠の生命が彼の上に注がれ、死に打ち勝つ力が内部に整ふてくる。生物學的生命が働いてゐる肉體は死の時が必ず来る。けれども救はれし者にとつては、それは單に肉衣を脱ぎ捨てる事だ。眞實の我は靈體として神の國に移される。聖靈が内住し給ふ神の子には最早や死はない。不死の生命に入れられる。この事は信仰生活を多年體驗する者にとつては、恰も花の奥に結ぶ子房が徐々と堅く充實してくるやうに、我が内に之を靈覺しうる。よし

肉體の花瓣がいつ地に落ちて、内なる子房は外なる花瓣と異なり、永遠に朽ちざる事を自得する。實に人は朽ち果つる肉體の中に朽ちざる或るものの生ずる爲めに人生におかれてゐる。五十年の刻苦とさまざまの修業の場所たる人生はこの爲めである。

第三、かく罪より分離され、神との離絶が恢復され、神の生命につながるに至ると、人は神の子とせられて、不死の生命に移され、神の嗣業を賦與せられる。神の嗣業とは神の世嗣にせられる事である。換言せば、やがて來るべく完成せられたる宇宙の世嗣とせられ、改造靈化されたる全世界萬物、全宇宙を賜はると云ふのである。これは實に壯大なる希望である。これ實に神の子がやがて世嗣として神より受けんとする無二の不朽の賜物である。

前述ロマ書第五章のパウロの引句の中に「信仰によりて今立つ處の恩恵に入る事を得、神の榮光を望みて喜ぶなり」とある。望みて喜ぶ希望とは即ち、此の神の子の特權、改造完成されたる全世界萬物の主人公とせられるとの希望を指すのである。信仰に生くる者の持つ處の最大の希望、最大の榮譽は是れであり、救の完成は此處にあ

る。こは恰も地下の種子の内部に春光が浸透し胚種と合體する時、新生命を發する如く神の靈が我らの裏に内住して、我らの靈と合體融合し、我らを助けて、救を完成せしめ給ふのである。

故に宗教眞理より云へば、一切の苦難から救ひ出され、解脱することのみが救ではない。最も主眼とする處は内的靈眼が開かれ、靈界の光榮を如實に靈覺するに至り神の聖靈の内住の恩寵を受け、罪は追放され、死は不死の生命と置き換へられる。かくて神の國に入るのみならず、やがて來るべき靈化されたる新宇宙完成後の世嗣とせられる希望の下に、この地上生活を營まさせられる。

故に同じく此の世にありて同様の不幸艱難一切の矛盾撞着に逢會すとも、人生に對し、自己自身に對する觀點に根本革命が既に成就されてゐる故に、苦難は恩寵の泉と變り、世の矛盾撞着は神の愛心を尊ぶ教材と變る。移り行く世にありて永遠に移り行かざる實を與へられる。天地は過ぎ行くとも久遠に過ぎ行かざる光に照らされて萬物を見返す能力を與へられるが故に、世の智的教育や單なる情操教育、その他あらゆる生物學的還境にては觸れ得ざる奥深き處に神の靈能が働き、この世にあ

りて最高の還境が與へられる。

而して死後に於ける靈界の實在については、最近の心靈科學者の研究が大なる光を放ちつつある一事を閑却してはならぬ。物理學者として有名なるサー・オリバー・ロツヂなどの學的研究を見るも既に死後靈界の實在は最早、や議論の時代は過ぎて疑ふべからざる實在として認容する外なき迄に進歩してゐる。

今まで宗教が科學者の立場より非難を受けたるは神の非實在性と死後靈魂の非實在論であつた。けれども近代科學の範圍が明かに批判され、哲學を俯瞰する時に近代科學は神への大道の一指標とこそなれ、神を否定する何等の權能を有しない。なほ無神論者たるは乃ち自己の無智の表白である。死後靈魂實在についても之を否定するは人間の本質に對する著しき認識不足の自白だ。かかる否定に耳を藉すべき時代は疾くに過ぎ去つた。科學は更に謙讓なる態度を以て哲學に學び、宗教眞理に眼を開いて傾聽すべき時が來た。今がそれである。科學は宗教を批判する主人公にあらずして、宗教眞理こそ科學を批判すべき最大眞理の主人公であることを忘れてはならぬ。

第七章 信仰と人間の變質

(一) 靈が主か客か

信仰は人間に最大の變化を與へる原動力である。肉體四肢は五體の運動によつて成就され、智能は知識的訓練に依り發達す。然し如何に智能が進歩しても、肉體はそれのみでは發展しない、反つて學者に虛弱者が多い。そは智能は肉體を支配してゐないからである。けれども靈は人間の王座を占め、靈の死活は肉體の死活の主因となる。人間は生物學的・一生物であると同時に、宇宙の靈的一單位である。而して靈は肉を支配する。決して肉が靈の王座ではない。この關係が生物學者と宗教家との間に存する意見の相違點である。前者は肉體の健康に比例して心靈は健康になると云ふ。肉體が主で心靈は客だと見る。一般に科學の世界にのみ籠城してゐるものは、この觀方に組し易い。けれども宗教的眞理に生くるものは、靈が主體なるが眞理なりとの確信に立つ。著者もその一人である。

なるほど肉體が病氣の時には、精神も力が衰ふる如く見える。而して肉體が健康になるに従ひ精神も活力の度を増してくる。これは事實である。けれども、この現象は或る特定の條件におかれてゐる時に限られる事を知る。即ち信仰が零である時肉體は上層より精神を壓迫し、精神はその下敷となつて自由を奪はれてゐる。未だ聖靈の内住を受けず、生れながらの人間としては内的發芽力に乏しき故に、肉體に故障ある時は、丁度破れたる容器から水の漏洩する如くである。精神的活力の水準線は段々と低下して精神的壓力は減少し行く。この場合に健康の恢復する事は容器が修繕されて水の漏洩が止まつた事を意味する。

然しながら一旦、人が信仰の要諦を體得して、神の能力を著せられ、聖靈の内住を受けるに至ると、恰も春の野の草の如く、新生命は勃然として萌芽し、土深き中より岩石の重力にも打ち勝つて堅き殻をも打ち破りつゝ、新芽は單獨種子だけでは到底期待し得ざる大變化が展開してくる。若しも此處に種子をただガラス皿の中のみ入れ發芽状態を觀察して居た人があれば、春に會ふ土壤より萌え出る種子の變化は悉く奇蹟と見えるであらう。けれども皿の中の觀察が變則であつて、土壤より力を吸

收して伸び行く活力が常態である。その如く、信仰なくして皿中の種子の如く單獨の自己の力のみ生きんとする人々の生命發現は變態である。むしろ神の能力の土壤と聖靈の春光の中に伸び行く信仰體驗の人々の方が天地の前には常態だ。生命は實に驚くべき創造力の扉を開いて伸びて行く。

物が靈を創造するにあらずして、靈が物を創造するのである。これが宗教的眞理の明白なる原則である。かくして靈的能力が主體となつて肉體を支配するに至ると肉と靈の關係が分子と分母とが逆轉する故に、その結果も一轉して、靈の創造能力に比例して肉體が動いてくるに至る。

(二) 靈の能力

若しも靈が何物かに思ひ煩ひ、懊々として苦惱する場合は、身體の五臟六腑が弛緩して外敵に負け易くなり遂に病氣となる場合が多い。昔より病患の事を病身と言はずして、病氣と云ひて、氣を病むと書く處に一應の道理があると思はれる。氣を腐らせて失望落膽せんか、忽ち氣を病む結果が直に肉體に及ぶ事は周知の事實である。

人が生くるには肉體の糧としてパンは必要である。けれども人が眞實に生くる所には神の能力により信仰によるのであつて、パンのみではない。動物はパンのみにて生きうるであらう。けれども人の生くるはパンのみにあらずして、眞實の生命の糧は愛と希望と信頼である事を知らねばならぬ。

愛は生命を創造し、愛は暗黒を光明に、死を生に、苦難を恩寵に變へしむる驚くべき力である。人間生活に於ける諸現象を考察する場合に、動物試験にビタミンの存在を除外し能はぬにまさりて、愛の能働を除外し得ない。信仰より出づる愛、これが働く時、高壓の電力に高熱の伴ふが如く、炭の如き劣等者が金剛石の如き優勝者に輝き出づる場合が決して少なくない。

人類への教養は神より出づる愛に勝りて大なるはない。

夥多の精神的虚弱者にして醫師も家族も持て餘し、遂に絶望の中に葬り去られんとせし病者が、信仰の焔にて癒された實例が著者の體驗中幾多もある。中には殺人犯もあれば常習犯とまで見られし盜癖のものもあつた。彼等にとつては惡は惡なりと充分認めて居ても、之に打ち勝つ力が餘りに弱い。當人も苦るしみつゝ、惡に負

けてゐたのである。醫者は彼を診断して病名はつけ得るが癒やす何等の力をも持たない。世の智者學者は境遇を惡より善に變化せよと云ふ。さにと單に外的條件を變へただけではかゝる弱者の内部が燃え出すには餘りに外的力は弱い。丁度彼等の爲す處は粘土より穢れを去らんとして水で洗ふが如きであらう。如何に智識の水を注ぐとも粘土は益々濁水を生ずる丈である。道學者はある一定の制度習慣の型に入れて仕込まんとする。なるほどある程度迄は外形は整ふ事もある。けれども天日で乾燥されたまゝの粘土細工は水を注げば再び溶け出して濁水を出だす。彼等の爲す處は穢れを止むべき粘土の本質に觸れ得ないからである。然るに見るべし、一度粘土が轆轤にて成型されたる後千數百度の白熱爐に投せられ彼自體もその溫度迄上昇せば汚れし粘土は忽ち變じて清淨なる白美の陶器に變つてくるではないか。一度神の聖靈の火にあづかる時は人々の靈は見る見る一大變化を來たす。他の何物に於ても不可能なりし現象が眞實神の靈能に觸るゝ場合に起り來る。こゝは世の宗教家が等しく自ら體驗する處であり、著者多年の實驗である。昔電氣が発見されざる以前には、科學實驗は主として火力と機械力と藥品等を以

て行つた。然るに一度電氣が発見さるゝや、他の機械力にては到底夢想だに及ばざりし現象が極めて容易に體驗なしうるに至つた。電燈、電話、電信、ラヂオ、電熱、電氣、化學等の一切がそれである。いつでも科學は一つの未知の原動力が発見さるゝ度毎に一飛躍的に進展を遂げる。今までの科學の發見に於いては主として機械文明の方に應用さるゝものが多かつた。人體に用ひられるものは比較的少數であり、僅かに醫藥、外科用器械、最近に至つて物理療法にレントゲン光線乃至はラヂウム放射能を利用するに至つた。けれども之等は靈的一單位なる人間にとりては僅かに一つの間接的療法たるにすぎぬ。毒は毒を以て消すべく、武力には武力を以て抗すべし。靈的人類には靈能を一大原動力たる靈能を注がざれば眞實の癒やしと變化は徹底して來ない。醫療も法律も制度も教育も一切が匙を投げたる敗慘者も神の一大靈能に觸れる時、そこに一飛躍的變化が起つて來る。私は豫想してゐる。現代醫學なるものが藥物療法より物理療法に進展し來りしが如く、近き將來には、必ずや靈的療法の時代を出現するに違ひないと。今迄宗教家と宗教的眞理探求者の行ひし靈的治療を近代科學者が學的に實現する時期のあるべきを豫想する。

私は聖書にあるキリストの病人を醫せる奇蹟的事實を科學的見地より見て之を疑つてゐた一人であるが、私自身が過去二十數年間自ら體驗し、亦多くの人々が實驗せし事實を總合する時に、聖書に於けるキリストの行ひし靈的癒しの事實は、そのまゝ信受すべきありのまゝの實驗なりしを信せしめらるゝに至つた。「盲目は見聾者は聞き、足跛は歩み、癩者は潔められ、死人は甦る。汝の見しまゝを往いて告げよ」とイエスはバプテスマのヨハネに宣言し給ふた。こは靈界の眞理に目蔽ひされた現代人にとつては奇蹟的事實であるが、電氣の原理が明らかとなればラヂオの事實が眞なりとして信受し得る如く、靈眼開かるゝ時、この靈的事實の可能性を心から受け入るゝに至る。今もこれに近き實驗が篤信なる人々の間に屢々くり返され證詞されてゐる。ハロルドベクビー氏の著書「再生の人」(Broken Earthenware)などはそれらの記録の一つであらう。

(三) 悪人が善人への維新

遺傳學者は先天的素因に重きをおき、人間生涯の善惡優劣は、一つに先天性に依る

となす。是は確かに重大なる一要素である。乍併、後天的影響を輕視する癖に陥つてゐる。

從來の科學的方法に於ては悪人を善人に造り代へる何らの方法も所有しなかつた。醫術は無論この問題に對して何等の權能を有しない。法律も社會制裁も勸善懲惡を主旨とこそすれ、その効蹟は極めて微々たるものであり、消極的立場に於いて効果を見るべきであつた。僅かに教育のみが悪人を善人に導く使命に立つてゐるが、現代の主智的教育に到底悪人を善人に作り變へる期待を持ち得ない。悪人に生れつきたるものは現在にありては不治の難病にかゝりたる患者の如くに扱はれる。然しながら此處に二千年來悪人を善人に造り代へる方法が明白に教へられ實行されて來た。信仰生活がそれである。「健かなるものは醫者を要せず。ただ病あるもの之を要す。我は惱める者を救はん爲に來れり、疲れたる者重荷を負へる者我に來つて憩へ」と。聖者の生涯は靈界の眞理を傳へしのみならず、日々夜々己を忘れて病める者不具者罪あるものゝ爲めに救を成願し來つた。いかなる病ある者悪人と雖も神の靈能と愛とに觸るゝ時、電流の通せし電球の如く何れも暗黒より光明に移さ

れ、停電せし電車が軌道を走り出すやうに悪人は善道へと歩み出した。悪取税吏マタイは造り代へられ、罪の爲めに悪用されし彼の悪筆は、山上垂訓を書き誌るす靈筆となり、姦淫の時捕へられし婦は無二の貞節の婦人に造り代へられ、罪人の首なりしパウロには大使徒聖パウロに造り代へられた。これらの二千年昔にありし事實は今なほ均しく歴然として吾等の眼前に繰り返されてゐる。驚くべきは信仰によりて悪人が善人に造り代へられつゝある事實である。破壊されたる陶器は、再び信仰の轆轤の臺上に回轉しつゝ、美しき焼物に再生されつゝある。

この再生の場合に、素地の善良なるものほどよい事は勿論である。故に、優生學者の努力により優良素地を社會に送り出して欲しいが、焼物として再生されたる後の容器としては最初の粘土の時の如く優劣の度合が著しくない。最初の工程に於ては到底存在の値なく、何れにか處置すべき必要のありし者も靈的に維新され、再生したる後には反つて他のものゝ所有せざる特質を有して使用に便なる場合もある。社會は一ケの有機體である。大脳や手足も必要だが、また臟腑も入用であり、足の皮膚も膀胱の膜も必要である。凡てのもの神の前に不用なるはない。之を聖化して

活用するか否かにある。

優生者の多きを望むは勿論なれども、又弱人も聖化されるれば優者と同價値に用ひらるゝ使命あるを信ずる。

遺傳的先天性を一疋の肥馬に、後天性を手綱に、靈性を馬上の人に譬へらるゝであらう。人生の旅路を歩む者は手綱でも人でもなく肥馬である。一切が先天性の肥馬に引きづられて歩む如く見ゆる。馬上の人が居睡してゐる間は如何に教育や待遇改善の手綱を美しく改造しても、手綱自身に馬を制御すべき何の權能もない。肥馬の欲する處へ足は運ばれる。先天性の趣く處にその人の生涯は進み行く。故に荒馬を良馬に造り代へんとする努力は誠に道理に叶へる運動である。馬は良馬に若くはない。馬上の人が居睡してゐる條件の下に於いては凡ての行動が肥馬に支配される。乍併、一度馬上の人が活躍し、手綱を引き締め、自由自在に肥馬を制御しうるに至つては、歩むのは馬であるが、馬自身が歩むのでない、馬上の人の思ふがまゝに馬は馳せて行く。即ち馬上の人と馬との兩者の意志の統制の相對的關係に於いて結果に非常なる相異を來たす。馬上の人醒むると雖も馬術拙劣にして奔馬を統制

し得ず反つて落馬して手綱にしがみつゝ引きづられ行く事もある。甚だしき發作症に於いてこの事實を目撃する。乍併、馬上の人の統制力が奔馬に打ち勝つ時馬は主人の命のまゝに従ひ、荒馬も小羊の如くに正道を歩む。

人間以外の生物に於ては、馬上の人は昏睡状態にある。人間と雖も靈的には半睡半覺の人々が過半を占める。馬上の靈が完全に活躍するに至るには、宗教的眞理に歸り信仰生活に入るを要する。神の靈能をして馬上の人たらしめる時、如何なる驚馬も名馬の如き能力を發揮し來る事が多い。

生物學者は昏睡状態の馬上の人の場合を取扱ひ、教育、法律及び道德に於ては半睡半覺の馬上人の場合を扱ふ。而して聖靈の内住に生き神と偕に歩む信仰に立つ宗教生活は馬術の達人が鞭を高く擧げて馳せ行く場合に當る。斯くの如く靈性の發達は結果に著しき變化を來たす。而して、この現象は人類の特有なるが故に、生物學的原理に更にこの人類特有の要素を考慮に加へて優生學の研究とその發展を期すべきが當然であると思ふ。

靈性が遺傳力の下敷となる時、從來の優生學の所説の如くなるべきも、靈性の活動

が遺傳力を支配するに至らば、茲に從來の法則を打ち破つて、宗教の所謂靈的維新が成就される。かくして新生再生の人として、新らたなる生活が始まるのである。「人若し新生せざれば神の國を見る能はず」とか或は「人は水と靈とによりて生れずは、神の國に入る能はず」とか、或は「我らの行ひし義の業にはよらで、唯その憐憫により、更生の靈を我らの救主イエスキリストをもて豊かに注ぎ給ふ。聖靈による維新にて我らを救ひ給へり」と聖書にあるのは、これらの消息を傳へるものである。

優生學が、惡人の數を減せんとする處に、特質に有するに對し、宗教は、惡人を善人に造り代ふる處に、特質がある。私は優生學と宗教の重要な關係が此處にあると思ふ。

第八章 信仰と生殖質の變化

(一) 靈と肉との關係

現代遺傳學は生殖質の永生を教へ、宗教は靈魂の永生を教へる。古來、人は不死の生命を熱求しつゝ、も生者必滅の思想に災され最後の呼吸まで生きん事を念願しつゝ、も死の暗黒裡に悲惨なる最後を遂げた。然るに信仰は人間の不死を教へる。靈體として復活の眞理を示し、永遠に生きうる神の國の存在を説き來つた。然るに近代自然科學が唯物的見地より生者必滅の原理を主張せし爲め、人は不死の光を待望しつゝ、もなほ光を仰ぎ得ずして暗より暗に葬り去られたのであつた。然るに近來ワイズマン乃至ボベリの研究ありて生殖質の不死永生の眞理の闡明せられしは、人文歷史上特筆すべき偉大なる貢獻と云はねばならぬ。宗教は更に進んで肉體に宿る靈魂が人格と個性を有したるまゝ、不死永生であることを教へる。死とは生の状態を變化する一變轉にすぎない。死は斷じて一切の最後でない。蛹から蛾に移る

一變化に於ける特種現象を意味する。

生物學者にとつては、人間をかく見る。「人間とは貴重なる生命を永遠の過去より永遠の將來へ向つてある時期を限りて一時的の保管者である」と。自然現象的には人間は「生命の洋燈」を五十年間火を消さないで、次の時代へと手渡して行くものだと見るのも一應尤もな考へ方である。肉體と云ふ生理的存在にのみ觀察の焦點を合はしてゐる人々にはかく見えるのが當然である。乍併レンズを調節して内部の靈性に焦點を合はせて觀察すると、人とは實に不可見の靈的一存在であり、肉體は單にその上衣である事が判る。また種子に於ける胚種は靈であり、胚乳が肉體にあたる事を知る。

或る人々は「靈肉一如」である。「靈が即ち肉體であり、肉體が即ち靈である」と云ふ。故に肉の死は即ち靈の死であり、また靈の死は肉の死を將來すると思ふ。こは人間の眞實相の一斷面であるに過ぎない。例へば植物が種子の状態にある時は、幹も枝も葉も花も一切が種子の中に包含されてゐる故に何れも混然として一つであり、誰も種子の中からは是等の各要素を分離し難い。種子の腐敗は一切の腐敗を意味す

る。けれども、一旦樹木が成長するに至らば、幹枝葉花實は夫々別々に存在の特質を有する。この時に胚乳の腐敗没落は幹と枝の腐敗没落を意味しない。また葉花果の結ぶ時、葉と花は地上に落ちて腐敗するも、果實の落下は腐敗でなくて、反つて生命的發展である。一粒萬倍への甦生であり、永遠生命への飛躍である。斯くの如く、初期に於いては、一如に見ゆるものも、生命的進展の末期に於ては、決して一如でない。夫々各自の特殊的性能を分擔する。肉體が墓場に腐敗する事は、決して成長したる靈の腐敗滅亡を意味しない。前者が朽つる時に、後者は新らたなる大生命の中に新生活躍するのである。

人間の靈魂が未だ覺めずして昏睡状態にある時は、靈肉一如の如くに觀測し得るも、いよいよ靈性が醒めて非常なる活動状態にまで成長發達し來らば、明白に靈魂の獨立存在性を認めうる。肉體は全く一住宅であり、「靈」はその主人公たるを明瞭に認識する。住宅が破壊さるゝ時、その主人公は新らたなる住家に移つてゐる。而して住家は主人公を支配し得ないが、主人公の意志命令は、住宅の一切を支配し、變更し、自由に一切の變化を可能ならしめる。

人類改造の根本道は、身體質の改良にあらずして、生殖質の改良にあると遺傳學者は主張する。之は科學が示す嚴正なる事實である故に、誰人も之を否定しないであらう。然しながら如何にせば生殖質を改良しうるか。此處に甚大なる問題が横はる。

正統なる遺傳論者は、生殖質の改造は、たゞ優良なる生殖質の保有者同志の結婚によつてのみ成就さるゝと主張する。こゝに優生學の根本的基礎石がある。之に對しても反對論者はあるまい。然し問題にされうるのは、その後天的影響の如何である。

一旦獲得したる優生的生殖質は、絶體に優生を保有し得るか、或は何等かの後天的關係に於いて變質を來す場合はなきか。同様に劣生者の生殖質も、之を優生に改造する後天的方法はなきか。問題はこゝにある。

なるほど人間以外の生物に於ては、現在の遺傳論者の體驗と理論が正しいであらう。然しながら人間に於ては、それ以外の因子が著大なる影響を與へる場合の實在性を考慮に加へねばならぬ。問題はこゝにある。

後天性が先天性に對して何等遺傳能力なき事を立證する例として多くの場合は外形的刺激の例が引用される。例へば、耳輪、鼻輪、纏足、割禮等に於ては如何に後天的に肉體に變化を與へても遺傳せぬ事は事實であらう。けれども、それ丈で全部の後天性が遺傳せぬとは結論づけられない。現に實驗の示す結果は内部的に服用する酒精、鉛毒、モルヒネ、その他が明らかに生殖質に影響を與へる事が立證されてゐるからには、後天性が遺傳せぬとの原則は成立しない。後天性にして生殖質を犯さぬものもあり、また犯すものもある。然らば如何なる場合が影響なく、如何なる時が影響あるかに就て、更に徹底的に研究を要すると思ふ。特に人間に於いては他の動物と異なり靈的一實在である。「靈が肉體の主位に立つ者なれば、その一進一退が生殖質に如何なる影響を與ふるかは最大重要點であり、問題の中心點が此處にあると信ずる。何となれば人間の優劣の價値は靈的狀態によつて定まるからである。

(二) 信仰の著大なる影響

信仰が人間生活に對して著大なる影響を與ふる事は既述した。而して信仰が生

殖質にも少なからざる影響を與ふる事はけだし想像に難くないが、之を科學的に立證しなければ、その關係を斷定し難い。生殖質の變化については、實驗上至難の一つなる故に、直接的に之を立證する業は、今後の篤學の士の研究を期待する。然しながら間接的實驗により、略々この關係は推定するに難くない。「善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果を結ぶ。凡そその結ぶ實によりて樹の善惡を知るべし」である。信仰なき時の子供と、入信以後の子供の性質、殊に靈性方面に於ける性能を比較するに、著しき相違が兩者の間に確實に存する事は、信仰者の家庭に於て多數に實驗する處である。著者の體驗に於いても、子供の性格、殊に靈能發達の狀態はその當時の兩親の靈的水準線の高さに比例する事を認める。肉體の健康に於ても靈性と共に良結果を見るのが常であるが、然し生物學的條件に於いては遺傳の法則が著しく現はれ、信仰に入つたからとて、後の子供が鼻が高くなつたり、容色が特別に美しくなつた例は少ないが、その中に盛られたる靈性と精神狀態には著しい相違のある事は見遁してならぬ現象である。

この事實は遺傳學上より見れば、生殖質の實質には變化を來したのではなく、單に

受胎當時より胎内生活に於ける優秀の結果發達せずして潜在すべき筈の要素が信仰による特殊條件により刺激されて發達し來たのかも知れない。その何れにもせよ、信仰による心の最深部の活動が著大なる影響を小兒に與へる事は否定し得ない事實であると思ふ。これらの事實に對する學の見地は、生殖質自體の變化と見るか、或は胎内教育の環境に依ると見るか、この二つの子供達の變化の狀態を考察する時に、單に胎内に於ける優境のみの變化としては餘りに著大なる靈的性能の變化を實驗する故に恐らくは、受胎以前既に生殖質に變化を及ぼしてゐたものと推定したくなる。是は兩親の精神作用が出生兒に如何なる影響を與ふるかを仔細に研究して推定を下すべき性質のものであるが、此處には信仰が甚大なる反應を呈する事を指示したいのである。

生殖質體質の變化は、それ自體が學術的研究の對稱として極めて至難なる問題なれば、今後専門家の研究に待つべきだが、酒精、ニコチン、モルヒネ、鉛毒等が生殖質に對してマイナスの結果を與へ、また飢餓などにて滋養物不足が直接に生殖質に影響して虚弱の子供を生む事實が肯定されるとするならば、藥物よりも滋養物よりも更に

更に實質的にして密接的なる關係を持つ内部生命の根本たる靈性上の變化が靈と生命との貯藏庫たる生殖質に影響なしと誰が言ひ得よう。

生殖質は外形的變化より來る刺激に對しては強殻をもて守られてゐるであらう。手足耳その他筋肉上の變化は内部生命には何等の交渉を有しない。故に靈と生命との貯藏庫たる生殖質には、種子の外皮の外傷位にしか關係を有しないのであらう。然し、生命は生命を支配し、靈は靈を支配する。靈と生命との倉庫なる生殖質は、その生殖質を包む人間全體の靈的ポテンシャルと生命活動に比例して支配を受くべきが至當であると私は考へる。藥物が影響を與へる事は丁度枝に結ぶ果實に對して温度と湿度と光線が結實の度合に影響するに相當する。外部の氣候が影響するならば、況んや内部生命の相通する根元よりの養分に對する吸収性能が更に著大なる關係を果實に對して有すべきは見やすき道理である。如何に外部の氣候がよくとも根元が切斷さるゝならば、果實は枯れて了ふ。氣候よりも根元の影響が大である如く、藥物の影響よりも精神と靈の狀態がより大なる變化を生殖質に與へる事を思はしめられる。藥物さへ影響を與へ得るに、精神的作用にして影響なしと云ふ人あ

らば彼は根を切るとも氣候さへよければ果實は結ぶものなりと云ふ人である。顔は心の鏡である。恥づかしいと心が思へば血液は直ちに満面朱を流さしめる。恐怖の時には忽ち顔面蒼白に一變する。心の上一下は満面の微細なる運動を支配する。生殖機關は顔面よりも更に精神状態に密接なる交渉を有してゐることは萬人の承認する處であらう。精神作用が打てば直ちに響くものは生殖機能である。その本質の生殖質が生命の根元なる靈性の變化に緊密なる交渉を有する事は、直接的なる科學的立證なくとも否定し能はぬ處であると信ずる。

(三) 因縁と解脱

なほ宗教と遺傳關係について一言述べておこう。

佛教は因縁因果を説き緣起論の立場から業の遺傳を説く、人生の一切は永劫の過去から傳はり來る「業」によつて支配される。現世が善かれ惡かれ、是れみな過去の罪業の致す處だと教へる。生物學者が肉體的に遺傳を高調する如く、釋迦は因縁が心靈的に相傳する事を認めた。前者が形以下の事物を對象とする代りに、後者が形

以上の心靈界を對象にした差こそあれ、その觀方は一つの線上を歩んでおる。而して釋尊の最も關心し且つ最大の努力を拂ひし處はこの因縁業よりの自由解放であつた。生物學者は遺傳が永劫の未來迄存続して全人類はこの鐵鎖に繋がれたまゝ、人生の重荷を運ぶと説くに反し、釋迦は如何なる惡業惡因の者も解脱涅槃によつて一切の自由解放さるゝとの大道を明白に爲した。茲に宗教の光があり、萬民への福音がある。若し人生が過去世の惡業により鐵鎖に繋がれたまゝ、煮えたぎる坩堝の中に人生苦を受ける運命に繋がれてゐるものなら、誰人も自らの誕生の日を呪はずにはおられない。この地上生活こそ地獄であり、苦界である。何の生存の希望があらうか。乍併、幸なる哉、此處に一切の惡緣惡業より自由解放せられる道が與へられてゐるから、吾等は暗黒の中に光明を發見しうるのである。信仰の有難さが茲にある。

基督教に於ても、聖書は人類の原罪を教へる。元々神は創造の最初に於て人類に最大の恩寵と聖旨を示し、人類は不死のまゝ、神の國に移されるやうに造れてゐた。然るに人類の鼻祖が神の意に反逆して罪を犯し、神は之を罰し、罪の價として死を

與へた。かくして此の原罪が遺傳して、人は不死を望みつゝ、之を獲る能はず、死と苦とに繋られるものとなつた。世々歴代、我らが不死の理想境を求めながら、之を得ず、また善を欲する心を有しながら、惡の規範に束縛されてゐるのは、この原罪の遺傳によると説く。

現代人の靈性に不具者の甚だ多いのは、その結果である。かく罪と滅亡に定められたる全人類を、神はその獨子キリスト・イエスの十字架の贖罪により、原罪の遺傳を斷ち、新生して再び不死永生の恩恵に入る道を開き給ふた。基督教に云ふ「救」とはこの恩恵にあづかる事を云ふのである。

何れも生命の宗教は、みな過去世代々の惡業の遺傳を認めつゝも、人間の靈性に於ては、忽ち美事なる突然變異を以て一切の過去の遺傳と因縁より絶ち切れ、自由解放の歡喜に入る嘉信を傳ふる。茲に全人類に臨む神の愛の大道がある。地上の物と肉とを取扱ふ科學も百尺竿頭一步を進めて、この福音の實體を把握し萬民に係はる救の大業を成就する日の速に來らん事を切望する。

イエスは宣言した、「我れ天國の鍵を汝に與へん。地に於いて解く處は天に於て

も解き、地に於て繋ぐ處は天に於ても繋ぐなり」と。

地に於て繋ぐ遺傳の法則は天の靈界に於ても惡業となり原罪となつて繋がれてゐる。また地に於いて生殖界の生命界に繋がれる生命の永遠性は亦天に於いても靈の久遠實成の永遠生命として實現されてゐる。

然らば、天に於いて解く處の自由解放の大道が、亦地に於いても成立してゐる筈でないか。現代の遺傳學はこの眞理を隠されたまゝ、未發見に残してある事を思はせられる。生物學的に遺傳の事實は眞理であらう。然しながらこの鐵鎖より自由解放する地上の一大眞理こそ三千年來宗教の奥に貫流せし「救」の奥義である。「義人は信仰によりて生くべく、人は聖靈と共に歩むべきである。」この觀點に立つ時、地上に蔽ひし遺傳の暗雲は忽ち足下に流れ去り、重き鐵鎖より自由解放せられるであらう。宗教は萬民に係はる福音である。優生者にもまた劣生者にも一様に區別なく、神の子として最大の救の恩恵に預りうる眞理を傳へる寶庫である。

一人の靈魂の失はるゝは、全世界の富の失はるゝにも優る。優生論者は一個の運命論者であるが、信仰による眞理は萬民をこの運命より自由に解放して、幾千萬年の

鐵鎖を断ち切り、神の國に籍を移さしめる。かくして一人の洩れなく永遠の生命にあづからしめるものこそ眞の宗教である。

第九章 胎教と信仰

(一) 種 蒔 の 譬

優生運動に於ては、先天性の優質を選ぶと共に優境による改善を主張する。優境中、最も重要なものは胎教であると私は信ずる。誕生後の教育或は家庭の環境も大切であるが、あらゆる教育中人間の組立工事の基本が定まらざる時の胎内教育にまさりて緊要なるはない。「三つ兒の魂百までも」と云ふが、三つ兒の魂にとつては胎教が多大の影響を興へるものと考へる。胎内十ヶ月は生後五十年の教養にも劣らぬ大切な基礎工事の時代である。

先天性遺傳に重きをおく人々は、生殖質さへ優良であるならば、受胎後の條件は如何にあらうとも優良兒が出生する如くに説く者もあるやうであるが、こは余りに一方に偏しすぎた見方であると思ふ。先天的優質を選ぶ事の必要は言ふ迄もない。けれども胎教が不適當ならば良種が荒地に落されたるが如きである。

聖書には、この間の消息を傳へて餘す處がない。イエスの種蒔の譬がそれである。「イエス海邊にて教へ始め給ふ。夥多しき群衆、みもとに集りたれば、舟に乗り海に泛びて座したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。譬にて數多の事ををしへ、教の中に言ひたまふ。「聽け、種播くもの、播かんとて出づ。播くとき、路の傍らに落ちし種あり。鳥來りて啄む。土うすき礫地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど日出でて焼け、根なき故に枯る。茨の中に落ちし種あり。茨そだち塞ぎたれば實を結ばず、良き地に落ちし種あり、生え出で、茂り、實を結ぶこと三十倍、六十倍、百倍せり。きく耳ある者は聽くべし。」(マルコ傳四章一―九節)

種は優良なる生殖質であるが、落ちし環境が路傍の石地の如き營養不良の胎内にては善き子供は發育せぬ。また嫉妬、猜疑、憤怒、姦淫、好色の母胎は礫地と茨の中に落ちし種であり、良質が伸びる餘地がない。優良質は根なき故に枯れ、或はまた茨に塞がれて曲りくねり、伸びくしたる直材は得られぬ。肥えたる良き地に育ちたる種のみ三十倍六十倍、百倍しうるであらう。

このイエスの種播きの物語は靈界の眞理を啓示したのであるが、天に於て縛ぐ處

のものは、そのまゝ、地に於ても縛がる。神の生命を盛られたる人の子の發育に於ても同様である。神の宮たるべき人の子の肉體が創造さるゝ時に、猥りなる心にて胎教時期を過してよい筈がない。善き地は善き樹を育て、惡しき地は惡しき樹を生せしめる。ただ優良生殖質のみを重んじて、胎教を怠るものは礫地と路傍から良き果樹を得んとするものである。重んずべきは胎教である。

(二) 胎教と靈性

生殖質と胎教の關係は恰も一つの植木鉢に盛られたる種々雜多の穀物から夫々の苗を傳育するが如きであらう。生殖質の中には永却の過去世より流れ來り、し善惡正邪その他あらゆる幾千幾萬の素質が盛られてゐる。比較的勢力を有するは兩親祖父母の素質ならんも、内部には生物出現當時の始祖よりの素質が盛られて居り、何れもその機會あらば發芽せんと機會をねらつてゐるに違ひない。この時には是等の素質を保有する種子を取り巻く環境の善惡が、内部の生命の伸展に多大の變化と選擇とを與へる事は見易き道理である。冬の大地が數々の生命を内部に孕みつゝ、

春を待つ時にも、ある氣候にては梅のみが開花して櫻桃たんぼ、すみれは未だ開かない。櫻桃の開花の時にも、なほ菖蒲、その他は睡つてゐる。若しも周囲の環境が一年中梅に適する温度にて保たれたならば、梅のみ伸びて、櫻桃、その他は伸びずに終りうるわけである。また急に暖くならば、梅は忽ち満開となるも、梅は遂にその特有性の發揮に缺くる處を生ずるであらう。天然の氣候は梅、櫻桃の順序にて常に一定して二月三月四月五月の陽春を迎へるも、胎内十ヶ月にありては、母の氣分が氣候の如く一定せず、猫の目よりも變化し易い。妊娠十ヶ月の婦人の氣分ほど變化の多い、亂調子は稀である。而して母の氣分が如何に深刻に胎兒に影響を與へるか、母たりし婦人の一様に深く體驗する處であらう。私の家庭では九人の子供を與へられたが、以上の事實が眞理なるを裏書きするものである。

母の肉體の健康状態よりも、血液よりも更に深甚なる密接交渉を持つものは、母と胎兒の靈的關係である事を著者の數多くの體驗は物語る。

醫學者は胎兒と母體とは全く絶縁されてゐる故に肉體的には何等の交渉を持たぬと説明する。生理的には肉に於ても血に於ても何等の直接交渉はないであらう。

然しながら體温と水分と養分は自由自在に交通して胎兒の肉體を育くんで行く。靈と生命は肉體の養分よりも更に深甚靈妙なる密接不離の關係におかれてゐる。肉體的交渉が普通の光であるならば、靈的交渉は光線に相當する。普通の光は物體にて遮斷される如く、母の血液も肉も胎兒とは隔膜にて遮斷されてゐるであらう。然しX光線は自由自在に膜壁を通して働きかけるにも似て、靈は胎兒に自由自在に働きかけ、母の靈的ポテンシャルの増減はそのまゝ、胎兒の靈的生命的増減を支配するであらう。胎兒にとつては、生理的に養分を必要とすると同様に、靈的發育の準備の爲めに靈的養分の必要なるは言ふまでもあるまい。或る人は云ふであらう。肉體の養分さへ供給すれば、靈性はそれによつて傳育されると。或る程度の交渉を有するは勿論であるが、靈的現象より考察する時に、靈はしかく鈍感のものでない。人間が他の動物の如く單なる一生物であるならば、兎も角人間の本質が靈的實在なるが故に、靈性に對する胎内教養は最大の因數の一つとなるであらう。

靈と靈との關係は、出産後の幼兒に於ても、また成人後に於ても、母と子とは太陽と地球の關係の如く不可見の引力にて相曳き、兩者不離の立場におかれてゐる。特に

未だ物心つかざる幼児の時代は、言語は通せず、幼児自身が獨立的に意識し、判斷し得ざる故に、成長時代にまさりて、幼児の靈は母と繋がれてゐる。言語によつてにあらず、幹と枝の如く直接的な密接不離の交渉を有つ。幼児の時ほど直感能力の鋭いものはない。母子の肉體が二つに分離したる時に於てさへ、斯くる如く靈性は密接不離であるから胎内にありてはなほ更により深き關係に於いて、母の靈的高低、美醜、善惡がそのまゝ、胎兒の心の中に影響する事は見安き道理である。顔は心の鏡である如く、胎兒の靈は母の靈の鏡であらう。私は肉體の生理關係よりも更に、靈的關係に於て慎重なる注意を胎教に對して拂ふべきを主張するものである。肉體は數十年の假寓であり、靈は永遠に至る本質であるからである。

(三) 靈と生命

靈と生命について一言述べておきたい。

生命とは生物學上にて取扱ふ生命現象であり、靈とは宗教或は哲學が取扱ふ特殊なる實在である。故に世には生理學的生命を有するものは多いが、靈を有するもの

は人間の外にない。人間の中にも生物學的生命の非常に旺盛なる者は多いが、靈が活きて自由自在に活躍してゐるものは決して多くない。現代に於ける多くの青年は生物學的には牛飲馬食し猛獸をも打ち挫く瀟灑たる生命の若人は少くないが、彼等の靈は昏睡状態にあるか或は幼兒位にしか發達してゐないものが頗る多い。

生物學的生命は動植物と人間は大差ない。むしろ人間が退化してゐるとも見られる。壽命に於いて、形の大きさに於いて必ずしも人間は第一位を占めてゐない。人間が他の生物の一切と異なる特異點の唯一は靈的實在である。

生物學的生命には必ず最後がある。肉體の死がそれである。けれども靈には死がない。成長したる靈は、熟したる果實が枝より落ちて、獨立的に生命を保存する如くに靈は肉體から分離しても獨立的に靈界は生きて行く。而して半熟の果實が枝からもぎ取られる時、地上に落ちて腐敗し、その生命を失ふ如く、靈が充分に發育せずして肉體の死に際會せば、靈は不死なるが故に、死滅以上の苦ししい世界に移される。渴して水を飲みたいと欲しても水の無い處、人に會ひ度いと望んでも、その人に會へない處、身が焦げるほどの熱地にて涼風を求むるとも、どうしても涼しい處のな

い場所、かゝる所が腐敗墮落せる靈魂が移される所だ。死して無意識になり、過去の罪も苦惱も一切忘れて了ふのが死であるならば、死ほど良い避難所はない。乍併、それは大いなる認識不足である。生物學的生命はかくの如き無意識界に葬り去られるであらうが、靈性を具有する人間の靈にとつては、かゝる安易な避難所はないのである。人間の靈は天國に迎へられるか、永却のゲヘナに投げ入れられるか、何れか二つの内一つである。宗教的眞理はこの世界にいつでも觀察の焦點を合はせてゐる。科學者がいつでも素人の氣づかない不可見の原理法則の世界に焦點を合せて萬物を觀察してゐるのと同様である。林檎が落ちる時に、ただ外形の落下状態の林檎に氣を取られてゐる人は決して科學者でない。科學者は林檎を見ながら、その奥に嚴然として實在する引力の世界を凝視する者である。信仰ある者の觀方は之と同様である。いつでも生命界の奥に不可見の靈界の實在を凝視し、靈界の光に照り返して、人生と宇宙の一切を觀察するのが眞の信仰者である。眞の宗教はこの實在の靈界に迄私たちを引き上げてくれる。地上に活きながら神の國に籍を移し更に神の國より地上へ出張したるものとしての生活を營むのが即ち信仰生活である。

斯く宗教的に觀じ來らば、肉體の構成は單に住宅の建築であり、靈の發育はその主人公なる王子の成長發達である。この兩者の關係に對する觀方が、單に生物學的に見れば、肉體さへ健全に保育すれば、内なる靈はおのづから健全に完成さるゝと觀るのであるが、それは認識が不充分である。建築が完成されるれば、風雨の嵐からは王子は守られるであらう。けれども王子の賢愚と健全と放縱と律義は、建築に何等關係なく、全く別の用意を要するのである。即ち生物學的發展はある程度に於ける關係を有するが、靈は更により高き次元の靈的養分を必要とする。胎教に於ては肉體的に生命の糧を必要とするが、同時に胎兒の靈に靈的活水と靈的光とを供する事が最大の肝要事である。靈的に優れたる人物を養成する根本道場はこの胎内にある。家庭教育にあらず、小學校にあらず、大學にあらず、先づ胎内教育にある。梅檀は双葉より香しと。双葉の時代に曲れる樹は眞直なり能はぬ。

生物學的生命の發育は恰も穀物に於ける外形の整備に相當するであらう。外皮と内部構造の様式が如何に缺けなく整備さるるも、その内部に於ける胚種が不備であるならば、地に落つるとも、完全なる五穀の實のらざると同様に、靈性の實のりの不

充分なる兒童より完全なる人格と靈性を期待する事は困難である。この場合に多くの人々は穀物の外形と澱粉とが發育すれば、胚種もそれに比例して充實する例に鑑みて、人間に於ても同様の考察を下し易い。之は靈界の眞理に就いて無智なるが爲めであると云はねばならぬ。

妊娠中、母體と胎兒とは恰も感應コイルの如き關係にあるものと思はれる。肉體的には何等の連接はない。けれども外部のコイルにあたる母の靈的ポテンシャルはそのまゝ、内部のコイルに當る胎兒の靈種に相働きて作用をなし母の靈力の高低はそのまゝ、互に或る比例をなして胎兒に働きかける。この時に母の靈は光の如く働くであらう。若しも母の靈光が冬枯の時の如く力なきものならば、厚き霜の下に埋もれし種子がそのまゝ、發芽せずして冬期を過ごすに似て、胎兒の靈は冬籠りしたまゝ、出産するであらう。この兒童は靈的に第一步に於いて肉の下敷となつて生れる。然るに、胎内にありて信仰厚き母より常住座臥、祈りを以て聖靈を注がれ、神の光に浴するならば、既に胎内にありて春光に照らされし野邊の花の如く、靈性は目覺め、肉體の整備は先きんじて靈は活躍を始め、一切の肉は靈の下敷となる。かゝる兒童こ

そ生涯を神に仕へ、一切の地上生活を神の聖意成就の爲めに献げたる眞の生活を完ふしうる人物となる。人の王座は肉によりて占められず、常に神聖なる靈によりて占められ行くからである。

この靈と肉との相對的位置の關係の決定が人類存在の價值を決定せしむる最大因數である。而してこの相對關係は、先づ胎教に於いてその第一礎石が据ゑられる。この第一步を逆轉せば、墮躰の悔あるも及ぶべからず。

人類として、優秀者とは靈が肉の王座を占める者の謂である。墮落劣等者とは肉が王座を奪ひ靈性が肉の下敷となれる者の謂に他ならぬ。故に一生物として動物と同様なる立場に於いての優生學ならいざ知らず、萬物の靈長であり、靈的一存在としての人間に對する優生運動である以上は、先づ靈と肉の相對關係の決定から始めるが至當である。而してこの關係は先づ胎教より出立せねばならぬと私は確信してゐる。

(四) 胎内教育と聖者

曾て私が宗教教育について歐米旅行中知名の士にその意見を質した時、ある一權威者はこう云つた。「宗教教育は物心ついてからでは既に手後れた。未だ物心のつかない時から始めねばならぬ。少なくとも満四歳迄の間に神を畏れ、人を愛する靈性が植ゑつけられねば失敗だ」と。こは尊き體驗の聲であると共に靈界眞理の標的を射貫いてゐる言だと思はれた。

靈的教育は物心が出來、智慧分別のついでから後は、自分の心の篩を通して受け入れられる故に、その篩目の上に残りしものは、その人の心の中へは注がれない。成長後、半可通の時代には淺薄なる理智と論理の篩をのみ専用する故に、超論理的合理の高次元である宗教的眞理は、彼等の心の篩の上に停留させられ、拒絶せられて、心の糧とはならない。かくして有爲の一生をあたらし惜しくも無爲に過す者が多い。かく理智の發達したる後には、彼等の所有する理智を貫き通して注ぐに餘りある強き靈光を要するが、之に反して、未だ物心つかざる幼兒に於いては極めて容易に母及び親近者の靈的感化はX光線の如くに幼兒の靈光に没入して行く。なほそれにもまして、胎内にて之より形造られんとする時期にありては、幼兒の靈は感化を受け易き状態

にある。恰も冬の大地に孕みし夥多の種子がその發芽に最適の條件を具備さるゝに従つて先づ發芽する如きであらう。先づ第一に靈光をもて臨まば、靈性は伸び來り、肉慾をもて刺戟すれば、幼兒の肉慾の芽は先づ怖ろしく伸びるであらう。この伸び行く肉と靈との相互關係がその胎兒の一生を支配する第一の後天的素因となるを見通すわけに行かない。

胎内生活と雖も既に後天性の第一階梯にあるを以て、遺傳的の惡素因を除去する事は出來ない。遺傳學の原則の示す如く生物學的形質は成就してくるであらう。然し、靈は肉形的形質に比して著大なる自由度を具有するが故に、胎内教育に於いて母の靈的教養と、祈による神の聖靈の感動とは深甚なる作用を惹起する事を過去の宗教的事實が指示する。宗教的見地よりすれば、胎内に神の聖靈が宿りうる事を啓示する。イエスを生みしマリヤがそれであり、またパプテスマのヨハネを孕みしエリサベツがそれである。聖書は言ふ。

「天使處女の許に來りて言ふ、『めでたし、恵まるゝ者よ、主なんちと偕に在せり。』マリヤこの言によりて心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、天

使いふ。「マリヤよ、懼るな。汝は神の御前に恵を得たり。視よ、なんぢ孕みて男子を生まん、その名をイエスと名づくべし。彼は大ならん。至高者の子と稱へられて、また主たる神これにその父ダビデの座位を與へ給へば、ヤコブの家を永遠に治めん、その國は終ることなかるべし」マリヤ言ふ、「われまだ人知らぬに如何して此事のあるべき」天使答へて言ふ。「聖靈なんぢに臨み、至高者の能かなんぢを被はん。此の故に汝が生む處の聖なる者は、神の子と稱へらるべし。視よ、なんぢの親族エリサベツも年老ひたれど、男子を孕めり。石女と云はれたる者なるに、今は孕りてはや六ヶ月になりぬ。それ神の言には能はぬ處なし」マリヤ言ふ。「視よ、われは主の婢女なり、汝の言の如く我に成れかし」つひに天使はなれ去りぬ。

その頃マリヤ立ちて山里に急ぎ行き、ユダの町にいたり、ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せしに、エリサベツその挨拶を聞くや、兒は胎内に躍れり。エリサベツ聖靈にて滿され聲高らかに呼ばはりて云ふ。「女の中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。わが主の母われに来る。われ何によりてか之を得し、視よ、汝の語り給ふことは必らず成就すべければなり、マリヤ言ふ。

「わが心、主を崇め、わが靈は、わが教主なる神を喜び奉る。

その婢女の卑しきをも顧み給へばなり。

視よ、今より後萬世の人、われを幸福とせん。

全能者、われに大なる事を爲し給へばなり。その御名は聖なり。

その憐憫は代々畏み恐るゝ者に臨むなり。

神は御腕にて權力をあらはし、心の念に高ぶる者を散し、

權勢ある者を座位より下し、卑しき者を高ふし、

飢ゑたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給ふ。

また我らの先祖に告げ給ひし如く、アブラハムとその裔とに對する憐憫を永遠に忘れじとて、僕イサラエルを助け給へり」。

斯くてマリヤは三月ばかりエリサベツと共に居りて己が家に歸れり。(ルカ傳一章二八―五六節)と。

この記事を見ても如何に神の聖靈がマリヤとエリサベツに働き、胎兒もまたそれに感動して胎内にて躍つたかがわかる。胎内の兒が母の感激に打たれて躍ること

は現在に於ても屢々目撃し見開する處である。マリヤが如何に聖靈に動かされてゐたかは彼女がエリサベツに答へた氣高い詩でも分る。「わが心は主を崇め、わが靈はわが救主なる神を喜び奉る。」と何と崇高な思ではないか。更に「視よ、今より後萬世の人、われを幸福とせん、全能者、われに大なる事を爲し給へばなり。」とは何と偉大な信仰であり、希望ではないか。かゝる崇高無比なる靈的遠境がイエスの胎教であつた。

バプテスマのヨハネを孕みしエリサベツの胎教に於ても同様に聖靈の著しい感化が見られる。その記事は同じルカ傳に次の如くしてある。

「さてザカリヤその組の順番に當りて、神の前に祭司の務を行ふとき、祭司の慣例に従ひて籤を引き主の聖所に入りて香を焼くこととなりぬ。香を焼くとき、民の群みな外にありて祈りゐたり。時に主の使あらはれて香壇の右に立ちたれば、ザカリヤ之を見て、心騒ぎ懼を生ず。御使いふ、「ザカリヤよ懼るな。汝の願は聽かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づくべし、汝喜悅と歡樂とあらん。又おほくの人もその生るゝを喜ぶべし。この子主の前に大ならん。また葡

萄酒と濃き酒を飲まず、母の胎を出づるや聖靈にて満されて、また多くのイスラエルの子らを主なる彼等の神に歸らしめ、且つマリヤの靈と能力とをもて主の前に往かん。これ父の心をいふに、戻れる者を幾人の聰明に歸らせて整へたる民を主の爲めに備へんとてなり」ザカリヤ御使に云ふ、「何に據りてか此の事あるを知らん。我は老人にて妻もまた老邁みたり。」

御使こたへて云ふ、「われは神の御前に立つガブリエルなり、汝に語りてこの嘉信を告げん爲めに遣さる。視よ、時いたらば必ず成就すべき我が言を信せぬに因り、汝物言へずなりて此らの事の成る日までは語る事能はじ、民はザカリヤを俟ちゐてその聖所の内に久しく留るを怪しむ。遂に出で來りたれど語る事能はねば、彼らその聖所の内にて異象を見たることを悟る。ザカリヤはただ首にて示すのみ、なほ啞なりき。かくて務の月満ちたれば家に歸りぬ。此の後その妻エリサベツ孕りて五月ほど隠れおりて言ふ、「主わが恥を人の中に雪がせんとして、我を顧み給ふときは、斯く爲し給ふなり」と。

之に由りても、聖靈が受胎と胎教に深き關係のある事を知る。而もザカリヤが年

老いたる石女に何故にこの事のありうべきかと疑ひて反問せるに對して、天使は彼に物言ふ事を禁じ、日滿つる時迄啞とせしめ、老姉エリサベツの受胎が神意に出づる事の證詞となした。

かゝる記事は聖書を信せず、信仰なき者には一個の戯曲としか見えない場合もある。著者自身も約三十年昔入信當初に於ては、同様に見過ごした。けれども信仰三十年、稍々靈界の光をかすかながらも仰ぎ得るに至つた今日、この記事の一つ／＼に對して然り然りと敬虔な思を以て答へざるを得ぬある靈動の響を持つ。笑ふ者は笑ふがよい。されど耳あるものは聴くべしである。

(五) 結婚と信仰

生物學的形質が生殖質によつて豫め決定され、その後の後天的發育はその範圍内に於ける延長であると考察される如くに、靈的關係に於いては、受胎と胎内に於ける聖靈の能動がその人の生後及び死後の靈的生活の形質を決定する一大要因になつてゐる如く考察される。即ち上述の如く、遺傳素質の内部に孕まれし靈的感能が胎

内時期に於ける靈的感應の度合に相呼應して伸展或は萎縮し、その結果が生後肉慾我慾との相對關係によつて、その人の生涯の品性を決定する一要素となるもの、如くに考察せられる。

我國に於ては學齡に達したる後は國民教育の普及により、世界何れの文明國にも劣らぬ迄に教育は發達したが、未だ家庭教育乃至最も重要緊切なる胎内教育に至つては暗黒時代である。こゝに光明が照り出でずんば、何時までも半分腐りかけし種子を懸命に培ふ愚かなる農夫の如くに終るであらう。而して胎内教育に先んじて、最も大切なるは受胎以前に於ける新郎新婦の信仰である。

信仰は單に夫婦が互に相和して行く事に於てのみ必要なものでない。最大の神への奉仕である神の子の出産に於いて、純眞熱切なる信仰なしに、靈的優良なる子孫は擧げ得ない。靈的優位が人類と民族の優劣を決定する最後の決勝線である。而して信仰は決して盜賊を見て繩を縛ふてはならぬ。永遠に至るものほど、その準備は長く且つ深きを要する。一年生の草は容易に生えるが容易に枯れる。天を摩する大樹は幾久しき歲月の用意がなくてはならぬ。信仰は更にそれ以上に大切であり

また根柢を要するのである。

今の時代にありて、智識よりも、富よりも、健康よりも、先づ第一に結婚に必要なるは信仰であると私は確信する。一方に於いて優生學の原則を重んずると共に信仰深く神の聖靈を呼吸しうる配遇を選ぶ事を勧めたい。

私の知人で今四人の愛兒を興へられてゐる一家庭がある。夫婦とも信者であつたが、まだその信仰の力が徹底せずその力は春光の如くに靈の胚種にまで深く及ばなかつた。その間に二人の愛兒が生れた、その後靈的一革新が行はれ、活ける神を拜し、活けるキリストを仰ぎうるほどに靈眼が開かれた。而して祈の中に聖靈の恩化による靈的能力を轟々と自らの中に受けうる迄に至つた。彼れと同時に妻なる姉妹も純眞なる信仰に生き、切々祈の中に神と靈交し、活けるキリストより來る聖靈を受くる深味に迄引き上げられるに至つた。かくして第三の愛兒が胎内にみもごりし當時より夫婦は勿論、全家族及び親しき者に至る迄その胎内の幼子の爲めに神に祈り求め、祈は呼吸となつて、聖の聖なる神の臨在の前に日夜を過ごし、父母の穢れし罪は許され、血は十字架によつて聖められ、幼子の上に神の聖靈が内住し給はんこ

とを切々に祈りつゝ、日夜を明かした。

かくして月滿ち安々と天使の如き女子を出産した。九百九近き大なる赤子を夫人は祈りの中に神の力に信賴して、産婆の手も要せず、手足も自由に任せて何の苦もなく、極めて自然的に出産した。最初の二人は容易ならざる苦痛が伴ふた由であるが、祈の中に孕み、祈の中に育くまれ、祈の中に生れし子は驚くほど自然的に産婆も間にあはぬほどに早く容易に生れた。こゝに先づ第一の新たなる體驗があつた。それのみでなく、その幼子の成長の經過に驚くべき異なる節々が多い。特にその靈的發育は驚嘆するばかりである。肉體の健康に於いては先きの二人に比して格段の相違を見ない。ただ病氣にかゝる事少なく、かゝつても祈による癒やしの應驗が著しい。肉體の形質に於ては先の二人と何等變化は認められない。普通である。強いて異なる點を見出せば眼光である。慈眼とも云ふのであらう。何とも云へぬ慈光が輝やいてゐる。特に私の注意を引いたのは、その靈性である。ガラスと寶玉の如き差がある。未だ四歳未滿なるに既に神心の姿は美しく、神々しくもこの幼子の中に花を開いてゐる。生れながらに人を愛し、人の罪を赦し、罪の責を負ひて人を

憐み勞はる心が燃えてゐる。下女がしくじりをする、茶碗を破して困つた顔をしてゐると直ぐ傍らから、下女の代りに母に御詫をしてやる。年上なる二人の子供がいたづらをする。四歳のこの幼子が姉の如き態度でいたわりつゝ指導して、神様に御詫の御祈をする。他の二人の靈はまだ冬枯の霜の下に昏睡してゐる時に、この幼子の靈のみは春の野邊か特別の温室にある花の如くに、すん／＼と伸びて行く。他の二人にはいろ／＼の人間的な惡癖が擡頭してくる。之をためるに母親は苦心するが第三の幼子にも同様に遺傳による惡癖の擡頭はある筈である。けれども、靈の力にて壓縮されて退歩しつゝあるかに見える。之は我らの體驗にても同様である。人の心は三道栓の如きで、一方の濁水が流れ出てゐる間は清水は止まつてゐるが、栓の方面を一轉して清水の方向に廻轉し、清水が流れ出だすと濁流は止まる。二重人格の者に於ても神の前に聖い思に滿ち溢れてゐる時は、惡心は出て來ない。惡心の跳梁する時は、神心の窒息してゐる時である。故に幼子の時より、また胎内の時より神心のみ力強く働き、惡心が窒息状態におかれる時は、惡心も遂に伸展の時機を失ひて、神心がより多く發展するに至る事を證してゐる。

かゝる子供は放任しておくも、自ら善惡を選択識別して、善より善へといよ／＼進んで行き、手数をかけずして優良なる人となり得る。然るに不良性を帯びて生み出せし子供は多くの手数と心配をかけて而も優生兒とはならず、家庭と社會とに如何に迷惑を與へるか知れない。國家の不經濟は此れに過ぐるはない。

先天的に優生兒を受胎すると同時に、胎教を重んじ、特に信仰による靈的力を傾注して、人類最高の目標たる神に近き品性の兒童をもうくること、之に過ぐる國寶はなく、之にすぐる國家經濟と國家の富はない。

第十章 遺傳と信仰

私は遺傳に關する貴い科學的研究の業績をその研究範圍に於て十二分に尊重し肯定する。然しながら人間には他生物の近づくことを許されない独自の因子が數々ある。その中にて最大なるは信仰であると思ふ。信仰とは神の生命と相連らなる生活の意である。遺傳の原理は結局生命界の原理である。不可思議今の科學より云へばかく云はざるを得ないなる生命が單細胞のプロトプラズマの中に包含されそれが根柢となつて、人間の生殖質から人間が生れ、猿からは猿が生れる。如何なる化學者も生殖質を分析して兩者を區別しうるものはない。今の處は矢張り善き樹は善き果を結ぶ。「その結ぶ果によりてその樹の善惡を知るべし」とのイエスの天界の鍵をこの地上の生命界の研究態度として當て嵌めるより他に道がない。生命そのもの、本質にはまだ今日の科學は觸れ得てゐないのである。然るに信仰は生命の根元を司り、その力を左右すべき驚くべき扉の開閉を司る役目に立つ。信仰は生命そのものを高めたり、低めたりする。聖書に言ふ「聖靈汝に宿る時能力 (Explosive

power) を受くべし」(使徒行傳第一章八節)と。この聖靈による能力とは單なる平凡の力ではなくて突然變異を興へる爆發的能力である。普通の場合には、樹を抜くにしても、枝を切り幹を斷ち、根を掘りて容易ならざる手数を要する時に、聖靈の能力はダイナイトを根元に仕掛けて一瞬間に全部の樹を根こぎに爆發さすが如き力を指す。曾てノーベル氏が爆發藥を發明し、その超爆發性を認めて如何なる名稱を興へんかと考ふる時、この聖書の一句を示され聖靈の能力、希臘語で *Dynamis* と云ふ、之を名として *Dynamite* と命名したのであつた。かゝるダイナイトの如き突然變異の能力を興へるものが即ち信仰上我等が體驗する聖靈の能力である。キリスト・イエスが彼を信する者に附與したのはこのダイナイトであつた。またイエスの身邊から放射能の如くに流出した能力はこのダイナイト的靈力であつたが故に、突然變異的な變化を人々に興へたのであつた。生來の盲者は見、聾者はき、跛者は歩み、癩病人は潔められた。けれども多くの人々はこの記事をそのまゝ信じない。然し私は自らの微分的な同質の體驗より之を信する。我らのありてなきが如き者にさへも聖靈の一滴だに盛られる時、神癒がある程度にまで行はれる。この事實を積分した

ものが、イエスの靈的癒しであらう故に、余はやがてこの記事が遠からざる將來信仰力の偉大者出現の時機に證明さるゝ時代のある事を豫想するものである。

聖書の傳ふる靈界の眞理の中心點の一つは確かにこの聖靈の世界を我らに指示したる處にある。この聖靈能力の作用を見失ふ時、確かに天上から日月を失ふたことになる。聖靈の働きが宗教なる世界に光明と熱とを與へ、一切の原動力となり、宗教なる實在を可能ならしめてゐるのである。この聖靈が人の心に對しては光であり、熱であり、力である。また暗黒を光明に、死を生に改造し、變異せしめる力である。

體驗者にはこの聖靈の力は一點疑ひ得ない存在の力であり、上よりの能力であるが、靈界に眼を閉ぢてゐる現代科學にとつては二百年昔の科學者の前に於けるビツチブレンドの原鑛より發する閃光にも劣つて科學的價値なきものとするかも知れない。然し、我等聖書の信仰に生くる者にとつては、ラヂウムの放射能にまさりてその實在と驚くべき能力を認めるものである。

優生學と宗教の關係を論ずる時に、最も根本的なものは、このダイナマイトの如き聖靈の能力が人に働きかけ、又人が之を信受してその内住を確實に體驗しうる時

に、如何なる作用と變異を遺傳因子に與へるかとの問題である。宗教的見地より云へば生物學的肉體はこの神よりの聖靈を感受すべき一つの器の用意に外ならぬ。電流に對する銅線の準備である。肉體的人類の優生は銅線架空工事の完成を意味する。之に電流が流れて始めてその目的を達する。聖靈を受け上よりの能力を着せられなければ、花粉を受けない雄蕊の如きである。眞の人間の生命發現は完成されないとい等は見る。

從來の研究に依れば、レントゲン線、酒精、ニコチン、水銀、磷、鉛、ペンツオール、メチレン青、キナ等が生殖質に作用して後天的第二次的變異の一原因となりうる實驗がある。然らば、それらの「負」の反應に對して「正」の前進的變異の作用をなすものが論理上からも存在せねばならぬ。私はこの前進的變異を行ふ因子の中、著大なるものゝ一つとして聖靈の能力を考へずにはおられない。

我等の精神的體驗の中にて聖靈による能力ほど驚くべく偉大なものを知らぬからである。信仰に堪へ、ある神秘的なる靈感に打たれて活動する時の肉體は、一つの細胞が異狀なる緊張を示し、更にこの状態が多年繼續すれば、遂には恰も血液

に抵抗素が生じたる時の如く、ある一種の力が肉體の内部に加はつてゐる事を經驗する、然らば最も生命的に密接の關連を有する生殖質にもある程度の作用が加へられる事は想像に難くない。こゝは科學的見地より見れば、夢想に類し一ケの想像にすぎない價值なきものなれども、宗教的體驗より肯定さるゝ問題なる故今後研究の一材料となるべきを思はせられる。

之を科學的に實驗するには、測定學上種々の困難を伴ふ故に、容易ならざる研究には相違なけれども、宗教は古來幾千年靈的新生と聖靈の内住を明かに體驗し來たり舊き性格が新らたなるものに一新さるゝ事實を繰り返し來りたるものなる故に、こゝに研究の大虎の潜在する事は殆んど外れざる事實なるを思はせられる。

宗教上に説く「聖潔」の體驗を持つ者は等しく之を首肯するのであるが、他の方法では如何ともなし難き心の穢れ、悪習と罪の根が、聖靈の光に照らさるれば、太陽の光線の前における結核菌の如く死滅する。また暴風の前に於ける糞糠の如く忽然として吹き飛ばされ、靈的に維新さるゝ事を屢々經驗する。その結果、顔は輝き、別人の如く變貌する。斯くの如く内部生命の變異が肉體全體に變化を及ぼす事なれば、生命

の貯藏庫たる生殖質にも何等かの影響あるべきは想定に難くない。由來基督教は血を聖むる宗教である。血が聖まると共に精神的形質が聖化され、やがて之が遺傳素因となるべきを思はせられる。

信仰より受くる生命の力が、精神的形質に少なからざる積極的變異を與へると共に、突然變異にも關連を有する可能性を推定するものである。

智能と精神形質が他の遺傳形質と同様に、遺傳し得るものたる事が遺傳學上確かめられたとすれば、信仰による精神的能力が優生學上、著大なる因子となる事は疑ひ得ない。こゝに優生學上、宗教生活の價值を認めざるを得ない。

第十一章 優生學と宗教

(一) 宗教と倫理道德法律

何れの宗教も靈魂の永生を説かざるはない。また如何なる人も永遠の來世を思はざるものはない。ただ現代人は思ふても永遠が不可解なるが故に、強ひて自己の小なる心にて解しうる現實に自己を拘束してゐるだけのことである。凡ての草樹が無自覺ながらも注がれた天性に従つて高く高く冲天に伸び行かんと競ふにまじりて、人の心は自覺と無自覺の差こそあれ、永遠を思慕せざるものはない。之れ天より授けられた生命そのものであるからだ。罪の生活の滅亡を怖れしめるは、滅ぶべき内なる罪夫れ自體である如く、人に永遠を思慕せしめるものは永遠を本質とする靈そのものが人の中に生きてゐるからだ。

かくも矛盾に満ちた果敢ない現實の人生にあつて永遠の幸福を思慕せしめる不思議なるものが存在する。それと同様に今一つの不思議な生命の他面が見出され

る。それは善と惡に對する正しき審判の要請である。

人生にありて最大の矛盾は、惡人は富み榮え、善人は虐げられ、惱む一事である。されど現實が如何にあらうとも、人の本心は惡は罰せられ、善は報いらるべきを要請して止まない。此の要請が外的に表現されたのが、法律制度である。而して之が内的に表はれたのが倫理道德である。即ち法律と倫理道德もみな宗教眞理の一面の光がもろもろの人心の斜面へ投げかけた影である。人の本心の奥より放射する光はどうしても善と惡に對する嚴正なる審判の要請である。

この世の所謂智者は法律と社會制裁を誤間化し、道德を蹂躪し、良心を麻痺せしめて迄現世を享樂し、自己の慾望を満たさんとする。王者の如くに富み榮え、豪奢を極むるものはこの世の不義者と狡猾者と姦惡者とである。彼等は外面を街ひつつも内心は正義の前に逃げ隠れる。審判の手を怖るるが故に、自己防衛策として、いよいよ正義と公明とを壓迫し、その蘗芽をも掻き取らんとする。現代はその代表的時代の一つである。帝部に一大震火災を降された當時、人々は一時は本性に立ち返つて「天譴」を直感し、悔改めの色さへ見せた。然し永く麻痺せる人心は、怖るべき天譴をも

忽ち忘れ去り、再びもとの中毒症に陥つて終つた。健忘症とは既に病が膏肓に入つて居る證據である。

後天的環境が如何にもあれ、遺傳素因はなほ深き生命の奥殿に於いてそこなはずに保存さるる如く、人の本心の奥殿に秘められた人類創造以來の純なる人心はなほ叫びつづけて止まない。「惡は滅ぼさるべく善は勝つべし」と。「不義は罰せらるべく、義は賞揚さるべし」と。若しもこの聲と叫が消え失せたならば、その時こそ地上から人間が消滅した時である。よし如何に健康と智識、法律と政治、經濟と生産の諸機關が完成したとて正義の光の失する時は即ち眞の人間の消え果てた時である。この暗黒地獄のやうな社會に比するならば、己れの非を悟つて神の台前に罪を悔いて救を求むる癩患と肺病と不具者の滿つる社會の方がどんなに祝福されてゐるか解らない。心の貧しき者は幸福なり。天國はその人のものである。

(二) 神の審判

人は自己の上に来る審判を怖れつつも他人の上には嚴正なる神の審判の疾く來

るべきを待ち望む。全人類も亦惡に對する嚴正なる審判の行はるる社會の實現を翹望して止まぬ。惡とは外面に現はれた行爲のみを云はない。神の聖慮に副はざる一切の思念が惡であり罪である。人間の本性はこの罪と惡の一切が寸分の誤差なく嚴格に審判さるべきを待ち望む。然り而してこの審判が一厘一毛の狂ひなく嚴正に臨む日のあるを聲高らかに叫ぶものが宗教である。

斯かる人生最大の聲を内部に聞きながら、現實が餘りに大なる矛盾と疑問に滿つる爲め、多くの人々は人生を不可解の淵に葬り去らんとする。果ては自己内在の嚴正なる神の聲さへその眞實性を疑ひ、懷疑の果てが遂に享樂主義と刹那主義と唯物主義に墮して行く。危いかな。現代人。彼等の大部分はいまだ底なき坑の斷崖に立ちつつ、その危機を知らずに滅亡の刹那に酔ふてゐる。

然るに、宗教眞理は、全人類の翹望せし神の審判が現代に來らずして、後の時代に來ることを警告する。いまその日は盜人の時を知らさずして來る如く刻々近づきつつある。現世の活動は恰も月の初日より晦日に至る間の貸借關係の如きである。ひねもす勞働するとも勘定は月末である。店舗は米、野菜、魚を毎日提供するも、その

日その日に報酬は與へられない。ただ記帖さるるのみだ。若し人間が一日を壽命の蟬蛸の如きであるならば、終日働きて積みし善、汗水流して提供せし愛には、何等報いられず、損をするものは自分であり、利得したものは働かずして暖衣飽食せし人々である。小さい虫の目で見ると、この人生の矛盾より飛躍するは困難である。乍併、一日總決算の日は近づいてゐる。善と惡、罪と救の總決算の日は刻々日々夜々近づいて居る。借りたるものは、その日には一厘一毛を償はずしては赦されない。汗と愛の血を流して働きし者の上には必らず報いられ一時間、一分の勞働をも見のがさず、に嚴正に計算されたる報賞は用意されてゐる。この全人類に係はる神の大審判が刻々到來せるを告ぐるものが、宗教の教ふる嚴かなる靈界の眞理である。特に聖書は之を血を以て保證する。この一大事實に對し血判して保證されたる神の約束の書が聖書であり、キリストの十字架がその血判である。神の御座より見れば、千年は一日の如くである。我々が五十年生きて、その生涯の間に報賞を望みまた邪惡の膺懲を求むるは三十分間勞働して給金を請求する愚かにして焦燥なる働人である。宗教は人間の本质たる靈の眞理を啓示する。之を鳥の目で俯瞰せねばなら

ぬ、

然るに靈界に高くかかれる虹の如き美しき輝きに對しても靈的色盲に陥れる唯物主義者には、靈界の實在そのものが、色盲者の前に赤色の世界が隠されてゐるやうに隠されてゐる。現代人ほど永遠の生命を思慕せず、善惡正邪に對する神の大審判を忘却し去つてゐる時代人は稀である。夏の後に麥と毒麥とをより分けられるべき秋の收穫時が刻々盜人の來る如く無言にて、極めて嚴かに迫り來りつつある一事を黄金と享樂とのみに耽る靈魂は氣づかない。科學者も哲學者も如何にしてパンを造らんか。何故に人はパンを食ふやとの研究と思考にのみ忙しい。彼等はやがて來らんとする大晦日の總決算の日の近づきつつある事に氣づかない。丁度一分後に迫つてゐる彼の大震火災の時刻に氣づかなかつたやうである。

あらゆる現代の科學と哲學と文化が拒否すると、神の大審判の總決算の日の來りつつある事を嚴かに叫ぶものは、宗教であり、聖書の眞理である。この總勘定の日には最も有意義のもの以外の何物をも我らは眞の文化とは稱し得ない。凡百の學術、藝術、法政、經濟一切のものが、この總勘定の日に於いて人類に對して何等の交渉なき

ものであつたら、一切は空の空である。この時に山の如く聳えて見ゆるものこそ眞の文化中の文化と云ふべきである。この時に高く仰がれるものこそ、信仰生活であると私は確信してゐる。

(三) 罪の審判

然り、宗教眞理は永遠生命と神の審判の實在を主張する。之は宗教家の僻目か乃至は主觀的迷妄か。私は言ふ。天地の秘鍵はキリストの一言の中にあると。曰く「われ天國の鍵を汝に與へん。地に於いて解く處のものは天に於ても解き、地に縛く處は天に於ても縛ぐなり」と

優生學が立つ基礎處理は遺傳學である。遺傳學は地に於て解き且つ縛ぐ生命界の眞理である。少なくとも二つの眞理を遺傳學は教へる。第一はメンデルの發見になるメンデリズムの原則であり、第二はワイスマンの發見になる生殖質の永遠存続である。

生殖質の永生は乃ち靈の永遠生の地上の雛型であり、メンデリズムによる子々相

續の原則は神の審判の地上に於ける顯現ではないか。

生命は永遠より永遠に至つて自由に流動活躍する神の靈の地上の寓である故に外形の顯現相には終始ある如く見ゆるも、その本質には死があり得ない。ただ神の光明に住むか、或はサタンの暗黒に住むかの差があるのみ。

遺傳の原理は叫ぶ。一度祖先が犯して生命の内部に受けたる傷は、子々孫々に末代永遠にその災厄は絶ゆる事がない。而もそれに關係して血の交はりなす者はたとへどんな純潔な過去の所有者であつても、惡業の血に結ばれたる後の子々孫々はみな惡しき祖先を持ちしと同罪に連帶關係の罪に問はれる。而して聖き血と結婚すれば、その子は聖き者の功德の爲めに惡業の罪も半減される恩惠の道は開かれてゐる。最も恐ろしきは惡遺傳の重婚である。罪に罪を重ねるものの滅亡は必定である。然し、如何に罪惡素因の深重なるものと雖も聖き血に結ばれば、聖化の希望はある。之れ罪人自身にては到底救はれざるもの、聖き他者の血による聖化の功德により滅亡より救ひ出される。之れ聖書の説く福音の眞理である。この聖き血にあづからざる者の末は、悉く滅亡である。聖き血に結ばる程度の深

淺に従つて罪の血の除かるる度合も定まる。然しながら幾千幾百代昔の祖先一人の罪の結果に對して連々として絶えず。綿々として繋がり子々末代迄も災厄を以て彼等に臨む。一人の發狂者、白痴、不貞潔の血が幾千幾億の子孫に彼等自身の責任なき苦痛と悲哀を負はしてゐるか知れない。一夜の不義が遂にかかる怖ろしい悪しき結果を永遠に残す。一時の不節制が末代迄も血を穢すことである。恐ろしきは罪の遺傳であり、同情すべきはその子孫の受くる患難と恥辱である。之れ神の恐るべき審判の現實でなくて何であらうか。

單なる肉の表面に起こりし傷は子孫に傳はらぬであらう。乍併、恐るべきは生命の奥に刻みつけられし罪惡と邪淫である。之は審かれねばならぬ。よし自分の一生涯に於いてその審判は起り來らぬことあるとも、何れの日にか必らず必らず起り來たる。古き生命の根株からは時來らば必ず古株が芽生えてくる。現代のアメリカニズムとマルキシズムの徒輩はこの森嚴なる生命界の眞理に目蔽ひして、春の日に解くる薄氷も知らずに底なき坑の上にて舞踏してゐる。何と云ふ恐ろしきサタンの餌食であることよ。

おのが血を終生穢すとあらば、如何に花の如く艶麗であらうとも、恐るべき遺傳の血とは結婚を敢てするものはあるまい。それに觸るるだに怖れおののく、こは後に來るべき審判を望み見て怖れるからである。優生運動家は極力之を抑制するであらう。之れ結婚は血と血の混合であるからだ。血は生命だ。生命は靈の肉衣だ。生命の汚穢はまた靈にまで及ぶ。一人の罪惡は子々孫々末代にまで及ぶと共に、またその人々の靈魂の滅亡にまで及ぶ。怖るべき哉、遺傳。嚴肅なる哉、神の審判。實に遺傳の原理は神の審判の地上に於ける雛形であり、やがて來るべき全人類大審判の豫表である。

誰か神のこの怖るべき審判から免れることが出來ようか。我らが犯せし罪の一つ一つは神の前に數へ上げられ、一厘一毛も償はずば赦されぬ。誰か自らこの山なす深重の罪を神の前に自力にて掻き消しうるものやある。惱める狂亂の精神病の遺傳者は狂ふ自己を自らの理性と智力にては到底抑制する事は不可能である。もし統制し得たならば彼は精神病者でないのである。

神の前に立つ罪人も同様である。自己の罪はどうしても自力では贖ひうるもの

でない。穢れたる血は自己の修養と努力と智力と學術とにて區別する事は不可能である。どうしても聖い血を受けねばならぬ。血を聖むるものは血だ。一點垢なき神の獨子の聖なる血こそ我ら罪に悩むる人類の血を聖むる唯一の天來の恩寵の泉である。人はこの恩寵の血に浴し、神の獨子の聖き血潮と汚れし者の血潮と置き換へられねば、永遠に滅亡より免れ得ない。神の審判の座に立ちて滅亡の火より免れて、神の勝利の座に救ひ入れられる事は不可能である。

宗教の奥義はこの永遠に至る血の聖化にある。近づき來らんとする人生の總決算の時機を眼前に髭髻たらしめつつ自らの穢れし血を神の聖き血にて洗はれ、罪の血が絶たれ、一新されて、神の生命に連結されること、所謂小羊の婚姻、ここに宗教の奥義があり、福音の心臓が横はる。

何と遺傳原理と生殖質の永生と結婚の三つが靈界眞理の地上に於ける雛形であるかが窺はれるでないか。それと同時に以上の三つが現實に實在する事を知る。その實體であり、本質である靈の審判と、靈の婚姻による救と永遠の生命が如實に實現する事を教へられるではないか。此處に優生學と宗教の奥義が微妙にも、イエス

の天國の靈の聖訓を通じて天地の中に大調和を示し正に來らんとする事實をその豫表としての關連に於て眞理を啓示するものである。

再び現實の人間の矛盾と不可解の問題をこの宗教的眞理の光の下に省みる時、人類も大自然も天も地も一切が新らしく装はれたる花嫁の姿に見えるではないか。

優生學は正に一個の神の審判書である。

傳遺の原理は、之れ神の靈界に於ける審判の眞理が地上に投げかけた影だ。

人は必らず審かれる。否、今も神は審きつつあるではないか。

遺傳の原理の中に注ぐ地上の眞理は、また同様に靈界を連結する眞理である。聖書が示す神の一大啓示は、これ地にある原理を天に聞く處のものである。

第十二章 靈的進化と優生學

(一) 靈的飛躍

靈性から言へば、無意識善は價值がない。意識善まで目ざめなければならぬ。目醒める爲めには、外部からの適當なる刺戟が必要である。人間は外部からの刺戟に順應して内部生命が目ざめてくる。生命が独自の性能に生きて創造的活力を發揮する迄には、先づ靈性を覺醒せしむるを第一の順序となす。如何によりき遺傳素因を有すとも、之を目覺ましめ、伸展せしむる後天的環境が不遇にして、終生壓迫の下におかれるならば、茨の中に落ちし種子の如く根淺くして天を衝く良材とはなり難い。この事實はまた反對に惡素質に對しても同様である。恐るべき惡素質も優良なる環境に終始して優良の性質が刻々伸展して止まず、心の中に常に天來の光が充溢しおる時、一時は擡頭しかけた惡質も人の音足に逃げ去る蛇の如く、また光の前に微菌の亡び行く如く、遂に跳梁跋扈の機會を與へず、に優質をして勝たしめうる。此處に

後天的なる教養の價值がある。教育は惡質を壓しつけ、善質を伸展せしめる爲に多大の貢獻をなすも、後天的教養中最大の力を具有するものは宗教であり、信仰であると信ずる。

種子について譬へば、教育は水と肥料の如く種子の内部發育を助け、また之れなしには優良なる果を結び得ない。されど光なき暗室に於いて如何に多量の水と肥料を施すとも、種子は却つて腐敗に傾くことこそあれ、澆漑たる内部生命は躍り來らぬ。智識の水と物質的富裕の肥料は内部生命の宿れる胚種を叩き起こすにはあまりに力が無さすぎる。生命は光と熱による。光と熱とは水と肥料の達し得ざる深味にまで浸透して、深甚なる作用を現はし、眠れる内部生命に刺戟をあたへて目ざましめる。

光は水と肥料との達し得ざる反應をあたへる。優良なる種子は優生學に依つて用意されよう。水と肥料は教育が擔任するであらう。天の光と熱は宗教が擔任する。

靈性發育の状態を考察するに、靈魂の擡頭と開眼の經過は、更に深甚微妙なる理法

が存するやうである。

靈性發育には、大自然發達の跡を人生五十年の間に經過するやうに思はれる。植物時代、植物時代、動物時代、人間時代、神性時代の五期があると思ふ。第一には天賦の神性はあれども地下にある朝顔の種子の對く、一見礦物と見分け難い。礦物の如く不感覺、無意識のまま、昏睡状態を過す時代がある。胎内時代より物心つき初むる迄の時代がそれだ。

第二期時代は、植物が光を好み、無意識に美花を咲かせ善良なる果物を熟せしむるに似て、吾等は無意識の中に眞を好み、善を行ひ、また惡を行ふ時代がある。幼年時代がそれであるが、成人後と雖も意識せずして、惡をくり返す場合が多い。否、ある場合には智者學者、この世の最高の權者にして白髮に至るも、なほ自己の罪を意識せず、善なりと考へつゝ、神の前に大なる惡と罪を敢てせる人々が如何に多くあるか知れない。斯かる人々の靈性はあるものは、礦物時代であり、あるものは植物時代に相當する。

第三期時代は、動物時代に入る。即ち前期に現はれざりし自由意識が目醒め初め

善惡に對する自由選擇が意識さるゝも、なほ己が欲する善は之を行ふ能はず、欲せざる惡は却つて行ひ、眞の我は肉の下敷となる。思ふ處は肉慾であり、欲する處は罪である。自己の内に宿る眞の我は肉の捕虜となり、苦るしみつゝ、も惡の跳梁を如何んとも制御し難い。心は神を求むれども發言權を喪失せる人の如く、ただ黙々として肉なる人の慾の下敷となりたるまゝ、引きづられ行く時代である。

惡に囚へられ、罪の常習慣性の人々の靈性はこの時代である。然し、萬人均しく時期の長短の差こそあれ、この時代の經驗を知らぬ人はあるまい。有名なるキリストの聖徒パウロが「あゝ我れ惱める人なる哉、この死の體より我を救はんものは誰ぞや」との絶望的叫びを發したのもこの時の聲である。聖書ローマ書第七章はこの時代を通過する全人類の代言であらう。

第四、人間時代。肉性の重き岩石の下敷となり居りし靈魂が漸く捕虜の鐵鎖より解き放たれ、靈性が自主時代に入る時である。今迄は動物の如くであつた。犬はどんなに主人から愛され、家族の一員として子供たちと同じく主人の側に待たしても、子供の如くに主人の言葉を犬は解し得ない。何物か自分に語りかける主人の氣配

は感ずるが何を意味するのだから一向に解らない。ただ解るのは食ふこと、飲むこと、家を番することだけである。それと同じく、第三期時代の靈には、如何に尊き神の聖言を読みかされても靈耳の閉されてゐる自分には、聞けども聞えず、見れども見えない。何物かの靈的氣配は感じて、それは何を意味するか全く五里霧中である。斯かる靈性の時代を私は自分の過去に於いて深く體驗する。否現在に於てさへ新らたなる神の光を仰ぎ得たる後に、すぐ一足先の自分を顧みても、その靈界の眞理については豚に眞珠であつた事に氣づく。日々に新らたにされる事が私たち神への巡禮者の眞實の經驗である。

この時の靈の聖化は一瞬時にして、犬の耳が開けて人語を解するに至つた驚嘆に相當する。人の心を賦與されないでは犬は人の言を解し得ない。動物の如き人の心中にも神心が盛られてゐるが故に、神の言を解しうる靈耳が開かれる。動物と人間との根本的相違はこの一點にある。人間の優越性はこの一事を外にしては第一義的要素を逸したものである。

私は時々思ふ。窓際のカナリヤが美しい聲で籠の中で囀つてゐる。人はどんな

に彼女の爲めに慰められるか知れない。カナリヤは自分の本能に従つて善く囀り得よう。けれども彼女は可愛い小兒たちの語りかける言葉の一言も解し得ない。全く東風が耳をかすめるのと同じに感じるであらう。如何に可愛がられ、何不自由なく餌食を給與され、家族の一員とせられても、カナリヤはどこ迄もカナリヤである。兩親の言を解する人の子とは質的に天地霄壤の相違がある。靈眼と靈耳が開けない時の我等の靈は、全く神の言がカナリヤの耳をかすめた人の言のやうであつたが、奇しきかな、曾て心靈上の堪え難き惱みの陣痛ありし日より新らたなるもの、生れ出でたその瞬間から、カナリヤは人の語を解し初めた。主人が何を命じ、愛兒たちが何を互に囁やいて、歡んでゐるかが解るやうに心の耳が開けて來た。こは實に人生最大の經驗である。今迄は主人の食卓よりこぼれしパン屑のみを待ち受けてゐた小犬が、主人を中心に全家族と共に人語を解し、食卓について共に感謝し、物語りつゝ、食事をいただけるまでに人心がついて來た。カナリヤと小犬とが人の子に造り代へられた。實に驚くべき飛躍である。ダーウキンの進化論より云へば小鳥と小犬が人類にまで進化するには幾億萬年を數へねばならぬであらう。然るに靈界の體

驗としてこの幾億萬年の進化を一瞬時に成し遂げうる不思議がある。實に驚くべき靈的飛躍である。暗黒の胎内より耀々と輝く、光明の天地に踊り出でた赤子の誕生にもまさり、一夜にして堅く鎖せし蕾が、美しい花に化したに勝る飛躍的事實である。

私共の心靈上には確かに斯かる體驗がある。この體驗、この靈的新誕生なしに、實は人類は眞實の人間とは稱へられないと私は信じてゐる。而してこの靈的新誕生は智識によらない。修養力行によらない。無論地位名望と富とに何等の關係がない。却つてそれらは人々を傲慢ならしめ、眞の光の被覆物となる怖れさへある。大切なものは碎けたる靈魂、貧しき心、罪に悲しむ心、飢ゑ渴く如く義を慕ふ心である。智識、力行、その他のものは單なる補助劑である。あつたがましたとの第二義的のものである。肝要なる第一義は眠れる心勞が飛び起こされるやうな生命の光、萬貫の重量の巖をも吹き飛ばす聖靈の力、これなくしては到底カナリヤと小犬が人心に飛躍する如き一大變化は起こらない。キリストが「人若し新たに生れずば、神の國を見る能はず」と仰せられた新生の意がこゝにある。

人はこの靈的新生なしには神を見る事は不可能である。カナリヤも小犬も主人の語る氣配は感じられる。草花の蕾の蕊も、豎き、蓓と花瓣に蔽はれつゝも、陽光の明るみは直感しよう。けれど太陽自身の直射する光は拜されない。第三期迄の人の靈には、神在し給ふとの豫感と氣配はうすく、ながら誰人も感じうる。けれども神の光を直接に受け得ない爲めに、ただ氣配のみにて、確實に活ける神の光を拜し得ないのである。故に知る。吾等は神を見て後に神を信するのでない、内在の靈が開眼して後に神の世界が見えてくるのである。

第四期に入つた靈にとつては、天の太陽の存在をどうして疑ひ得よう、存在の理論を物理学に依つて學んで後に、太陽が存在するのだと信するのでない。物理学を學ばざる前、幼兒の眼は、吾が眼に太陽が見えるからその存在を確信しうるのである。こゝの花は紅であり、柳が緑であるとの理由は、ただ見えるからしかく信するのである。こゝ迄來ると信仰の内容は、しかく單純である。幼兒が母の顔を見て母と信するにも等しい。世の科學者が神を求めつゝ、神を信じ得ない唯一の理由はこゝにある。あらゆる科學が實驗に基礎を据ゑる如く、信仰は靈的實驗に基礎を据ゑる。こゝに兩

者の関係がある。微妙にも科學的眞理探求の筆法と呼吸はまた神の世界のものだ。ただ異なるは物質的實驗の代りに靈的實驗を以てする事だ。カナリヤと小犬とが人語を解する飛躍的實驗を己のが心靈に體驗する一事に歸する。

(二) 信仰の道

然らば小犬はどうすれば人間の言葉を解しうるに至るか、第三期の靈は如何にせば第四の靈的狀態に飛躍しうるか。この方法論が即ち信仰の道である。自然科學の基礎觀念にC.G.S.體系がある。それと同様に、「聖書の眞理」と「人間の罪」と「キリストの死」の三つの基礎原理が判明し、その觀方とその方法論にて自己の心を貧しくして待ち望み、心を真空状態にして凝視してゐると、その時、目未だ見ず、耳未だ聞かざりし光と聲に打たれて、さしも堅く鎖せし胸が豁然と開けて、新たなる世界を發見するに至るであらう。

かく靈眼靈耳が開かれ、永遠の世界が見え來り、神の天地宇宙經綸の内容とプログラムが明瞭になつて始めて、有意義なる眞實の人生が歩み出される。眞の價値ある

人間生活はこの光明界に各人の靈が開眼されて後に出立する。それ迄は暗夜に歩んだ道であり、黒い紙に手習した一綴の草紙である。

文化も文明もこの時期以前の靈魂の所有者にとつては、拙劣なる馬術の人の前に立つ名馬であり、小兒に持たせた名刀である。ある哲人は云ふた。「神を教へざる教育は狂人に手渡したる武器だ」と。今の我國の状態は正しくこの言を裏書きしてゐるのであるまいか。

第五期時代の神性時代。新誕生したる靈も即刻には聖化されない。「外なる人は日々に朽つれども内なる人は日々に新らたなり」と聖パウロの告白した如くに日々夜々全き聖潔に至る道を精進し行く。一步一步神に近づかんとする信仰の旅路が始まる。この旅路にとつては死は一夜の暗黒の如く、輝く旭日はその背後にすぐ待ちうけてゐる。彼には最早や死はない。日々夜々久遠に神の前に立ちぬいての聖なる道場の生活が始まる。神に對しては奉仕、人に對しては愛、自己に對しては刻々自己靈魂の彫刻。日々夜々が恰も振り上げては打ちおろす鑿の如く、擧げてはおろし、おろしては上げる。その度毎土にまみれし泥中の丸太が水で洗はれ、日に乾さ

れ、一撃一撃打ちおろす度毎に丸太は尊くも氣高き神の姿に變り行く。世の患難と苦勞の鑿のハツシと打たるゝその時が、堅き節が取り除かれて神の姿の目と鼻のつき行く時である。人生苦難の一切はこの鑿の一打ちの中に解脱しうる。

神の姿に似る聖化への道、これが人生の本筋の道路だ。優生學も倫理も道德も藝術もあらゆる機械文明も學術も一切がこの道路普請のセメントであり、砂利であり、アスファルトである。路傍の廣場に積まれたまゝセメント袋が山の如くにあらうとも、單なる一存在としては兎も角、久遠の生命道を歩む旅人には何の助けにならう。むしろ一掬の清水に幾倍の功德かあるか知れない。文化と文明がこの全人類聖化、神への道に對して何の交渉も持たない單なる存在であり、唯富豪と爲政者の關與する處のものであつたら、その存在こそ路傍の小石一つと何處に相違があるか。

(三) 人生は靈的産褥

人の肉體は日々に墓場へと急ぐ。されど内なる靈性は日々に新たにして永遠に不死であり神を目がけて進む。人生五十年は短かい。靈の生活は久遠だ。人生五

十年は、歸結する處、一個の靈的産褥である。五十年を支ふる肉體は九ヶ月の胎内生活を要するが、永遠に生くる靈性にとつては地上五十年の靈的胎内生活を要するのである。地上生活は、誠に誠に蒼穹と大地とを母胎とする一個の胎内生活である。何が生れ出るのか。永遠に死なき神の子の靈が誕生するのである。

醫家は云ふ。人體は母體にて單細胞より出立して生物數十億萬年の進化の過程を僅か九ヶ月に通過するのである。私は思ふ。深き昏睡状態にありし人の子の靈は、蒼穹と大地の胎内生活に於いて上述せしめ、礦物時代、植物時代、動物時代、人間の時代の過程を通過して遂に神の姿に似たる神人合一の境地にまで聖化し行く。その目的達成を目標としての地上五十年であつて他の何物でもない。

故に若し胎兒にして、臨月最後の過程に至らず、大脳も脊髄も四肢も未だ完からずして發育の途中にして生れ出づる赤子あらんか、到底人間社會に伍する能はず、一日も陽光を拜し得ず、一掬の空氣だに呼吸を許されずして暗より暗に葬られるであらう。人生五十年にして、人間の本質たる靈性が植物時代、動物時代に停止したるまゝ、迷路より救ひ出されずしてこの地上の胎内生活を終らんか。彼等が如何に巨億の

富を所有するとも、彼等は全く靈的畸形兒である。斧は既にその根におかれてゐる。凡て善き果を結ばぬ樹は切られて火に投げ入れらるべきだ。

禍なる哉、現代！殆んど凡ての智者、學者、國民は肉體の死後に展開する靈界の永續を思はない。死は最後であり、現世の勝敗が全部だと考へ切つてゐる。現代に旺盛する現世主義、享樂主義の水源地はみなこの死後の永生と神の審判を知らざる錯覺に存する。彼等は母の胎内に於ける胎兒が次代に待つ地上生活の存在を知らずして、自問自答して云ふ。この狭く且つ暗き胎内にあつて何の爲めの眼ぞ、光はないでないか。何の爲めの鼻だ、空氣はないでないか。何の爲めの口ぞ、一掬の水さへないでないか。臍の緒と胎盤、この二つさへあらば之で大願成就だ。誰人がよく眼と鼻と口の必要を説くかと。かくして彼は叫んだ。「若かず、臍の緒と胎盤の巨大なるには」と。然り、暗黒の胎内に於いては臍の緒さへあらば生活問題は解決しうるであらう。その如くに地上生活の次の時代として待つ靈界生活を知らざる者にとつては、此の世にありて芋蔓の如くに富豪と権力者に縋つておれば安泰であるであらう。また巨大な胎盤の上に動搖を避けて安眠する胎兒の如く、巨大なる邸宅と巨大なる

財産を抱いて生活すれば安眠が出来るであらう。然り、人よ。臨月は刻々と胎兒にのぞむ。時來らば、見よ、忽ち生命を頼みし臍の緒は切り落とされ、巨大なる胎盤はもぎ取られて火中に投せられるであらう。かくして次代へと生れ出たる胎内の智慧の子は如何。眼なく、鼻なく、口なし。光あれども見えず、空氣は全身を包めども吸ふ能はず、母の乳房は待てども口は開き得ず。この時に至りて不信の胎兒悔改むるとも時は早や既に遅し、暗黒の怖ろしい永遠への死は不信の胎兒を待ち、紅蓮の焔はその畸形兒の運命を待つ。

生命には飛躍的變化こそあれ、斷じて終末はない。之れ生物學の證する處、また宗教眞理の啓示する處である。愕然として醒むべきは今だ。現世主義に生くる人々に私はこの小著を通じて眞心から警告を呈したのである。

外なる肉衣は日々に朽ち果つる。されど内なる靈は日毎に新らたに死の峠をも突破して神の聖座をさして登り行く。人の本質は靈である。靈は胎兒の如くに地上にありて發育し行く。初めには種子、次ぎには苗、次ぎには莖、葉、枝、花、遂に充ち足れる穀となりて地に落つる。地は果實を受けて一倍萬倍の新生へと永遠に伸び行く。

優生學は優良なる種子を提供するを任務とする。教育は良き地と良き肥料と水とを提供する。然り而して天の光と熱を提供するものは宗教である。天の光なくんば、水と肥料の土壤あるとも却つて腐敗の因をなす。而して天の光だにあらば巖上の松の如く水、肥料、土壤に乏しくとも健全なる松の果は良く山なす巖石をも打ち割りて伸び行く。優良なる種子と雖も天の光なしには生命は伸びない。されど種子なくんば天の光ありとも緑の野邊は一變して砂漠と化してしまふ。

優良なる種子と適當なる土壤と水と肥料、この兩者を光明の天日輝き春の光をもて大地を暖める時、萬物甦生し、冬枯の天地は忽ち陽春の緑の野邊と百花爛漫の新天地に化す。この三者の中最も大なるは天の光である。

優生學と優境學と活ける宗教との三者が三位一體となつて始めて、全人類は甦生し、人類最高の目標として各民族相愛協調して全人類に係はる究極の目的を達成しうるに至るであらう。

第十三章 靈的發育と環境

- (I)=肉性 (1)食欲 (2)性欲 (3)睡眠欲 傲慢
 (4)衣欲 (5)貪欲 (6)憤怒 嫉妬
 怒恨 (7)我欲 (8)名譽欲 (9)財欲
- (II)=性能 (1)智能 (2)情操 (3)意志力 (4)藝術欲 (5)研究欲 (6)征服欲
- (III)=靈性 (1)罪意識 (2)神の直觀 (3)信仰
 (4)希望 (5)愛 (6)永性 (7)眞
 (8)善 (9)美 (10)平和 (11)寛容

(一) 靈的發育と環境

優生運動が効を奏して優良天分を豊かに盛られたる場合について、その内的生命

の伸展を考察するに、こゝに二つの重要な事項が見出される。

第一は、人類に於ては自力にて純粹優生者を作り難き事である。細菌の如くに純粹培養しうるものならば、その選ばれたる優良性能のみが環境の如何に係はらず伸展し來るであらう。故に悪素質の伸展を防いで、良素質を殊更に伸ばす特別の教養は不必要となる。乍併實際に於いては、現在の人類に對して之を求むるは不可能である。たとへ、放任中にその優良性が発揮さるゝと假定しても、あるものは三分の一あるものは二分の一、あるものは四分の三、あるものは一〇〇パーセントとその環境により伸展を異にするであらう。この環境の影響についてはキリストの教訓中の種子播きの譬が最も適切に言ひ現はしてゐると思ふ。斯くの如く、たとへ優良性質を純粹培養を爲し得たとしても、後天的環境が多大の重要性を有することは明かである。

第二に、實際の場合に於ては現代の我等の血は幾萬代かの祖先を有するが故に、その中には優良分子もあらうが、最悪分子もあり、アルファよりオメガ迄各種各様の素質が混在してゐるから、普通の場合にはあらゆる善悪各程度の素質が混在し、その混合程度の均一に近きものが最大多数を占めてゐるに違ひない。故に悪素質も善良素質も同様に春雨の後の大地からあらゆる雑草が機會均等的に萌え出る如く、人の心の畑より善悪混淆して伸展せんとするのが實際であらう。故に昔の佛者は云つた「傀儡師肩にかけたる人形箱、鬼を出さうか佛出さうか」と。鬼も出れば佛も出る。

佛心と鬼心とが猫の目の如くに目まぐるしく交替して現はれくるのが凡夫の常である。故に如何に優生運動を着々と進めても、極端なる悪質は三四代後には除かるるものありとするも、その主要部を占める民衆は、何れも鬼と佛とを山の如くに積み込まれてゐる人形箱たらざるを得ない。たとへ優良分子が優勢となり得ても牛馬と異なり、人間には自由意志があり、一朝誘惑に陥らんか、聖者の如き人も忽ち急轉直下地獄の火に投げ込まれるやうな失策もなしうる。ジョン・パンヤンの天路歷程などはこの間の消息を如何にも如實に表現してゐる。人類の行程は一學術が指示するほど簡単なものでない。優生の原理は科學的眞理なる故に極力この方向に進展を計るべきも、また同時に優境を一日も等閑に附してはならぬ。

第一及び第二の場合、何れも優生運動と共に優境の必要な事を説いた。更に一

言したきは優境中、何れに中心點を置くかとの問題である。家庭生活、學校教育、職業、經濟關係その他種々あらんも、何を標準として優境、逆境の境界線を引かんとするか。優境とは、富と權勢と地位と學術と長壽と健康とを勝ち得しむるに足る境遇を言ふのであるか。人はたゞ富と權勢と長壽とを獲得したらば優勝者でありうるのか。否！、それらは第二義的であり、斷じて第一義的でない。外衣であつて生命ではない。

人生の優勝劣敗の決定とその判斷の標準は一つに人間の本質たる靈性發育の程度に係つてゐる。靈性が最高まで發育したるものが最高の優勝者であり、靈性發育が零の人物は如何に巨萬の富王侯の位にあるとも最大の劣敗者である。故に靈性を最高程度まで伸展せしめるに最適なる境遇を最大の優境と言はねばならぬ。かく優境の標準が定めれば、從來考へ來りし世の優境が實は劣境であり、また反對に世の人の認める逆境が優境である場合も生じうる。

この關係は一つに内部生命が伸展力と外界よりの刺戟との相對的關係に依つて定まる。即ち前者が常に後者よりも大なる時は生命は刺戟に會ひて刺戟なき時よ

りも更に偉大なる進展を示す。乍併、前者が後者よりも小なる時は、外界の力に壓迫せられ内部生命は退化する。進化と退化の主要因子はこゝにある。即ち

環境の力 \searrow 1 この場合は進化となる。

環境の力が大なるだけ内部生命はいよいよ増大する。

環境の力 \swarrow 1 この場合は環境が如何に物質的に優良に見えても、却つてそ

れが躓の石となり、内部生命は退化し、悪化する。世の所謂不良少年と放蕩息子が幸福なる家庭より續出するのは此處に原因する。

(二) 優境學の中心軸

斯く考察し來るならば優境の内容についても吾等は甚大なる注意を要する。人生窮極の目的たる靈魂發達、換言すれば靈魂永遠の救の爲めに如何に外界を指導すべきか。此處に優境論の中心軸が存すると思ふ。

それに就て一考しておきたきは、宗教體驗より觀たる靈性發育の順序とその機構とである。

靈性が胚種の地位を占め、智性意その他の性能が胚乳の位置につき、肉性が殻の如く外輪を形造る。先づ外皮が大地より水を吸収するのも胚種が萌え出でん爲めである。外皮と胚乳とが永存せんが爲めでない。第二に胚乳に深甚なる變化の惹起さるゝも胚乳自身の生存の爲めでなく、中心部に未だ睡れる胚種を萌え出さしめんが爲めである。胚種一つを伸ばさん爲めに外皮も胚乳も共に犠牲となる。胚種は主人であつて外皮と胚乳は下僕である。肉性と智能は靈性を伸ばさん爲めの下僕であり、守役である。肉性と智能とが靈性の主人ではない。正しい人格とは靈性を主人公として、肉と智とが下僕の位置に働くものを云ふ。罪とは肉と智が靈性を下敷にし蹂躪したる状態を云ふ。ある時一人の子供が二つよく實つたチューリップの球根を母からもらひ庭先に植ゑた。一方からはやがて美しい新芽が萌え出た。然し他方は如何に水を注ぎ肥料を加へても芽生えない。それで取り出して調べたに、外見は他のものと同様に何一つの傷もなく立派である。母は試みて切斷して見させた。するとその球根は外皮も内部も美事に充實してゐたが、肝腎の胚種が蝕まれて腐つてゐた。母はそれを見せつゝ、宗教的眞理を子供に教へたと云ふ物語が

ある。世の教育と道徳は外皮と胚乳の美事なるを賞讃する。けれども宗教は常に胚種に一切の焦點を合はせて凝視する。茲に相互立脚地の相異がある。

人間は一個の靈的種子だ。我らの物慾、肉慾もまた學問智能も世の一切は、たゞ内なる實を完全なる姿に芽生えさせ、結實せしめん爲めである。靈性の完成が目的であつて、肉と智能とは手段である。手段は目的に奉仕し、その犠牲となる。之が靈界の原則である。

手段の爲めに目的を犠牲にすること、之が反逆であり、神への一大罪惡である。罪の意識の根本義はこゝに存する。『現代を代表する一大錯覺は手段を目的視する一事にある。』その結果は今日の如く全社會が行き詰る。當然な歸結である。この過失を驟然悟つて正しい位置に復歸する。之が悔改である。

肉性の外皮が第一に外界からの刺戟を受けて目ざめる。幼年少年時代の發育は先づこの順序で始まる。第二に胚乳の活動期に入る。智能その他の性能が著しく伸び、その變化進展に主力が移される。之が青年時代の經過である。第三に胚乳の變化と同時に胚種の靈は漸く擡頭しかけ、新生への備へがなる。かくして新芽が萌

え出る。双葉が天をついて伸び行く時には、既に外皮は脱落し、胚乳はその主力を胚種に譲るのが天地自然の原則である。胚種が未だ昏睡状態にある時は、外皮は未だ落ちず、胚乳もなほ膨脹して主人顔をしてゐる。我等の周囲の人々になほ肉慾の外皮が執念にも猛威を逞しくし、主智主義に生くる人々は、之れ靈性が未だ黎明以前なる事を示すのである。而して自ら肉慾の醜さに心打たれて抑制せんとしても解脱し得ざるは、靈性が芽生えないからである。一朝春光に觸れて靈性が芽生えるや、欲せざるに自然と肉の穢れから解脱し得るに至る。パウロが「肉に従ふ者は肉の事を思ひ、靈に従ふものは靈の事を思ふ。肉の念は死なり、靈の念は生命なり、平安なり。肉の念は神に逆ふ。それは神の律法に従ふ事能はず。然れど神の御靈汝の中に宿らば、汝は肉に居らで靈に居らん」(ローマ書八章五―九)と云ふたのは眞理である。

神の光が我等の心に宿り、靈が目ざめて、外殻を破つて新生し、双葉を出だしさへするならば、おのづから勝ち難き肉慾に打ち克ち冷やかな智能主義の冬枯の野邊はおのづから春の歡喜に變化してくる。之は水の高きより低きにつく如く自然であつて少しも無理がない。之が眞正なる人間發育の順序であり、機構である。宗教眞理

之を教へる。

然るに世の法律と道德とは、先づ外皮をもぎ取り、胚乳を搾りとつて後に人格を完成せんとする。こゝに根本的錯誤がある。かくては生命は枯れ行く外に道がない。外形を改め、道德を守らせて後に人格者にするのでない。先づ第一に神の光を仰がせ、内的生命に一大革新を起こし、靈性を芽生えさせ、胚種の形より双葉の形に造り代へて後に、おのづと外皮と胚乳の脱剥を待つのが宗教である。故に法律と道德とは、惡人を惡人のまゝ、残しおいて、善人たれと鞭打つものである。然し宗教は先づ惡人を善人に造り代へおいて後に善を行はしめんとする。此處に兩者の根本的相異があり、社會の根本改造の機構がこの原理に存するのである。

(三) 肉 と 靈

肉性とは單に食慾、性慾等の直接的肉慾を指すのみならず、同時に肉慾の根より實る果をも云ふ。憤怒、嫉妬、怨恨、貪慾、物慾、傲慢、名譽慾、自己中心慾等も之れ肉の念である。聖書に「肉の念は死なり。」また「罪の拂ふ價は死なり」と教へてゐるのはこの意で

ある。更に「兄弟を怒るものは殺す者と同じく審判にあふべし。」また「色情を懷きて女を見るものは、既に心のうちに姦淫したるなり」とイエスが山上垂訓に教へられたのもこの理を云ふ。

靈性とは活ける神を直感して、母と子の間に生命の相通ふ如く、神を父とし、父と子との間に靈的交通 (Vital touch) を直感する性能を云ふ。之は眼が光に觸れて光明を意識するにまして、人の靈は神の光に觸れて心躍るものである。眼があるから光が見えるのでない。光が天地創造の時より存在したから眼が出来たのである。眼のある事は光存在の證據である。我らに神を求むる靈能のある事は、神存在の何よりの確實な客觀的證據である。

神の光に觸れて靈性が目ざめてくると、眼が暗黒を意識する如く、第一に我らは罪を意識し始める。世に未だ罪を犯した事はないと公言する人がある。彼の靈が未だ地下に埋もれてゐる事の自己告白である。第二に暗を去つて光に住まんと願ふ、是が悔改である。第三に母を見出した子は何よりも母に頼らんとする。母への絶對信賴、之れが神への信仰である。第四に母の懷にあるが故に安心する。之が安心

立命である。第五に、母より數々の賜物を受くる。故にまた同様に價なくして同じ賜物を隣人に分け與へんと心が起る。是が愛である。故に吾らは神を知らずしては本當の愛は起らない。第六に神の光に照らされて全世界を見返す故に何が眞であるか、何が善であるか、何が美であるかが一目瞭然判明してくる。光なき暗夜に眞も美も善も分らぬ。眞善美は神の聖なる光を仰ぎ得て後に、眞正の姿を現はしてくる。何が眞理であるかとは重大な問題であるが、神の本質に觸れたもの、それが眞理である。何が善であるかは哲學上一大問題であるが、宗教的に見れば極めて簡單明瞭である。神の心に副ふこと、之が善であり、然らざるものが惡である。イエスは言ふた「女の生みし内にてバプテスマのヨハネより偉大なるはなかりき、されど天國に於けるいと小さきものも彼よりは偉大なり」と。カント、ヘーゲルの如き大哲人は人間の生んだ最大の碩學であつたであらう。けれども神の心を識り得た信仰の凡夫はむしろカント、ヘーゲルよりも更に偉大なる奥義を悟り得てゐるのである。人は齡を重ねて世の知識を學ぶほど、信仰の世界の偉大なるに讚嘆せざるを得ないであらう。